

藏小路西遺跡

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内
埋藏文化財発掘調査報告 2

1999年3月

国道工事事務所
教育委員会

くらしょうじにし
蔵小路西遺跡



1999年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

一般国道9号は、京都市を起点として山陰地方の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路です。

建設省松江国道工事事務所においては、出雲市内的一般国道9号の慢性的な交通渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、出雲バイパスの建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当出雲バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の協力のもとに平成8年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成8・9年度に実施した遺跡調査の成果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成11年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

序

この報告書は、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受けて、平成8・9年度に実施した一般国道9号出雲バイパス建設予定地内に所在する蔵小路西遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

遺跡の所在する出雲平野一帯は県内でも有数の遺跡の宝庫であり、原始・古代の遺跡が数多く存在しています。また、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』にも広大で豊かな奈良時代の様子が描かれており当時をしのぶことができます。

本遺跡は出雲平野のほぼ中央に位置しており、東西約600m、南北40m余りに及ぶため、調査もかつてない大規模なものとなりました。

調査の成果としてまず注目されるのが、今まで全く知られていなかった鎌倉時代から室町時代頃の武士の館跡の発見です。館跡は周囲を濠で囲まれた一町四方（約1ヘクタール）の規模を有するたいへん立派なものです。館の主はかなりの有力者と思われますが、中世朝山氏惣領家の館ではないかとする説も提示されています。館跡からは、建物や井戸などのほか館の濠に架けられていた橋の一部も発見されました。また当時の暮らしぶりを示す出土品のなかには、中国や朝鮮半島から輸入された青磁や白磁などの陶磁器のほか、備前や常滑焼などがあり、この時代の商品流通の実態を知る手がかりとなるものです。しかし、今回の調査は館跡の一端を確認したにすぎず、今後、考古学、文献史学など多方面からの調査研究が期待されます。

さらに、この地に館が築かれる以前の弥生時代の終り頃（約1,800年前）と縄文時代の終り頃（約2,300年前）にまで遡る人々の生活の痕跡も確認できました。弥生時代の終り頃の神戸川水系の一部と思われる川跡は隣接する姫原西遺跡や小山遺跡などでも見つかっており、当時の地形を窺い知る貴重な資料といえます。また縄文時代終り頃の遺跡は、出雲平野では大めずらしいものです。いずれも時代の変革期にあたっており、当時の出雲平野の開発の歩みと自然環境の変動を知る手がかりとして注目されます。

本書が、この地域における人びとの暮らしやそれを取り巻く自然の営みを後世に伝える基礎的資料として多少なりとも役立てば幸いと思います。

最後になりましたが、発掘調査および本書の刊行にあたって、御協力頂きました地元の方々をはじめ建設省松江国道工事事務所ならびに関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

島根県教育委員会教育長

江 口 博 晴

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成8・9年度の二か年にわたって実施した、一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査の報告書である。

2. 発掘調査を行った遺跡と地番は次の通りである。

　　蔵小路西遺跡　出雲市渡橋町227番地ほか

3. 調査組織は次の通りである。

　　調査主体　島根県教育委員会

〔1996（平成8）年度〕　現地調査

　　事務局　島根県教育庁文化財課　勝部昭（課長）、森山洋光（課長補佐）

　　埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、古崎藏治（課長補佐）
　　渋谷昌宏（企画調整係主事）

　　調査員　足立克己（調査第4係長）、高塚久司（教諭兼主事）、細木啓義（同）、
　　渡部裕（同）、池淵俊一（主事）、間野大丞（同）、田中強志（臨時職員）、
　　横山純子（同）、月坂雄一（同）、原喜久子（同）、永戸麗子（同）、
　　舟木聰（同）、

　　整理作業員　神谷登喜美、玉木順子、鉄尾愛子、西郁子、原昭枝、

　　調査指導者　田中義昭（島根大学教授）、井上寛司（大阪工業大学教授）、

　　池田満雄（島根県文化財保護審議委員）

　　小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）

〔1997（平成9）年度〕　現地調査

　　事務局　島根県教育庁文化財課　勝部昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）

　　埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、古崎藏治（課長補佐）
　　渋谷昌宏（企画調整係主事）

　　調査員　足立克己（調査第4係長）、高塚久司（教諭兼文化財保護主事）、
　　細木啓義（同）、後藤達夫（教諭兼主事）、大庭俊次（文化財保護主事）、
　　間野大丞（主事）、中川寧（同）、伊藤徳広（同）、田中強志（臨時職員）、
　　田中玲子（同）、月坂雄一（同）、原喜久子（同）、永戸麗子（同）、
　　影山厚司（同）、岡本育子（同）、横野純弥（同）

　　整理作業員　江角シゲ子、大田晴美、岡崎美津恵、笠井文恵、金篠郁子、

　　神谷登喜美、西郁子、原昭枝、三上恭子、

　　調査指導者　藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館助教授）

〔1998（平成10）年度〕　報告書作成

　　事務局　島根県教育庁文化財課　勝部昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）

　　埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、秋山実（課長補佐）、
　　川崎崇（企画調整係主事）

調査員 足立克己（調査第4係長）、間野大丞（主事）、月坂雄一（臨時職員）

整理作業員 佐々木順子、田中路子、羽島ひとみ、三上恭子、渡部恵子

4. 平成8・9年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部

〔1996（平成8）年度〕 布村幹夫（現場事務所長）、

中島勉（技術員）、周藤美奈子（事務員）

〔1997（平成9）年度〕 布村幹夫（現場事務所長）、

中島勉（技術員）、松近秀夫（同）、篠原律子（事務員）

5. 自然遺物及び自然科学分析は次の方々のご協力を頂き、その結果を収録した。

植生環境及び便所遺構総合分析：金原正明、金原正子（環境考古研究会）

花粉及び珪藻分析：渡邊正己（文化財コンサルタント）、人骨：井上貴央（鳥取大学医学部教授）

この他、古環境の変遷については下記の方々から多くのご教示を賜った。

徳岡隆夫（島根大学教授）、山内靖喜（島根大学教授）、中村唯史（日新コンサルタント）

6. 出土した中世土器の整理にあたっては島根県埋蔵文化財調査センター職員のほか下記の方々からご指導を賜った。

森本朝子（福岡市教育委員会）、吉村正規（京都市埋蔵文化財調査研究所）、百瀬正恒（同）、

中野晴久（常滑民俗資料館）、垣内光次郎（石川県埋蔵文化財センター）、堀内明博（古代学協会）

7. 掘団中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系X軸の方向を指す。従って、磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を指す。

8. 本書に掲載した遺跡の位置図（図2）、トレーンチ配置図（図3）、調査区配置図（図4）は「出雲市都市計画図」を使用している。

9. 遺物の整理、実測、図版の作成は調査員のほか以下のものが行った。

荒川あかね、景山光子、金森千恵子、神谷登喜美、佐々木順子、瀬川恭子、多久和文子、

陶山佳代、田中路子、錦織美千恵、羽島ひとみ、三上恭子、渡部恵子、

10. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、おもに間野が行った。なお一部の撮影については、奈良国立文化財研究所の牛島茂氏にご指導頂いた。

11. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

12. 本書の執筆は足立、大庭、池淵、間野、伊藤が分担して行い、全体の編集を間野が行った。
編集にあたっては作成者の意図を優先し、図版類の様式をあえて統一していない。

13. 遺構名は基本的に現地調査時のまま略号を用いている。ただしA区、B区については現地調査時の名称の変更が生じたため、旧名称との混同を避ける意味で略号は用いないこととした。そのうちピットについては出土品整理の関係もあるため、現地調査時の名称をそのまま使用している。

14. 本書に掲載した図面、写真は島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

本文目次

1. 調査に至る経緯と遺跡の概要

- | | | |
|-------------------|------------|---|
| 第1章 調査に至る経緯 | (足立) | 1 |
| 第2章 遺跡の概要 | (間野) | 5 |

2. 蔵小路西遺跡と周辺の遺跡

3. 蔵小路西遺跡の調査

- | | | |
|------------------|------------------|-----|
| 第1章 A区の調査 | (間野) | 11 |
| 第2章 B1区の調査 | (間野) | 51 |
| 第3章 B2区の調査 | (間野) | 103 |
| 第4章 C区の調査 | (池淵、大庭、間野) | 163 |
| 第5章 D区の調査 | (池淵) | 187 |
| 第6章 E区の調査 | (大庭、伊藤、間野) | 201 |
| 第7章 F区の調査 | (間野) | 211 |

4. 考察及び自然科学分析

- | | | |
|-----------------------------|-----------------|-----|
| 中・四国地方の弥生I期突蒂文系土器 | 藤尾慎一郎 | 251 |
| 蔵小路西遺跡の植生環境及び便所遺構総合分析 | 金原正明、金原正子 | 261 |
| 蔵小路西遺跡における花粉・珪藻分析 | 渡邊正己 | 275 |

5. まとめ

調査成果の情報発信

発掘調査中は、調査成果をいち早く地元の方々に知って頂くために現場がよりとして「ほるるーとQ」を定期的に刊行した。ちなみにネーミングは「掘る・ルート9」からきている。



1. 調査に至る経緯と遺跡の概要

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は、昭和41年に一次改築を完了したが、その後の交通量の増加に伴い、各所で交通渋滞が発生していた。特に出雲市内は近年都市化が急速に進み、現在の国道9号は朝夕はもとより、日中においても慢性的な渋滞による影響で、幹線道路としての機能が麻痺状態に達していた。出雲バイパスはこうした現状に対処するため、昭和55年と昭和58年に都市計画決定されたものである。当初は、起点を簸川郡斐川町併川、終点を出雲市高松町とした延長7.9kmの4車線道路として計画されたが、その後斐川町内の混雑緩和を図るために、斐川町富村までの事業区間がさらに0.3km延伸されている。

こうしたなかで、埋蔵文化財との調整が具体化したのは、平成3年度である。出雲市内の国道9号を所管する松江国道工事事務所は、平成3年9月24日付けで島根県教育委員会に出雲バイパス建設予定地内の遺跡の有無を照会してきた。これに対して県教委文化課は、平成5年2月に予定地周辺の分布調査を実施し、出雲市姫原町上ノ島西遺跡、出雲市渡橋町藏小路西遺跡、出雲市渡橋町渡橋沖遺跡、出雲市天神町北本町遺跡、出雲市白枝町白枝遺跡の5遺跡を発見するとともに、要注意箇所4箇所をそれに追加して、平成5年3月31日付けで遺跡の存在と文化財保護上の諸手続き並びに遺跡の取り扱いについて協議が必要な旨回答した。

ところで、この出雲バイパスが通過する出雲市街地は、出雲市が主体となって昭和62年度から実施している土地区画整理事業の対象地となっており、バイパス建設も当然区画整理事業の計画の一部に組み込まれる形で設計されていた。これらの事業に加えてさらに、かねてより県立病院の施設整備と充実を図ることを計画していた島根県健康福祉部が、同区域内、姫原町地内のバイパス隣接地に県立中央病院の移転・新築を計画し、平成5年8月に埋蔵文化財調査の必要性について県教委文化課に問い合わせてきた。文化課では同年2月の分布調査に結果を踏まえ、中央病院建設予定地内の試掘調査が必要な旨回答した。この中央病院の移転・新築は島根県の第2次中期計画の中でも

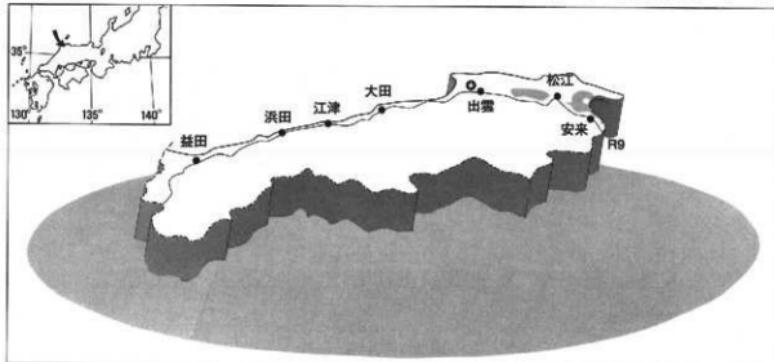


図1 藏小路西遺跡の位置

最重要プロジェクトのひとつにあがっており、平成11年の開院に向け、埋蔵文化財との調整も緊急を要したが、一般国道9号安来道路や斐伊川放水路事業に手をとられていた県教委文化課ではこれに対応することができなかった。そのため、関係機関で協議した結果、バイパス予定地も含め、土地区画整理事業の主体者である出雲市が、区画整理事業の一環として確認調査を行うことになり、出雲市教育委員会が平成6年、上ノ島西遺跡の確認調査を実施した。トレーンチ調査の結果、遺構遺物は発見されず、中央病院予定地とその周辺については、平成7年工事が着手された。

土地区画整理事業内の工事に着手した松江国工事事務所は、引き続き直轄事業となる西方のルート1.4km区間について平成7年度からの調査着手を希望したが、協議を重ねた結果、平成7年度末から第1次調査に着手し、翌8年度から本格化させることで合意に達した。これにより、平成7年12月27日付けで工事事務所から文化財保護法57条の3の発掘届けが提出され、文化課は、平成8年1月26日付けで98条の2の発掘届けを提出するとともに、2月からルート東端の要注意箇所から第1次調査にはいった。

しかし、実際には、工事事務所の思惑通りに用地買収が進まず、工事予定地内に未買収地が虫食い状に残っていたため、平成8年度に姫原西遺跡と蔵小路西遺跡の一部、平成9年度に蔵小路西遺跡の残部と渡橋沖遺跡の一部はさらに平成10年度に持ち越すこととなった。

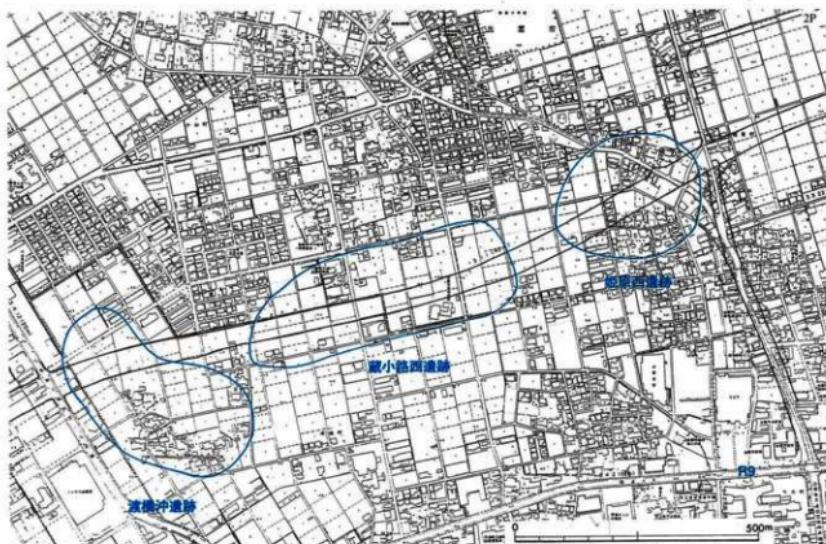
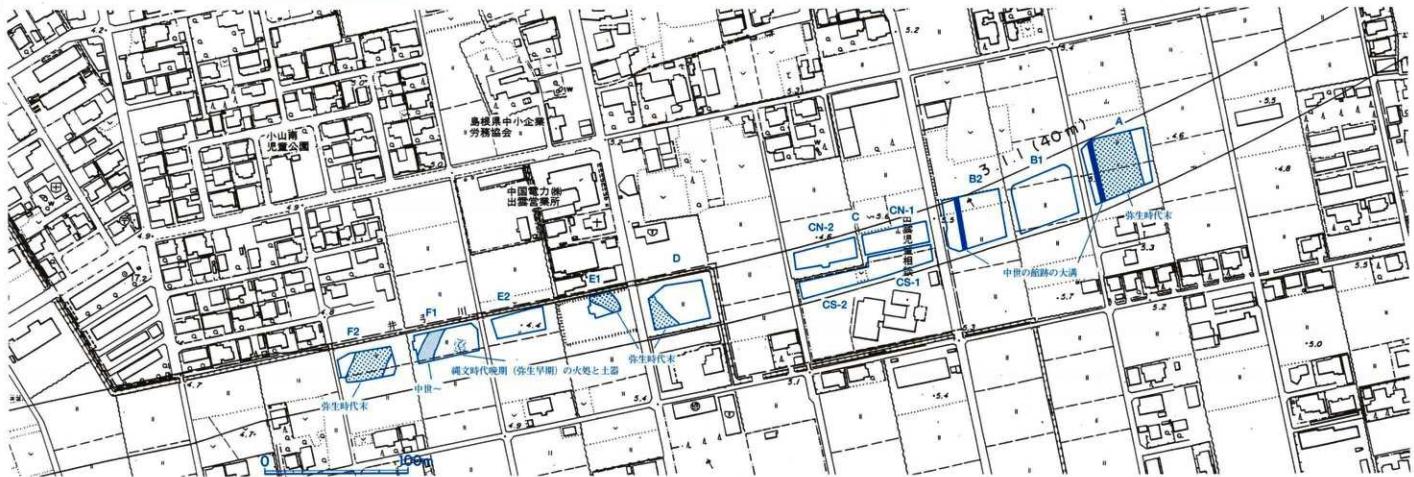


図2 出雲バイパスの建設予定地内の遺跡 (S=1/10.000)



図3 トレンチの位置 (S=1/2,500)
100m



トレンチは抽出した旧河床
図4 調査区配置図 (S=1/2,500)
3~4

第2章 遺跡の概要

本遺跡は出雲市小山町から渡橋町の広範囲に拡がる遺跡である。このうちバイパスのルート内にあたる渡橋町地内について調査が行われた。遺跡は南北に継続する市道と水路によって分断されているため、便宜上A～F区に分けて調査した。以下、年度ごとに調査の経過と各調査区の概要を述べる。

平成7年度

2月26から3月7日まで姫原西遺跡と合わせてトレンチ調査を行った。本遺跡について設定したトレンチは計12か所。このうち7か所で遺構・遺物を検出した。

平成8年度

調査初年。当初は2班体制でスタートし、6月からは同じ中国地方建設局の事業である安来道路の調査班が合流し計3班となった。以下調査に着手した順に概要を述べる。

B2区 「館跡の西大溝」「ごみ穴」「柱根・礎板・根石」「墓」

重機で表土掘削後、平成5月20日からB2区の調査に着手した。初日から雨模様の天候であり、ぬかるんだ調査区と重くなった長靴は、前述多難を予感させるに充分であった。中世土器類の包含層を調査後、遺構面を精査した結果、南北方向に調査区を縦断して延びる大溝と多数の柱穴、大形土坑のプランが確認されるようになった。大溝はA区でも確認されたことから、この遺跡が方一町の規模をもつ館跡であることが判明した。その後、B2区では一雨ごとに、まさに雨後のタケノコのように、建物の柱穴が増えていった。しかし、遺構面は灰黄色のシルト層をベースとしていたため、夏場の乾燥時には、ひび割れや崩落が生じる事態となった。特に大形の土坑は崩れやすく、記録をとった後は直ぐに土のうを積み上げて崩落を防止するという方法をとっていた。調査の結果建物は8棟が確認された。柱穴内には柱根や礎板、根石が良好な状態で遺存していた。土坑は24基検出したが、そのうち性格が明確なものは、曲物の井筒が検出された土坑9の1基のみであった。土坑1と9には多量の土器のほかに着状の木製品や木、板切れが出土しており、土層の堆積状況から、トイレ遺構の可能性が考えられた。この二つの土坑の泥はサンプリングして、平成9年度に環境考古研究会に委託して分析を行った。結果は本書に収録している通りである。墓は5基確認した。そのうち2基には人骨も遺存しており、鳥取大学医学部の井上貴央教授に鑑定頂いた。このほか中世の館跡が築かれる以前の遺構も検出された。このうち溝10についてはグライ化した埋土の状況から弥生時代の遺構と判断した。また井戸1ではくりぬきの井筒の中に古墳時代中期の甕が正位に置かれた状態で出土した。館跡以前の遺構は他にも存在したものと思われるが、館跡造成時にその多くは削平されたのではないかと考えられる。現地調査中には2回の調査指導会を開催した。1回目は館跡の空間利用と出土品について12月12日に国立歴史民俗博物館の小野正敏助教授と鳥根県文化財保護審議委員会委員の池田満雄氏にご指導頂いた。2回目は館跡の当時島根大学の井上寛司教授と田中義昭教授にご指導頂いた。井上教授からは、この館跡が中世朝山氏惣領家の居館の可能性があることを指摘された。12月10日に空中写真撮影を行い、年が明けてから若干の補足調査を行い総ての調査を1月27日に終えた。

A区 「弥生時代末～古墳時代初頭の自然河道」「館跡の東大溝」「青磁双魚文盤」

平成8年7月2日より調査に着手した。トレンチ調査の結果から、弥生時代末の自然河道の存在

が予想されていた。ところが、重機による表土掘削を進めたところ、調査区西端の耕作土直下からおびただしい量の中世土器が出土した。平行して進められていたB 2 区の調査状況からA 区にも中世の遺構面が続いていることが判明した。調査は、まず、この中世土器溜りの遺物の取上げから開始した。土器溜りの圧倒的決定的部分は土器であったが、青磁や白磁も散見された。そして青磁双魚文盤が出土するにいたって、この遺跡が容易ならざるものとして認識されることとなった。遺構面では土坑や溝が検出されたが、遺構面の東端が不明瞭でなく、B 2 区の調査状況から、館の東側の大溝が存在するのではないかと考えられた。この大溝は自然河道に直交するトレンチを設定し、その土層観察によって漸く規模が確認された。こうした遺構調査に時間を費やすため、自然河道の本格的な調査に着手したのは、樹々も色づきはじめた11月のことであった。さらに断ち割りの結果膨大な調査土量となることが判明したため、同じ出雲市内の現場から作業員を補充し、まさに人海戦術で掘削を進めていった。調査の結果、河道が削り込んだ東西の肩口の間は約40m。河道内には、井堰状遺構や立杭、斜杭群が築かれていた。涌水が著しく河道の底面まで調査は出来なかつたが、河道内からは多量の木製品や弥生土器が出土した。年が明けて平成9年1月23日に空中写真撮影を行った後、補足調査を行い、1月27日に総ての調査を終えた。

D区 「自然河道」「しがらみ」「ナスピ」

調査は7月12日より開始した。調査の結果、調査区南西端をかすめるように南東から北西方向へと延びる自然河道の東岸を確認することができた。河道の堆積土は未分解有機物混じりの泥であり、足元の悪いぬかるみの世界での調査となつた。おりしも季節は真夏。ひとときの涼風すら届かない穴ぐらのようなぬかるみの調査区は、調査員の間で「ヌマ」と呼ばれたほどであった。涌水も著しく水中ポンプ4台を24時間フル稼動させ排水した。こうした状況のため自然河道は肩口から1.2m下までしか掘削することができなかつた。河道は、わずかに出土した土器から弥生時代末に埋没したようである。河道に伴う遺構としては杭と板材を組合せた、しがらみ状の遺構を検出している。このほか木製品もナスピ形膝柄鐵や橹などが若干出土している。調査は9月6日にクレーン車からの全景写真撮影後、若干の補足調査を行い9月11日に終了した。

C 1-S 区、C 2-S 区 「水田耕作土」「花粉分析」

9月17日より西側のC 2-S 区より調査に着手した。先行して調査されていたB 2 区の状況とトレンチ調査の結果から水田等の存在が予想されていた。調査では畦畔などの水田に関わる遺構は検出できなかつたが、中世の水田耕作土の存在を確認した。これは花粉分析の結果と半月状の歯痕などの表面観察により判断したものである。このほか溝状遺構や大型土坑を検出した。調査は11月9日に空中写真撮影終了後、重機による断ち割りを遺構面からマイナス3mの深さまで行い、11月11日に総ての調査を終了した。C 1-N 区の調査は11月25日より着手した。本調査区でもC 2-N 区と同様の中世の水田耕作土を検出した。その直下の灰褐色シルト～泥層が遺構面だが、遺構は疎らであり、土坑7基、溝2条を検出したのみである。遺構面での調査終了後、断ち割りを行い、調査は12月16日に終えた。

本年度はこのほか、市道渡橋平野線より西側部分のトレンチ調査を実施している。

平成9年度

昨年度につづいて原則2班体制で行った。原則というのは、昨年度の調査の継きであるB 1 区と

C N区の調査が特に急がれたため、他の現場より約1か月間の応援があったからである。また、この年から調査は更に西へと進みE、F区へと突入した。ここでは北側で平行して進められる古井手川の改修工事の工程との調整を常にはかりつつ進められた。

B 1区 「建物」「中世の井戸」「弥生の井戸」「弥生時代末の遺構」

平成9年4月7日より調査に着手した。前年度調査したB 2区の調査結果から予想された通り、多数のピットと大形土坑、溝が検出された。建物はその後の室内での検討結果もあわせて計7棟を検出した。建物の柱穴にはB 2区と同様に柱根、礎板、根石が良好な状態で残されていた。大形土坑のなかには土坑10のように、 $5.43 \times 4.35m$ にも及ぶ規模のものも見られた。中世の井戸は2基検出した。1つは隅柱横棟型に相当するものの、いま一つはトレンチ調査で確認していた曲物積みのものであった。本調査区からは弥生時代の井戸や土坑、溝を検出した。当該期の遺構の存在は既に調査を終えていたA区の結果からも予想されていた。しかし本調査区では土坑25や井戸3等が土器を伴って出土するなど、事前の予想以上の密度と内容であった。これは館跡造成などの大規模な造成があり及ばない空間が当調査区では見られたためといえ、館跡の空間利用を考える上で興味深い。調査は、最後のラジコンヘリによる空中写真撮影で終て終える予定であったが、強風や雨の他、予期せぬアクシデントにより撮影終了までに予想外の時間を費やすこととなった。そして、B 1区の調査が終了した翌週、この地方一帯には雨が一週間近く降り続いた。

C 1-S区、C 2-S区 「水田耕作土」

C 1-S区の調査は4月7日より着手した。昨年調査したC N区の調査結果から、本調査区でも中世の耕作土と遺構の存在が予想された。その予想通り耕作土直下から調査区全面に亘る黒色土を検出した。ただしC N区と同様に畦畔等の水田に伴う遺構は確認できていない。このほか検出した遺構は時期不明の大形土坑1基と杭列のみであった。総ての調査を5月1日に終えた。C 2-S区の調査は翌5月2日より着手した。C区のうち既に3つの調査区で調査が終り、状況もよくわかっていたため、調査はスムーズに進行した。調査の結果、中世の水田耕作土とその直下の遺構面から土坑3基を検出した。調査は5月22日に終えた。

E 1区 「自然河道」「D区の続き」

トレンチ調査からD区で確認されていた自然河道のつづき部分にあたることが予想されていた。調査は梅雨明けを待って、7月23日着手し、梅雨明けの暑い日差しのもと進められた。足元の悪いなかであり、しかも風の届かない穴の底での調査は非常に難渋した。調査の結果、D区で検出した弥生時代末に埋没したと考えられる河道の西岸を確認した。復元すると東西の岸の幅は24m。河道内からは微量ではあるが、弥生土器のほか杭等の木製品が出土した。西岸は灰褐色細砂を削り込んでいる。この灰褐色細砂の直上から漆器の皿や中世土器が出土しており、後述するF 1区のベース面に対応するものと思われる。河道内の調査についてはおびただしい涌き水に加えて、大雨の影響により河道の肩口が崩落し、河道内へ流入したため、河道底面までの掘削は断念した。全体の写真撮影終了後、若干の補足調査を行い、8月20日に総ての調査を終了した。

F 2区 「自然河道」

トレンチ調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の自然河道の存在が確認されていた。調査は8月5日に重機による表土掘削から開始した。ところが表土掘削中に大雨の影響で、調査区の西壁が崩れるという事態となつたため、西壁付近の調査を断念せざるを得なかつた。河道内の堆積土は基

本的に未分解の有機物が多量に混ざった泥層であった。A区、D区、E区に統いて、またしても、ぬかるみの世界となった。調査の行われたのは、ぎらぎらと太陽の照り付ける暑い夏であり、風のとどかない調査区内で、したたる汗をぬぐいつつスコップをふるい、掘り進めていった。涌き水のため河道は底面まで調査していないが、堆積土からは弥生時代末の土器や木製品がわずかに出土した。また、東岸ではこの堆積土を削り込んでいる中世の河道が確認された。この河道はF 1区で確認された河道につながっていくものと思われる。調査は9月5日に全景写真撮影を終えた後、実測などの若干の補足調査を行い同月12日に終了した。

E 2区 「溝跡」「液状化現象」

10月21日より調査に着手した。トレンチ調査の結果や先行して調査の進んでいたF 1区の状況から中世以降、水田として利用されていた、いわゆる「クラC」的調査区であることが予想された。しかし調査では耕作土直下の包含層から近世～近現代の遺物が多く出土したものの、中世耕作土に相当するものは確認出来なかった。その直下が灰褐色粘質細砂を基盤とする遺構面である。遺構面からは調査区西端を縦断する溝跡1条を検出したのみである。溝跡の埋土には中世土師器の小片が混ざっており、その所産年代は中世と思われる。調査は12月9日に終了した。

F 1区 「旧古井手川」「突堤文土器」「液状化現象」

蔵小路西遺跡最後の調査区である。重機による表土掘削終了後、10月6日より調査に着手した。耕作土を除去すると、調査区東半部では基盤層である灰褐色細砂が検出されたが、調査区西半では粗砂層が見られた。隣のF 2区の調査状況からも河道の存在が予想された。その後、この河道は最終的には土地改良前の際に埋め戻された「古井手川」であることがわかった。基盤層上面では河道に平行する溝跡2条と大形土坑3基を検出した。また河道の西側には、河道と平行に延びる幅2m前後の大溝、河道と平行に並ぶ杭列が4列認められた。河道内の遺物は弥生前期の土器から中世土師器、さらには近現代の遺物まで見られた。基盤層については当初は無遺物層と考えていた。しかし調査初日、調査用の排水溝の掘削中に土器破片が微量出土した。さらに基盤層上面での遺構精査中に石錠と縄文土器を出土するにいたり、「灰褐色細砂＝無遺物層」という考え方は崩れることになった。遺構面の調査終了後、11月11日よりトレンチによる基盤層の断ち割りを開始した。調査の結果、火甌5基と周辺から縄文晚期（弥生早期）土器が多数出土することがわかった。当該期の平野部での遺構の検出は初めてのことであった。また、火甌は液状化現象の砂脈で壊されていることも判明した。液状化現象については島根大学徳岡隆夫教授、山内靖喜教授からご指導を頂いた。調査は12月19日に全ての調査を終えた。

2. 蔵小路西遺跡と周辺の遺跡

蔵小路西遺跡は出雲平野（簸川平野）のほぼ中央部、出雲市小町から渡橋町にかけて所在する縄文から中世の複合遺跡である。遺跡の所在する出雲平野は北に島根半島、南に中国山地という山塊に挟まれており、中国山地に源を発する斐伊川、神戸川の二大河川の沖積作用によって形成された肥沃な平野である。本遺跡は弥生時代の拠点集落として著名な矢野遺跡を中核とする四格遺跡群の南縁にある。四格遺跡群の中での本遺跡の位置付けといった点については「まとめ」で述べることとし、ここでは割愛する。また歴史的環境については文献1に詳しいので参照されたい。

縄文時代 最も古い遺跡としては早期末の斐根遺跡（7）、上長浜貝塚（8）がある。中期の遺跡は現在のところ知られていない。後期から晩期にかけての遺跡は、後に「神門水海」と呼ばれた潟湖の周辺部に多く分布している（4、9～14）。また山地と平野の境界に位置する三田谷I遺跡では出雲平野で初めて三瓶降下火山灰と遺物との層位の関係をつかむことができた。今回F1区では晩期末（弥生早期）の遺構、遺物を検出している。

弥生時代 中期中頃以降になると平野の微高地に幾つかの集落遺跡群が形成され展開していく。四格遺跡群（1～6）、古志遺跡群（15～18）、天神遺跡群（19）などである。こうした集落遺跡群の指導者の墓として斐伊川左岸の丘陵上に西谷墳墓群（23）が築かれる。今回の調査では弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した自然河道のほか遺構も断片的に検出された。当該期の出雲平野の古地形や土地利用開発に関するデータの蓄積は目ざましいものといえよう。

古墳時代 前半期の古墳は出雲平野では多くない（24～27）。後期になると県下最大級の前方後円墳である今市大念寺古墳（28）や、上塙治築山古墳（29）、上塙治地藏山古墳（30）の出雲西部最高首長累代の墓が築かれる。また古墳時代後期には神戸川左岸に神門横穴墓群（32）、右岸に上塙治横穴墓群（31）という二大横穴墓群が築造される。

奈良・平安時代 「出雲國風土記」の記載と関係する遺跡が注目される。神門郡郡家と推定される古志本郷遺跡、天神遺跡のほか三田谷I遺跡でも官衙関連の遺構、遺物が検出されている。このほか寺院遺跡は神門寺境内廐寺（33）、長者原廐寺（34）があり風土記記載の新造院に比定される。古墓としては朝山古墓（35）や小坂古墳（36）等で石櫃の存在が知られていたが、新たに光明寺3号墓で墳丘に石櫃を内蔵した例が調査されている。

中世 発掘調査された城館遺跡としては半分城（40）、大井谷城（41）がある。天神遺跡、矢野遺跡では溝で区画された屋敷跡が調査されたほか、上長浜貝塚では古代末から中世の漁村の姿を知ることができた。墳墓としては龍泉窯系青磁が出土した荻籽古墓（38）が著名である。今回、A～B2区で中世朝山氏惣領家の居館跡と推定される館跡が検出された。同じバイパス地内の姫原西遺跡で木棺墓が調査され、渡橋沖遺跡で当該期の屋敷地が見つかるなど、中世の出雲平野の景観を復元するうえでの多くの知見を得ることができた。近年、中世陶磁器を出土する遺跡の事例が増えている（P296～297）。このあたりのことはあらためて「まとめ」で触れたい。

註 古地形、特に斐伊川・神戸川と遺跡の立地については次の文献にまとめられている。

中村唯史「山持川川岸遺跡の古環境」「山持川川岸遺跡」出雲市教育委員会1996

同 「小山遺跡周辺の古地理に関するコメント」「小山遺跡第2地点発掘調査報告書」同1998

文献1. 出雲市教育委員会「遺跡が語る古代の出雲—出雲平野の遺跡を中心として—」1997

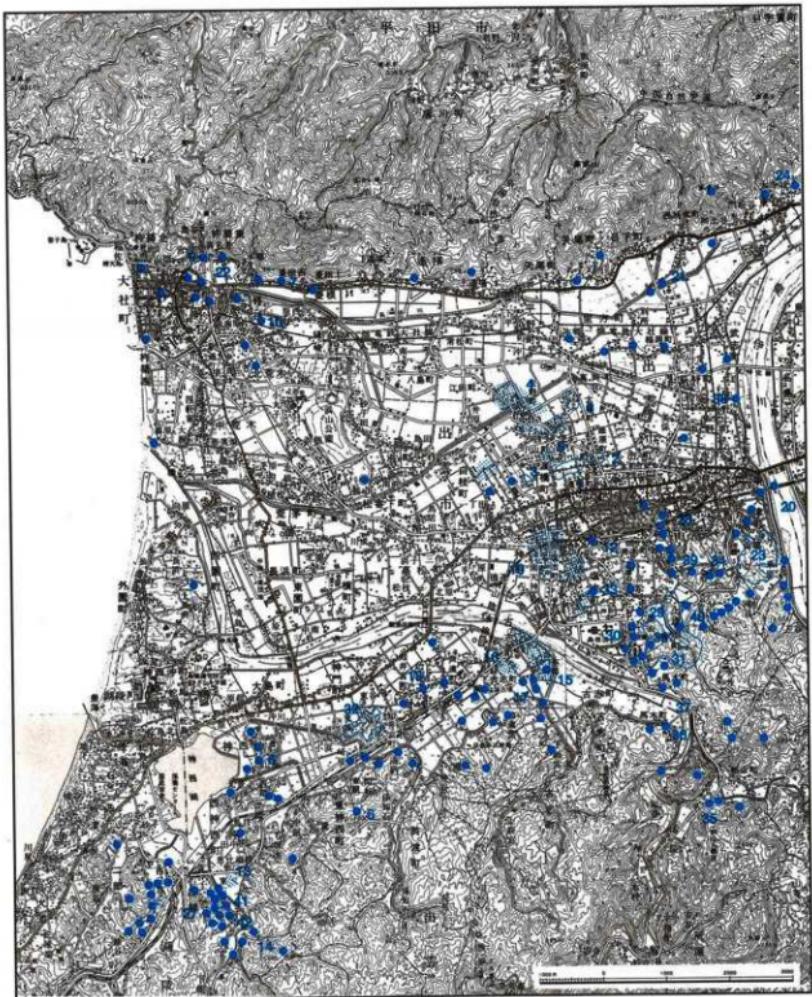


図5 蔵小路西遺跡と周辺の遺跡 (S=1/75,000)

- 1.蔵小路西遺跡
- 2.悠久西遺跡
- 3.渡橋冲遺跡
- 4.矢野遺跡
- 5.小山遺跡
- 6.大塚遺跡
- 7.菱根遺跡
- 8.上長浜遺跡
- 9.出雲大社境内遺跡
- 10.原山遺跡
- 11.三田谷1遺跡
- 12.善行寺遺跡
- 13.三部竹崎遺跡
- 14.御庭田遺跡
- 15.古志本郷遺跡
- 16.下古志古跡
- 17.田畠遺跡
- 18.知井宮多聞院遺跡
- 19.天神遺跡
- 20.斐伊川鉄橋遺跡
- 21.山持川川岸遺跡
- 22.命主神社遺跡
- 23.西谷塙墓群
- 24.大寺古墳
- 25.山地古墳
- 26.北光寺古墳
- 27.雲部古墳群
- 28.今市大念寺古墳
- 29.上塙治磐山古墳
- 30.下藏山古墳
- 31.上塙治横穴墓群
- 32.神門横穴墓群
- 33.神門寺境内廃寺
- 34.長者原庵寺
- 35.鶴山古墳
- 36.小坂古墳(石櫃)
- 37.光明寺3号墓
- 38.萩籽古墓
- 40.半分城
- 41.大井谷城跡
- 42.庭反Ⅱ遺跡
- 43.常楽寺遺跡

3. 蔵小路西遺跡の調査

第1章 A区の調査

概要(図6)

大きく分けて①弥生時代後期初頭に形成され弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した自然河道②中世の館跡に伴う遺構・遺物③河道埋没後の遺構・遺物を検出した。自然河道は最終的に割り込んだ東西の肩口の幅が34mという小規模なものである。河道に伴う遺構としては井堰状遺構、杭列遺構などが検出された。また河道の堆積土が泥層を主体としていたため、非常に良好な状態で弥生土器や木製品が出土している。河道埋没後、中世になって西側の微高地に平行して館跡の大溝が掘削される。この大溝に対応する館跡西側の大溝はB2区で検出されており、その間は約100mにも及ぶ。方一町の館跡である。A区は館跡の東端のため遺構は疎らにしか存在していない。しかし土器溝りからは多量の土師器の他、県内初例の青磁双魚文盤を含む中国製磁器も見られた。

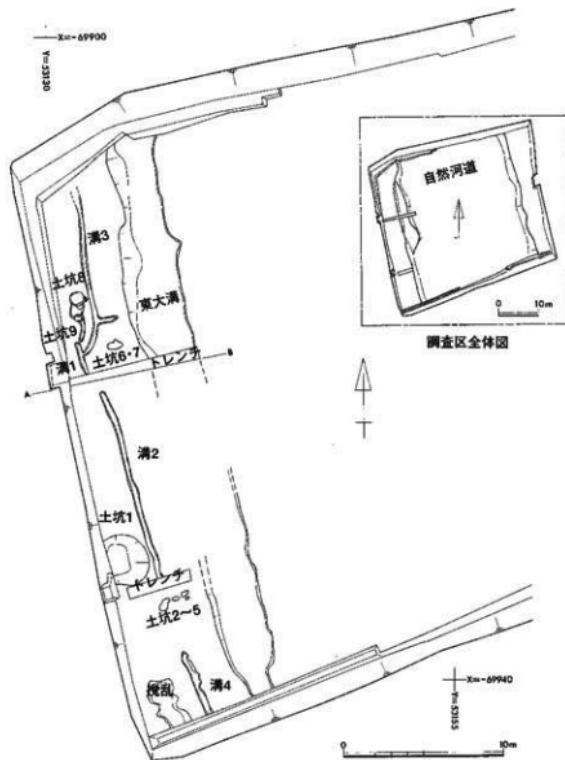


図6 A区構造配置図及び調査区全体図
(全体図はS=1/1200、配置図はS=1/300)

以下、この三つの時代の遺構、遺物を中心として見ていきたい。

第1節 館跡に伴う遺構と遺物

1. 土器窯（図7） 遺構面直上には土師器を主体とする土器窯が拡がる。土師器は細片になっているものが殆どであった。全体の分布を見ると、調査区西壁に近づくに従い密になっていく（図

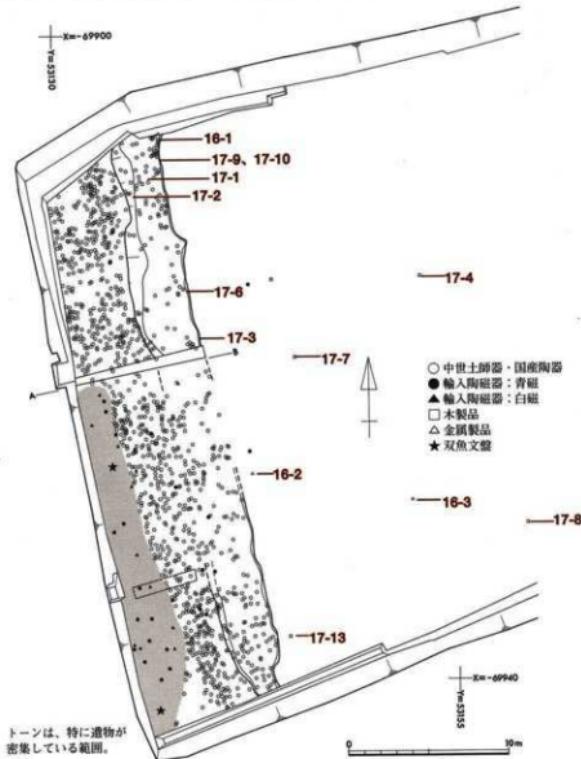


図7 A区中世の館跡に伴う遺物出土状況・土層堆積状況実測図
 (遺構はS=1/300、土層はS=1/80)

7のトーン部分）ことがわかる。土層断面ABラインで見ると調査区西壁では厚さ20cmにも及ぶ。この土器満りは更に西へ拡がっていくことが予想される。

2. 遺構

遺構の位置関係（図6） 図6には微高地上の全ての遺構を載せている。このうち中世の遺構と確認できたのは館跡の東大溝と土坑のみで、溝については明確でない。土坑は全体図のABラインより北、土坑1とその周辺、の二つのグループに分かれる。両者の間には遺構が存在していない。

東大溝（図7） 弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した自然河道の西岸は微高地と平行に掘削している。掘り形の西岸は微高地の基盤層であるのに対して東側は粘質土層になる。そのため掘り方の東側のラインの検出は困難であり、かなり掘り下げて漸く検出している。規模や溝内での遺物の出土状況等についての記録が不十分なものとなっている。土層断面E Fラインでの規模は東西2.8m、底面の標高は3.7m。掘り形はE Fラインで見ると東側が緩やかになっているが、これが旧の形状をとどめているものかは不明である。

埋土は粘質土を主体とする上層と、粘質土に基盤層の崩落などによる細砂層の混入する下層とに分けられる。大溝内からは未分解の植物遺体のほか土器、木製品もわずかに出土している。

土坑1（図8） 西側1/3程度が調査区外となるため全体の規模は不明である。東西2.46m以上、南北2.86m、検出面からの深さは0.6m。底面の標高は3.48m。埋土の最下層（6層）には未分解有

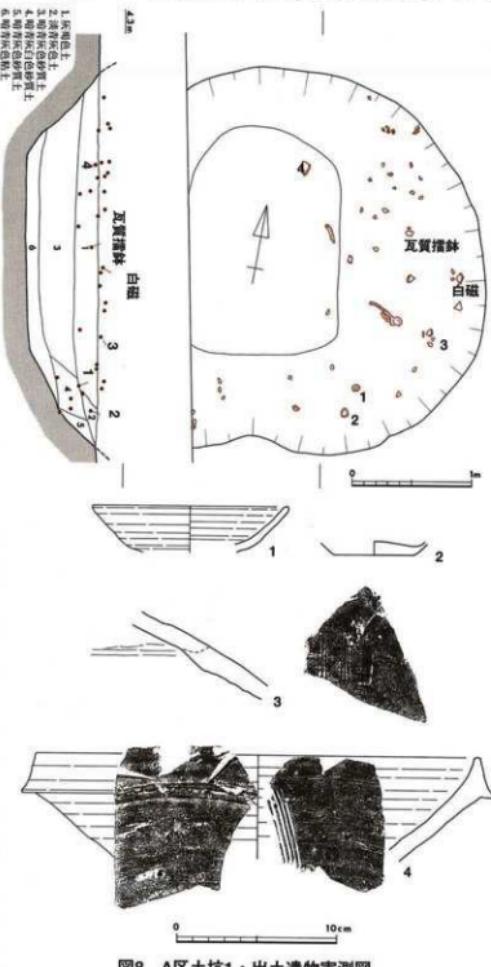


図8 A区土坑1・出土遺物実測図
(遺構はS=1/40、遺物はS=1/3)

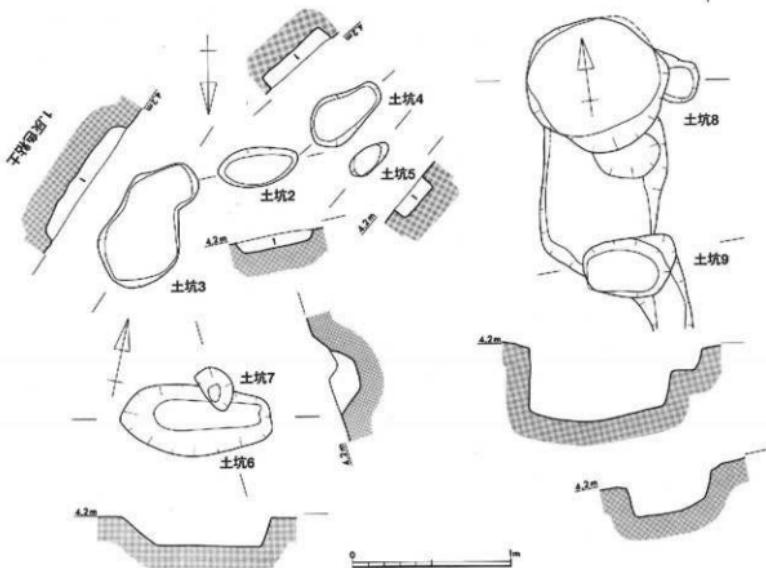


図9 A区土坑2~9実測図 (S=1/30)

機物混じりの粘質土が堆積する。土坑内の上、中層を中心にして土師器などの遺物が出土している。その多くは細片だが、このうち4点を図化した。1は土師器壊。口径12.9cm。2は土師器壊の底部。3は常滑焼の壺の肩部。外面には押印文様がある。

14世紀か。⁽¹⁾ 4は備前焼の擂り鉢。内面には4条以上の放射クシ目状条線を有する。備前IV期、15世紀。⁽²⁾

そのほかの土坑(図9) いずれも小規模な浅い土坑である。遺物が出土しているのは土坑3のみだが、その他の土坑も埋土の状況から中世と判断した。

土坑3出土遺物(図10) 瓦質土器の鉢の底部。復元底径9.0cm。内面にハケ調整が見られる。



図10 A区土坑3出土遺物実測図
(S=1/3)

土坑一覧表

単位はm

番号	平面形	規 模	深さ	底面の標高	備 考
2	瓢箪形	0.86×0.35~0.50	0.10	4.07	
3	楕円形	0.51×0.25	0.08	4.10	
4	瓢箪形	0.52×0.30~0.17	0.11	4.05	
5	楕円形	0.29×0.14	0.95	4.05	
6	楕円形	0.94×0.44	0.19	4.00	土坑7と切り合い、旧
7	楕円形	0.29×0.19	0.09	4.08	土坑6と切り合い、新
8	円 形	0.90×0.84	0.50	3.70	
9	楕円形	0.59×0.37	0.23	3.94	

3. 遺物（図11～図17）

遺物は土器窪りを中心に一部東大溝からも出土しているが、ここでは一括して取り扱う。土器窪りは土師器が最も多く出土している。細片が多く、磨滅も進んでおり遺存状態は不良である。

(1) 土師器（図11） 皿、台付き皿、壺がある。風化、磨滅しているものを除き確認できるものは総て糸切り底である。1から6は皿。色調と形態に二種類見られる。1から5は体部が逆八字に短く立ち上がるるもので橙～肌色を呈する。6は円みのある体部で、淡い肌色をしている。法量は口

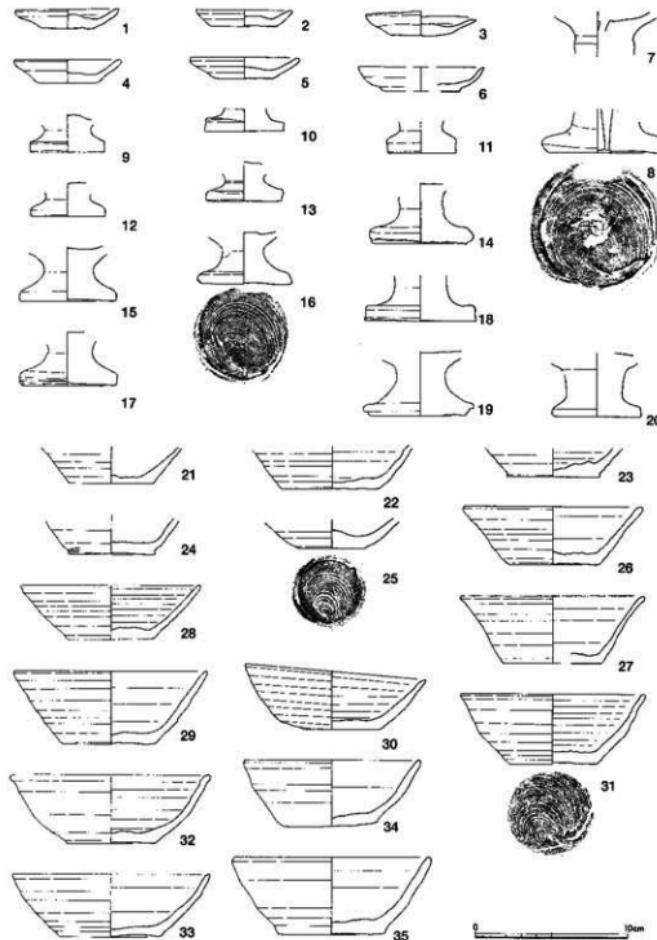


図11 A区中世土器実測図 (1) —土師器— (S=1/3)

径6.3~8.2cm、器高1.1~1.6cm。7から20は台付き皿。7、8は穿孔されている。9から13は底径が4.4~5.2cmの小形のもので橙~肌色。14~19は底径6.3~7.3cmの大形のもので肌色を呈する。20は高台が絞りこまれておらず、ずんどうな形をしている。底径5.7cm。21~25は壊の体部から底部の破片。21から24は底径5.6~6.4cm。25は底径が4.2cmと小さい。灰白色を呈し丁寧な仕上げである。26~35は壊で全形が伺える資料である。色調はバラつきがあり、皿や台付き皿のようにすっきりとは分かれない。26~29は体部が逆八字に立ち上がるるものである。口径11.8~12.7cm、器高3.5~4.8cm、底径6.0~6.5cm。30~33は体部が円みをもつ。そのうち33は灰白色を呈し作りが他に較べて丁寧である。口径11.9~13.2cm、器高4.1~4.6cm、底径5.9~6.6cm。34と35は器壁のやや厚い作りである。口径11.6~13.1cm、器高4.1~4.4cm、底径6.1~7.0cm。

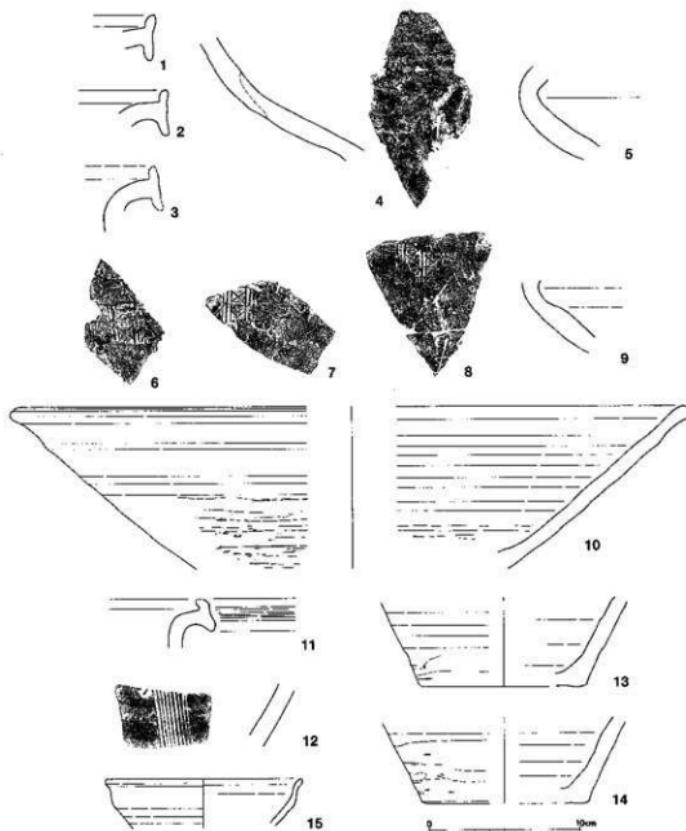


図12 A区中世土器実測図 (2) —国産陶器— (S=1/3)

(2) 国産陶器(図12) 1から8は常滑系陶器。1から3は壺の口縁部。口縁端部を上下に拡張させたもので6a型式に比定される。⁽³⁾ 13世紀。5から8は壺の肩部で押印文様を有する。9、10は丹波系陶器。9は壺の肩部、10は鉢。10は復元口径45.2cmの大形品。11は壺の口縁部。口縁帯は上下に拡張し幅3.2cm。端部は若干内側に傾く。12は備前系の擂り鉢。内面に9条の放射クシ描き条線を有する。13、14は東播系須恵器の鉢。15は瀬戸の天目。復元口径13.0cm。

(3) 瓦質土器(図13) いずれも在地産かと思われる。1・2は鍋。色調は淡灰色を呈する。1は口縁端部が「く」字に屈曲する。2は口縁部が外方に向かって屈曲拡張する蓋受け状を呈し、端部は平坦面を有する。3から10は鉢。口縁部が玉縁状に肥厚するもの(3~7)としないもの(8)がある。9は片口状である。内面にはハケ調整が見られる。10は鉢の底部。11は口縁下位に鉄を有する。小破片のため傾きが不確定だが、あるいは羽釜かもしれない。12は深鉢の口縁部。外面に二条の突帯を巡らせ、その間に花文を押印する。13は香炉か筒型の三足付き火おけか。外面には押印による文様が現状で三段確認できる。

(4) 貿易陶磁~青磁~(図14)

龍泉窯系青磁、12世紀から15世紀代までの資料が出土している。⁽⁴⁾ 1、2は太宰府I類碗。内面に文様有する。2から23はI~5類の碗。外面に蓮弁文を削りだす。21は曲口碗。24は小碗。III~3類か。25は24と同一個体の可能性もある。26から28はIII類の碗。外面に細長い蓮弁文を削りだす。30は小碗。31は双魚文盤。口径18.0cm、器高5.1cm、高台径8.6cm。釉は0.1~0.2cmで厚くかかる。32はI~5類か、あるいは15世紀前半の資料。33は皿。高台外底には釉がかからない。15世紀。34は碗の底部。高台内底には釉がかからない。高台径7.0cm。15世紀か。

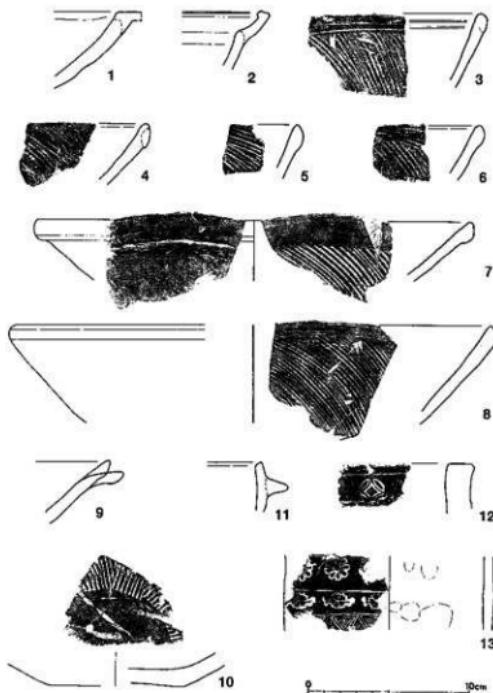


図13 A区中世土器実測図(3) —瓦質土器— (S=1/3)

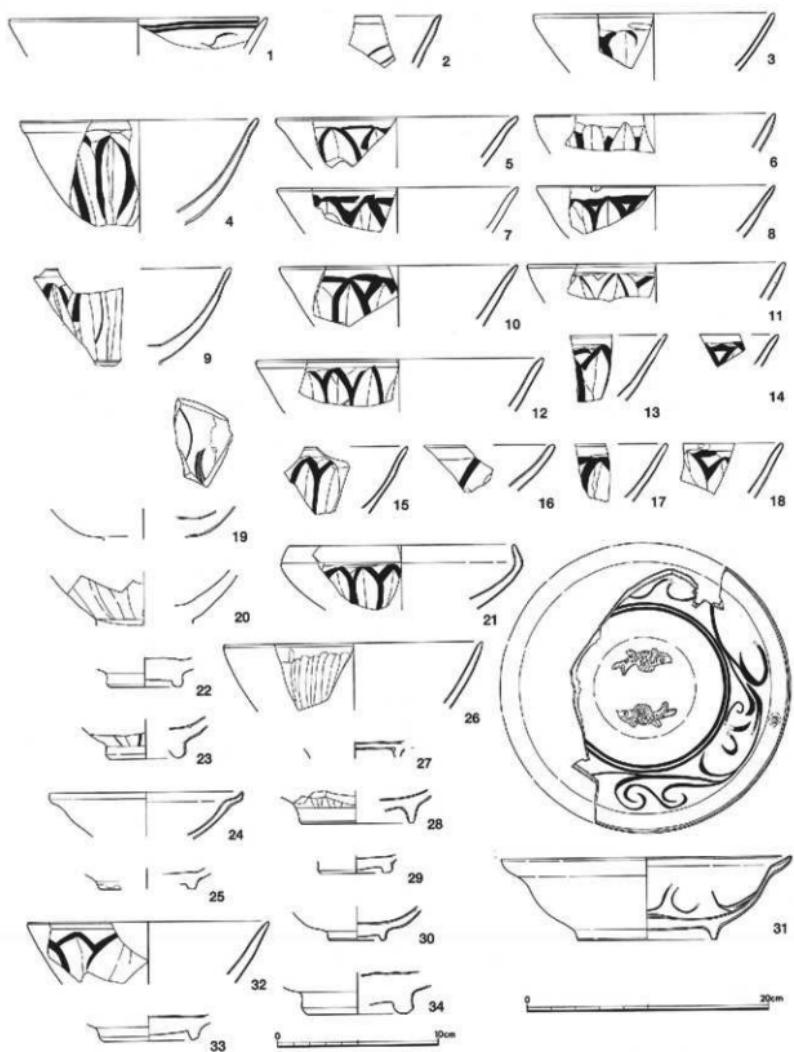


図14 A区中世土器実測図(4) —青磁— (S=1/3、31はS=1/4)

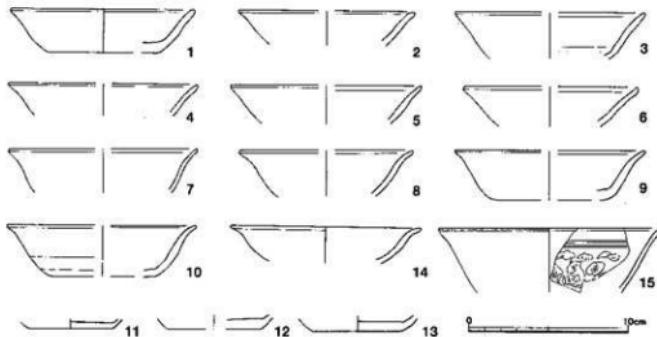


図15 A区中世土器実測図(5) —白磁・青白磁— (S=1/3)

(5) 貿易陶磁～白磁・青白磁～(図15) 13
世紀後半を中心とする時期の資料が出土している。1から13は口縁端部が口禿になっているもので太宰府IX類の皿である。釉調は淡い緑(青)灰色を帯びた乳白色を呈する。13は底面と外面体部の下位0.1～0.2cmが施釉されていないことからIX-2類に比定される。14は坏で口縁端部が口禿げでない。15は口縁端部が口禿げの椀。内面にはクシによる沈線2条と花文が描かれる。

(6) 金属製品(図16) 1、2は鉄鎌。3は刃物の刃部かと思われる。1は平剣鋒型。全長13.6cm。刃部は断面菱形を呈し幅1.2cm、高さ0.5cm。茎部は断面方形で0.4cm角。2はのみ根型を呈する。全長13.3cm。刃部は0.8×0.5cm。茎部は0.3cm角。

(7) 木製品(図17) 木製品はいずれも東大溝から出土している。1から5は箸状木製品。

いずれも一端あるいは両端を欠いており完形でない。最も良く残っている1で残存する長さ22.1cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmである。6から8は漆器椀。3は高台を有する椀。内外面とも黒色漆塗りで、外面と見込みには赤色漆で絵が描かれている。7は体部の小破片。内面に赤色漆で描かれた絵がわずかに残っている。8は高台部のみ。高台は外方へ踏ん張るタイプである。内面は赤色漆塗り。9は曲物の側板。桜皮の皮縫じがあり、その横には径0.5cmの円孔が空けられている。内面には木理と直交するケビキが入れられている。10、11は円形曲物。11は側板を桜皮で固定するための円形の孔が、2か所に空けられている。12は木札。下端は尖らせ、上位に径0.4～0.5cmの孔を空け

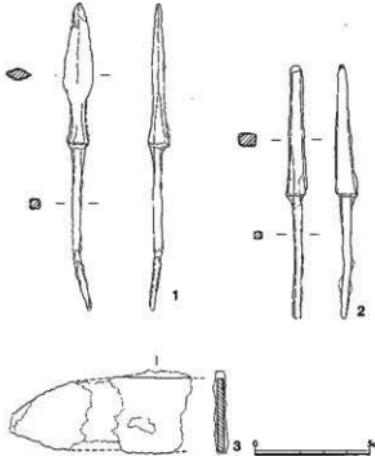


図16 A区中世の館跡に伴う金属製品実測図 (S=1/2)

る。長さ13.1cm、幅2.2cm、厚さ0.7cm。13は用途不明木製品。幅1.5cm、厚さ0.5cmの板材の長辺側の一方にV字状の切欠きを連続して入れている。上端を欠き残存長は11.3cm。

(8) その他(図18) 土器溝りからは中世土器以外も出土している。このうち館跡以前の時代のものを掲げた。1は弥生土器の低脚壺。草田6～7期。⁽¹⁾ 2から5は須恵器。2は罐。外面に波状文を有する。3は壺蓋。口縁端部が下方に垂直に屈曲する。4、5は盤。底部の外縁に高台を有する。所産年代は奈良時代末から平安時代。

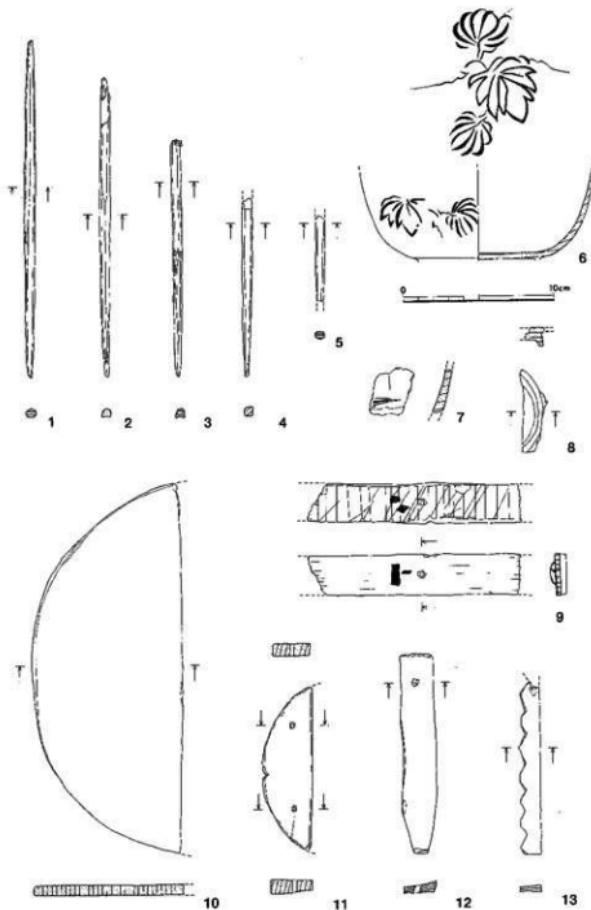


図17 A区中世の館跡に伴う木製品実測図 (S=1/3)

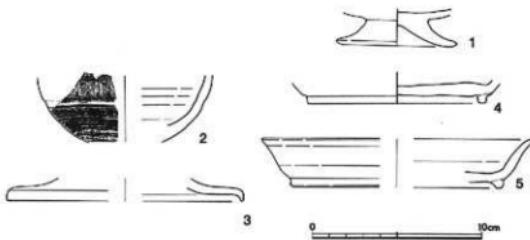


図18 A区土器溝り弥生土器・須恵器実測図 (S=1/3)

2. そのほかの遺構 (図19)

このほか調査区西側の微高地上からは溝状遺構を4条を検出している。溝はいずれも南北方向に延びる。規模は溝1から3は幅35cm、深さ8cm程度。溝4は少し大形で幅52cm、深さ20cmである。埋土は單一層である。埋土の状況や遺構それぞれの位置関係から考えて、同時期の遺構と思われる。溝からは弥生土器細片が出土していることから館跡以前の遺構と考えておきたい。

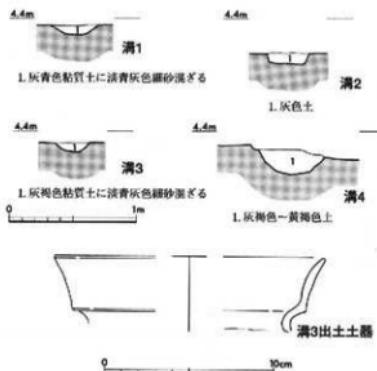


図19 A区弥生時代の溝跡実測図
(遺構はS=1/40、遺物はS=1/3)

第2節 弥生時代末～古墳時代初頭の自然河道

1. 自然河道（図20～22）

概要 自然河道は調査区を南北に縱断するように検出された。東西の岸は、どちらも基盤層である青灰色砂質土を削り込んでいる。この間を河道はシフトしながら流れていったものと思われる。最終的に削り込んだ東西の幅は30m。東西の削り込み面を較べると東側のほうが傾斜が強いようである。また西岸は一部階段状に張り出す部分も見られた。底面の形状と深さだが、涌水が著しいため調査区全体を掘り下げて調査していない。部分的に確認したところでは底面の標高は1.6m前後のようにある。河道肩口からの深さは2.0m前後となる。河道の流向は北から南と考えられる。この点については後述する。

堆積状況 河道の埋土は未分解有機物混じりの泥層を主体とし粗砂～中粒砂層を間に挟んでいる。同じ時期の自然河道はD・E・F2区でも検出されているが埋土は基本的に同じである。土層断面



A区 自然河道（南から）

を見ると、西から東向きに傾斜する堆積状況を示す土層が見られる。図21上段C Dラインの10層から15層の辺り、図22E Fラインの23層から下層の辺りである。また同じE Fライン中段の50層と35層も削り込みを界している。このような堆積を示すのは河道が西から東へ序々にシフトしていたためと思われる。河道埋没後は凹地化した沼沢地的環境であったようである。この時期に形成されたE Fライン17層からは草田6～7期を中心松山Ⅲ期の資料までが見られる。その後、中世の東大溝が築かれる時期には、この自然河道部分も安定化したようである。溝状遺構（図22上から2段目のトーン部分）も見られることから何らかの土地利用が行われたと考えられる。そして、この中世の遺構面の上には灰褐色から灰色粘土の包含層が拡がる。この層からは中世土器を中心に近世の遺物も出土している（図43）。

河道の流向 次の三つのポイントから北東から南西方向と判断した。

- ①土層断面で見ると西から東へ傾斜する土層が見られ、それが更に削り込まれているのが確認できることから西側が河道の滑走斜面側、東側が攻撃斜面側と認識される。
- ②斜杭群や井堰状遺構2に見られる杭の傾き方が河道の流向を反映している。
- ③自然流木の伸長方向が北東から南西に向いている。

3. 自然河道に伴う遺構（図20）

位置関係は図21の通りだが、大きく三つのまとまりに分かれ。まず、杭列遺構1・2としたもので調査区北東側の河道東岸近くに築かれている。次は井堰状遺構、斜杭群、立杭群で前述の杭列遺構より西側にある。最後は井堰状遺構2で南端中央辺りに位置している。

杭は頂部が失われていることもあり、どの段階で打ち込まれたのかを判断することはできない。井堰を構成する横木の標高を較べてみると、井堰状遺構1は2.9m、井堰状遺構2は2.9～3.1mである。二つの井堰状遺構は同時期に機能していた可能性を考えたい。そのほかの遺構もある時期の河道の流れに伴うものであろうが、詳細な検討はできなかった。

井堰状遺構1（図23左） 図面の上半部はA B二本の立杭と横木により構成される。その周囲には板材や流木がまとまって出土している。A Bの先端の標高は2.62m。下半部に南から北に傾いて打ち込まれている杭と横木で構成される。井堰状遺構2のような、しっかりととした構造ではないが、あるいは流出した部分があるのかもしれない。打ち込まれた杭の先端は調査したところまで2.5mに達する。

斜杭群（図23右） 長辺側を東西方向に向ける板材10数本を、間隔を空けて南北方向に長さ約6.0mにわたって並べている。板材は西から東に傾いており、その先端は標高3.0m前後となる。平面で見ると幾分弧を描くような並びとなる。これは河道の流れを反映しているのかもしれない。板材は長さ0.5～1.0m、幅5cm、厚さ2mm前後の薄いもので、火を受けているものが多く見られた。

井堰状遺構2（図24・25） 大きく二つのまとまりに分けられる。一つはe fラインを中心とするもので、長さ2.83m、0.08m角の角材を横倒しにし、その両側に杭を打ち込んでいる。杭は南西から北東に傾く。杭は丸材、角材の両者があり、太さは5cm前後。先端の標高はe fラインの最も北側の杭が1.95mまで達するが、そのほかは標高2.3m前後と比較的揃っている。この遺構の北北東あたりにも立ち杭が疎らではあるが確認できる（a b、c dライン）。

南西側の遺構は調査区外にも拡がっているようである。北西から南東方向に検出長5.0～6.0mに

わたって板材を打ち込み、部分的に横木をかませている。平面で見ると遺構は弧を描くように集かれている。また杭は弧の中心から外側に向かって頂部が傾くようである。これは当時の河道の流れを反映しているからであろう。周囲には自然流木が集積していた。遺構の構築により淀みが生じたのであろうか。

調査区南端側、すなわち東西方向側は杭が密に打ち込まれている。これに対し南北方向（k 1 ライン）側が疎らなのは、あるいは流出したものかもしれない。遺構を構成する杭は幅 5 cm、厚さ 2、3 cm 前後の長方形の板材の先端を山形に切り落としたものがその多くを占めた。横木は現状の長さ 40~60 cm 前後が大部分だが、長いものでは 1.1~1.3 m に及ぶものも見られた。

杭列遺構 1（図27） 長さ 1.82 m、幅 0.16 m、厚さ 0.05 m 前後の板材を横倒しにし、河道側に杭を打ち込んでいる。杭は径 2~3 cm の細い杭を使用しており板材を固定するにはやや脆弱な感がある。板材は中粒砂層上面に置かれており、底面の標高は 3.45 m である。

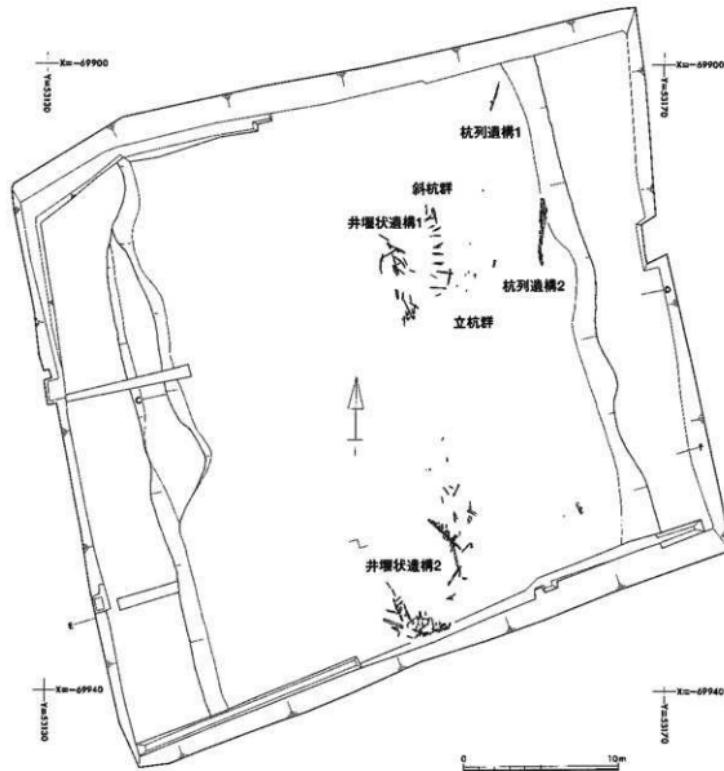


図20 A区自然河道実測図 (S=1/300)

杭列造構 2 (図28) 長さ4.28m、太さ0.12~0.35mの横倒しとなった大木の両側に杭を打ち込んでいる。河道により運ばれてきた大木を利用したものか。大木の下面の標高は3.0~3.1mである。aは径3~5cmの丸杭、bは径10cmの太さの木を半割りに加工したもの。bの先端は標高2.51mにまで達していた。

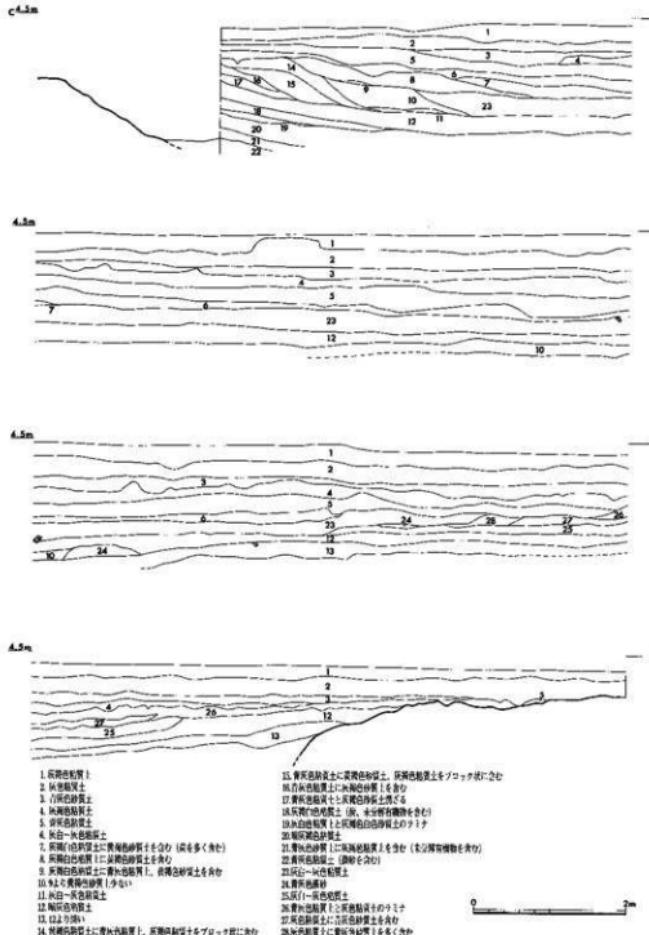


図21 A区土層堆積図 (1) (S=1/60)

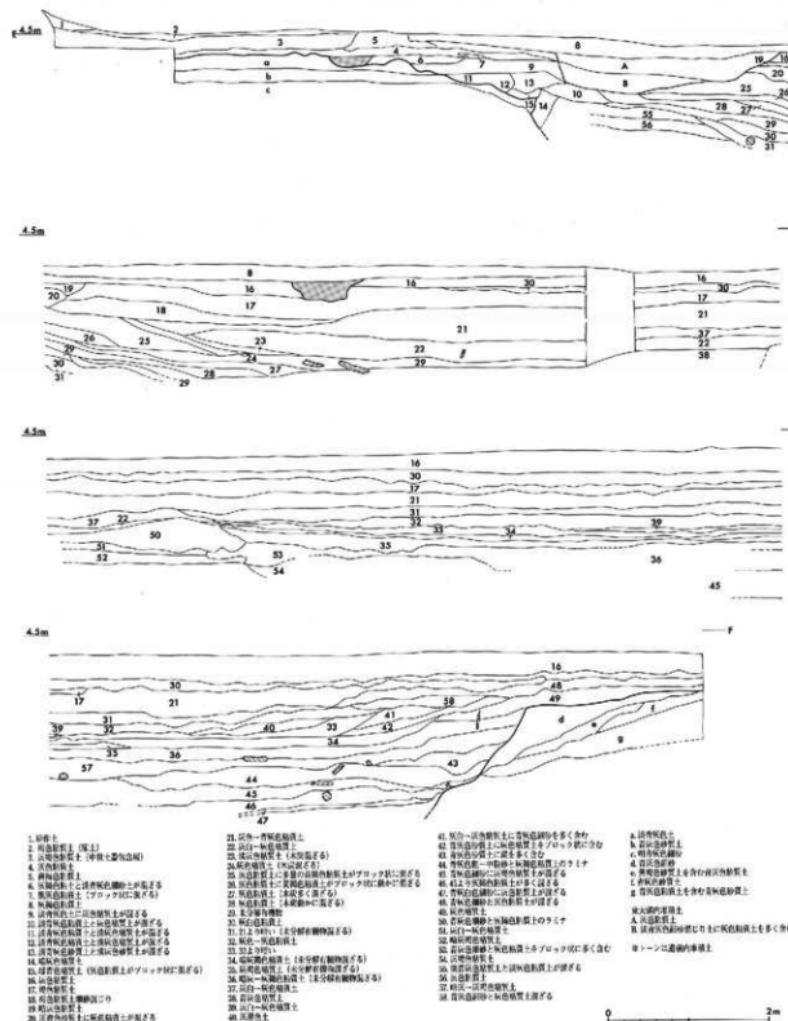


図22 A区土層堆積図 (2) (S=1/60)

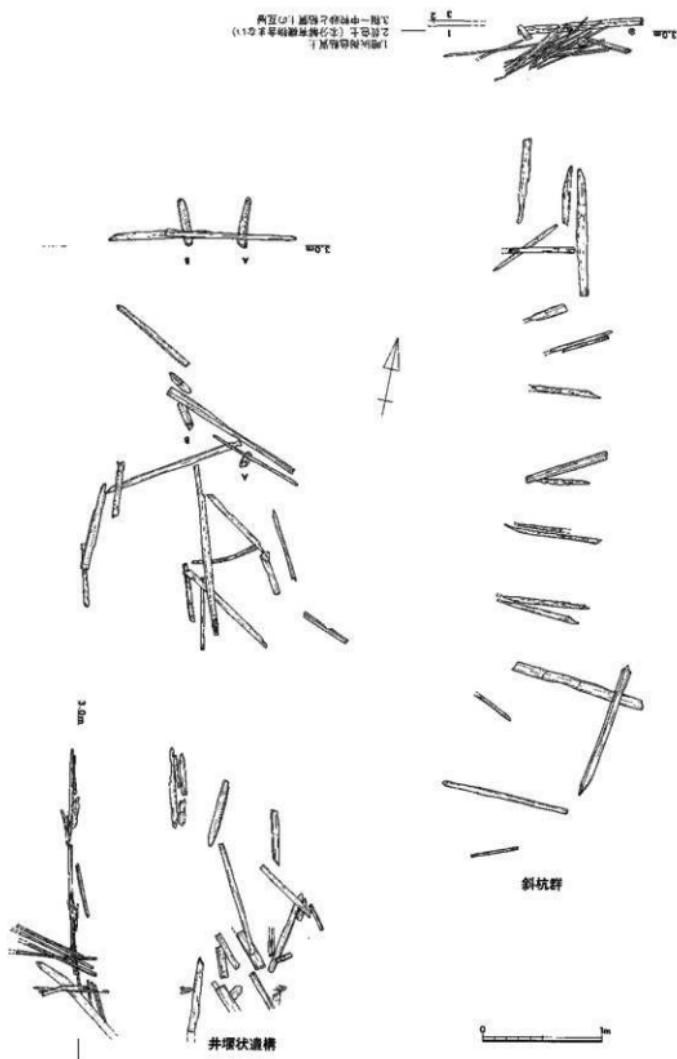


図23 A区井壁状遺構・斜坑群実測図 ($S=1/40$)

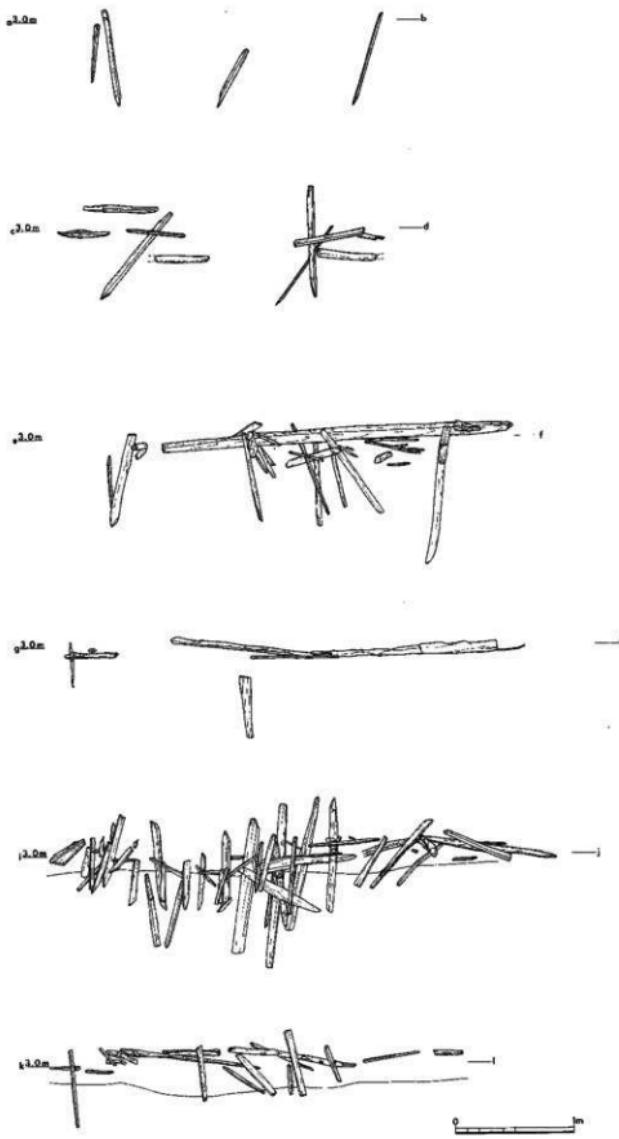


図24 A区井堰状造構2立面図 (S=1/40)

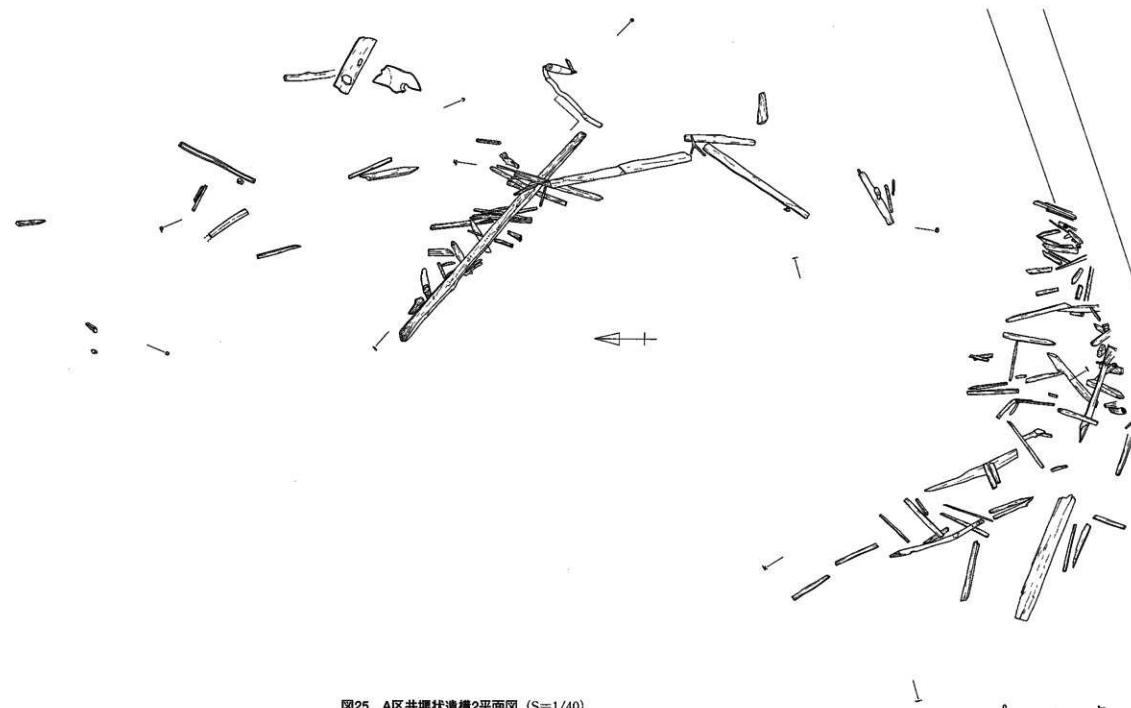


図25 A区井堰状造構2平面図 (S=1/40)

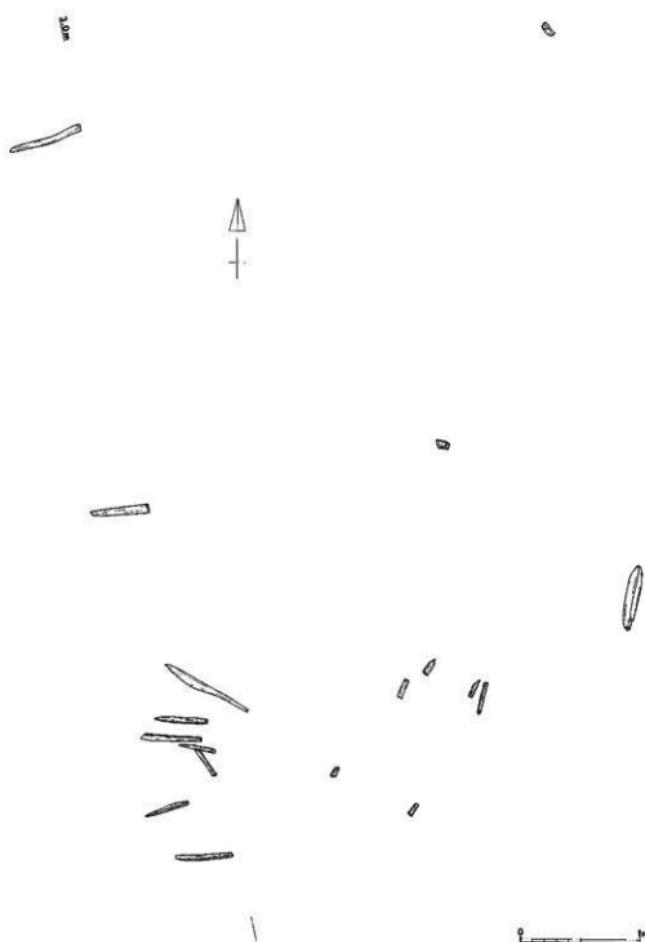


図26 A区立杭群実測図 ($S=1/40$)

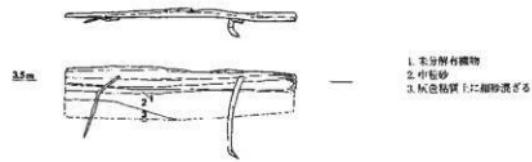


図27 A区杭列遺構群1実測図 (S=1/40)

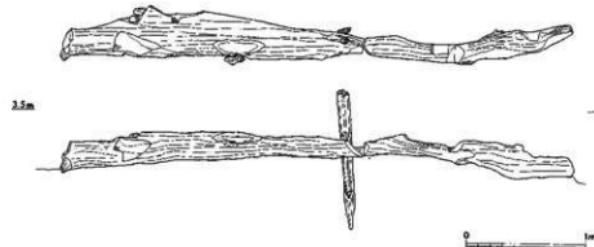


図28 A区杭列遺構2実測図 (S=1/40)

3. 遺物

遺物出土状況（図29） 図29では自然河道内から出土した土器、木製品のほか自然流木の出土状況を図化している。図面の中央部分が疎らになっているが、これは底面まで調査していないからである。平面図（図29）では木製品、自然流木に着目したい。全体として伸長方向が北東—南西方向になるものが多いようである。これが河道の流向を反映するものであることは既に述べた通りである。土器、木製品はいずれも未分解有機物の多量に混ざった泥層から出土しており、非常に残りの良い状態である。また土器の中にはその場で押しつぶされたような出土状態を示すものも見られた。泥層中からの出土であることも合わせて考えれば、土器や木製品はそう遠くないところから運ばれたか、意図的に投棄されたものと判断したい。

次に図30の土器の垂直分布図を見てみたい。この図は、先の平面図のところでも述べたような調査上の問題点を抱えている他、実測図に載せた資料のみ対象にしているという条件つきのものである。しかしながら、大つかみな堆積過程はることはできよう。すなわち図30の上段の枠内では西から東向きに傾斜する河川堆積層（泥層）中から松本IV-1からV-2期⁽⁶⁾の土器が多数出土している。遅くともこの時期には河道は形成されていたようである。河道は序々にシフトしているが、その後の変遷を遺物で追うことは出来ていない。そして河道は埋没し沼沢地化するが、その段階に形成された土層からは草田6～7期を中心にして松山Ⅲ期⁽⁷⁾までの土器が出土する。この時期には河道が完全に埋没し中心部は凹地になっていたことがわかる。そして館跡の東大溝が掘削された中世以降については後項で述べたい。



A区自然河道 調査風景

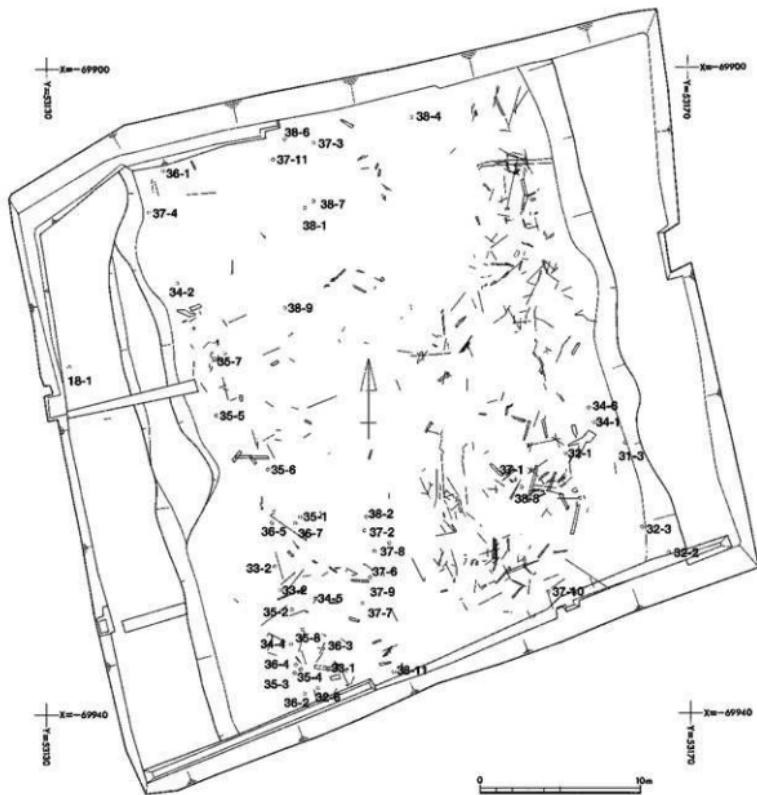


図29 A区自然河道遺物出土状況実測図 (S=1/300)

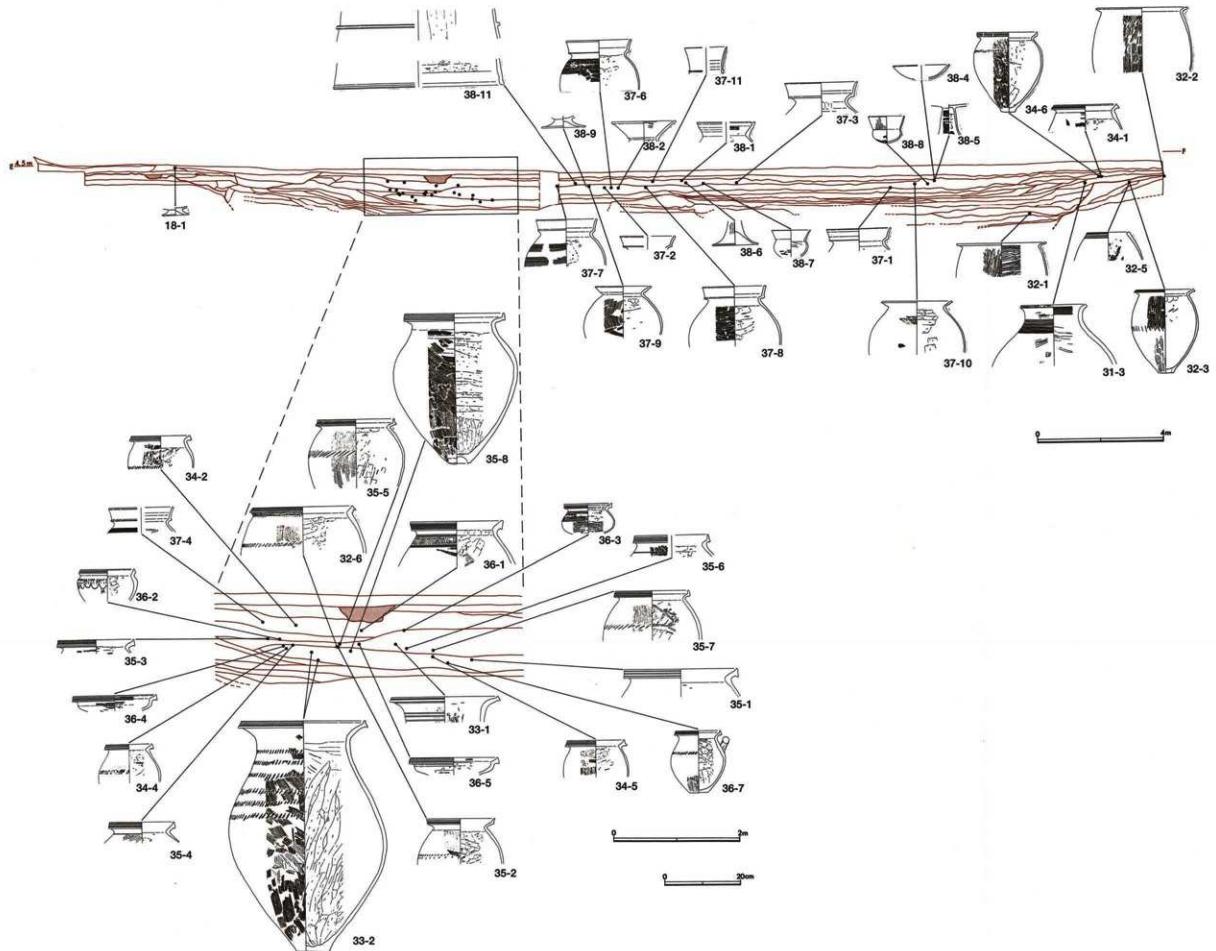


図30 A区自然河道出土遺物垂直分布図（土層上はS=1/120、下はS=1/60、遺物はS=1/10）

弥生土器・土師器

図31の1、2は前期の壺。松本I-2様式に比定される。1は復元口径26.2cm。外面にヘラ描き直線文を有する。2は復元口径25.4cm。3は松本II様式の壺。口径17.1cm。口縁端部には斜格子文、頸部には3条一単位のクシ状工具による15条の沈線が施されている。4は逆し字状の口縁をもつ壺。松本II様式。口径21.8cm。外面は口縁下位はヨコナデ、胸部上半は縦方向のハケ、下半はヘラミガキ。内面は横向向のハケ。

図32の1、2は松本III-1様式の壺。口縁部が「く」の字に屈曲する。外面にはススが付着する。1は口径24.0cm、2は口径24.2cm。3はIII-2様式の壺。口縁端部は上下にわずかに拡張し凹線状の凹みをもつ。胸部の中ほどでの最大径の辺りには刺突文をめぐらす。外面は全体にススが付着している。4、5は無頸壺。松本III-2～IV-1様式。口縁部には凹線文4条をめぐらす。4は口縁下位に円孔を空ける。4は復元口径11.8cm、5は11.3cm。6は松本IV-2様式の壺。上下に拡張した口縁端部には3条の凹線文がめぐる。頸部には指頭圧痕文帯が付き、胸部上位に刺突文をめぐらす。調整は外面縦方向のハケ、内面はヘラケズリ。外面にはススが付着する。

図33の1、2は広口壺。口縁端部は上下に拡張し、凹線文2条を施す。頸部にも凹線文3条めぐらす。復元口径28.0cm。2は全形を復元できたもので、口径

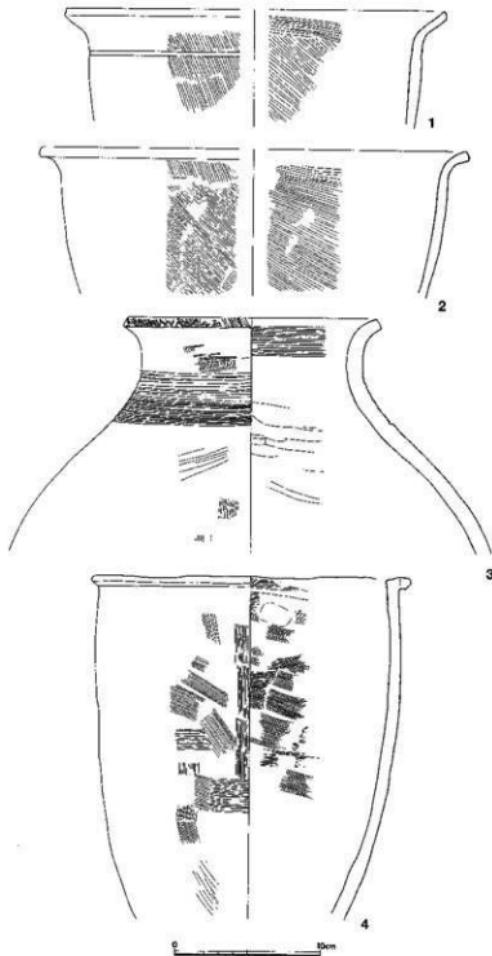


図31 A区自然河道出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

32.6cm、器高60.8cm、底径8.3cmの大型品である。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文を施す。頸部から肩部にかけては6段の刺突文をめぐらす。外面は縱方向のハケで、胴部下半は一部ヘラミガキ。胴部内面は縱方向のヘラケズリで、頸部にも横方向のヘラケズリを施す。松本IV-2様式に比定される。

図34は松本V-1様式の壺。口縁部は「く」の字に屈曲する。端部は上下に拡張させ凹線文を施している。1から5は内傾して立ち上がり、6は直立する。1は口径16.3cm。端部には3条の凹線文を施す。2は復元口径15.2cm。口縁端部には2条の凹線文を施す。胴部に刺突文をめぐらす。3は復元口径12.2cm。口縁端部には3条の凹線文を施す。胴部上半には貝殻腹縁原体による連続刺突文を2段めぐらす。4は復元口径12.0cm。口縁端部には3条の凹線文を施す。胴部にハケ原体による押し引き状の連続刺突文をめぐらす。5は復元口径14.9cm。口縁端部には3条の凹線文を

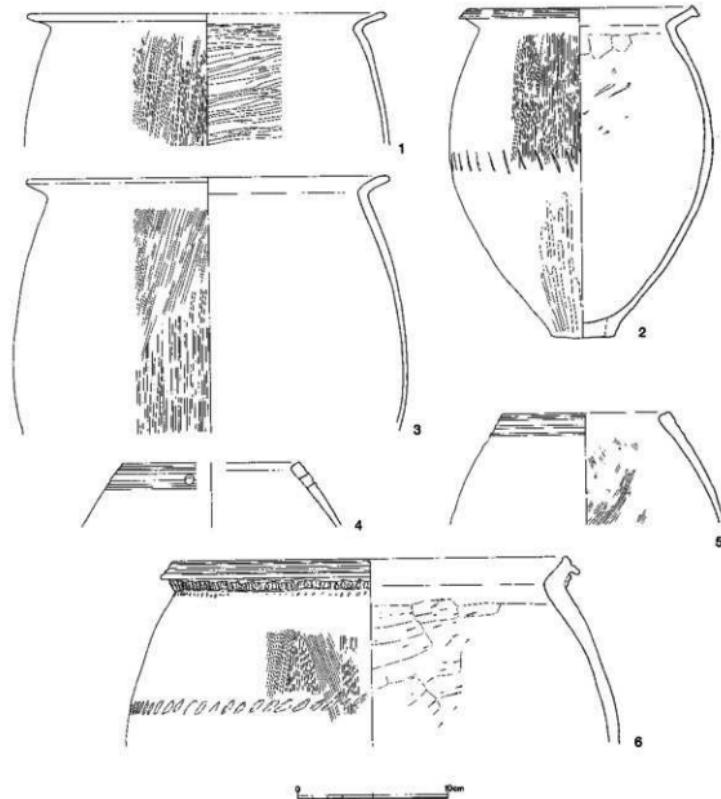


図32 A区自然河道出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

施す。外面にはスヌが厚く付着する。6は口径16.1cm、器高21.0cm、底径3.8cm。直立する口縁部の外面には2条の凹線文を施す。胴部最大径は16.0cm。胴部上半には刺突文をめぐらす。外面にはスヌが付着する。

図35は松本V-2様式の壺。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は拡張するものである。端部には3~4条の凹線文を施している。1は復元口径29.5cmの大形品。口縁端部に3条の凹線文を施す。2は復元口径17.9cm。口縁部は直立し、外面には3条の凹線文を施す。3は復元口径20.0cm。口縁部は内傾し外面には4条の凹線文を施す。4は復元口径16.7cm。口縁端部には厚くスヌが付着する。端部には4条の凹線文を施す。5は復元口径20.2cm。口縁端部には3条の凹線文を施す。胴部上位には連続刺突文をめぐらす。6は口縁部は内傾し、外面に3条の凹線文を施す。外面にはスヌが付着する。復元口径19.3cm。7は口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。外面には4条の凹線（擬凹線か）文を施す。胴部上位に連続刺突文をめぐらす。復元口径19.4cm。8は口径26.2cm、器高39.5cm、底径5.7cm。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、外面に3条の凹線を施す。底部は剥落のため上げた状になっている。

図36の1は壺。口縁端部はほぼ直立し外面に3条を一単位とする擬凹線文を施す。頸部には3条の擬凹線文を上下二段にめぐらし、間にクシによる列点文を施す。2は小型の壺。口縁端部は内傾し外面に2条の凹線文を施す。肩部には列点文と刺突文、その下位に波状文をめぐらす。外面にはスヌが付着している。3は小型の壺。外面には赤色顔

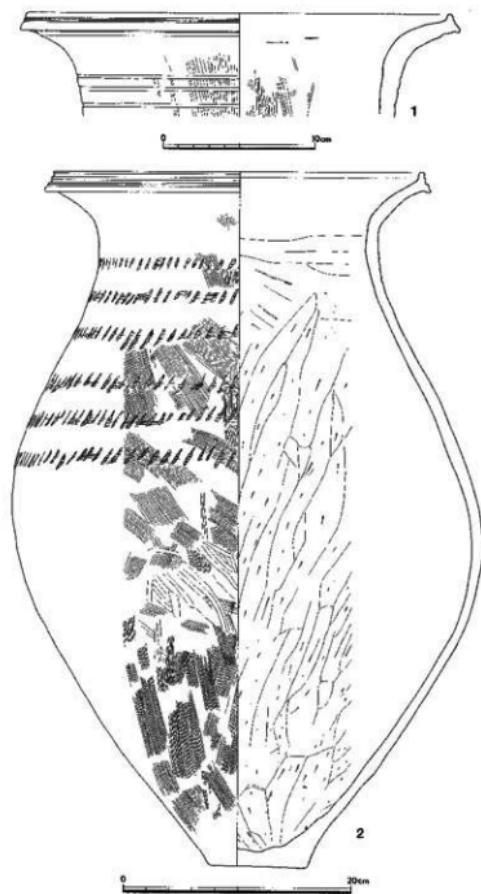


図33 A区自然河道出土遺物実測図 (3) (1はS=1/3、2はS=1/4)

料が塗布される。口縁端部は直立し外面に4条の擬凹線文を施す。胴部上半にはヘラ描き平行沈線文に刺突文をめぐらす。復元口径12.6cm。4、5は高坏。口縁部は「く」の字に屈曲し端部は上下に拡張する。外面には3条の凹線文を施す。4は内外面に赤色顔料が塗布される。復元口径は4が21.8cm、5が23.0cm。6、7は注口土器。7は口径11.6cm、器高16.3cm、底径4.9cm。口縁部は上下に拡張し内傾して立ち上がる。外面には8条の凹線文を施す。胴部には把手が付き、胴部上位には「ノ」字状の連続刺突文をめぐらす。

図37の1から8は複合口縁の壺。1が草田5期の可能性もある以外は6期に比定される。口縁端部はいずれも外方に短く屈曲するものである。3から6は端部が肥厚し2、7、8は面をもつ。復元口径は2が14.6cm、3が19.2cm。その他は16.2~17.0cm。9、10は単純口縁の壺。端部は内側に肥厚し面をもつ。復元口径は9が14.8cm、10が18.8cm。草田6~7期。11は直口壺。タガ状の複合口縁部から少し開き気味に口縁は立ち上がる。復元口径11.0cm。

図38の1は土師器の単純口縁の壺。口縁部には稜をもち端部は短く外に折れる。全体に器壁が厚い。古墳時代中期。松山Ⅲ期か。2、3は鼓形器台。3は三方向に透し孔をもつ。上台部径17.8cm、下台部径15.6cm、器高9.6cm。草田6~7期。4から6は高坏。4、5は同一個体の可能性

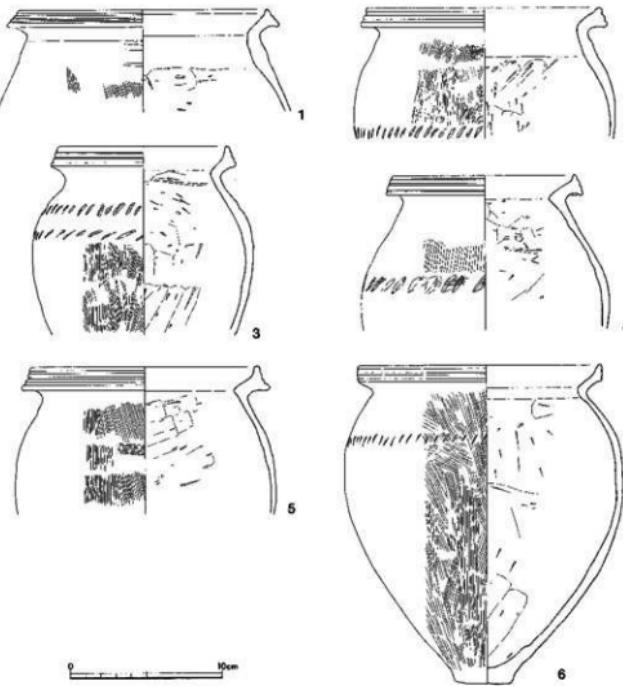


図34 A区自然河道出土遺物実測図(4) (S=1/3)

がある。4は剥落が著しいが内外面に赤色顔料が塗布されていたようである。5の脚部の接合は円盤充填法による。7、8は小型丸底壺。どちらも口縁部は逆ハ字状に立ち上がるが、7は端部がわずかに外方に折れる。松山I期か。9は低脚壺脚部。10は手づくね土器の壺。11は外面にタガ状の突帯をめぐらすもの。瓶型土器か。

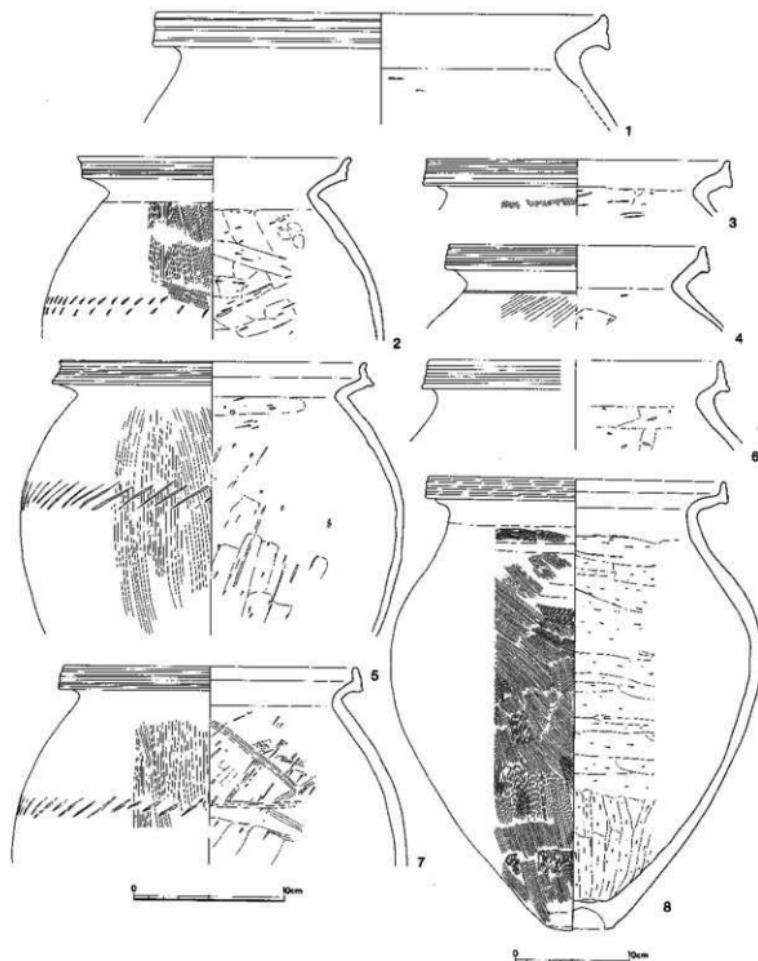


図35 A区自然河道出土遺物実測図 (5) (S=1/3、8はS=1/4)

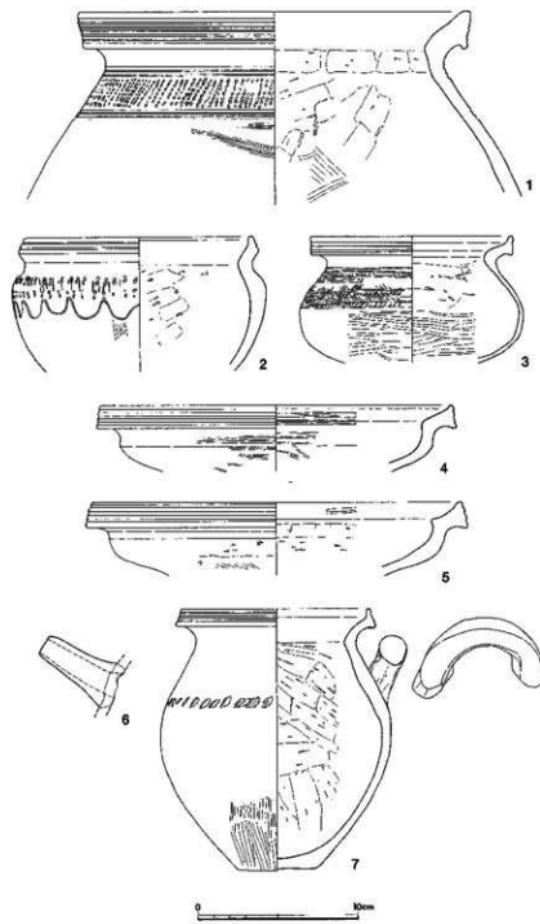


図36 A区自然河道出土遺物実測図 (6) (S=1/3)

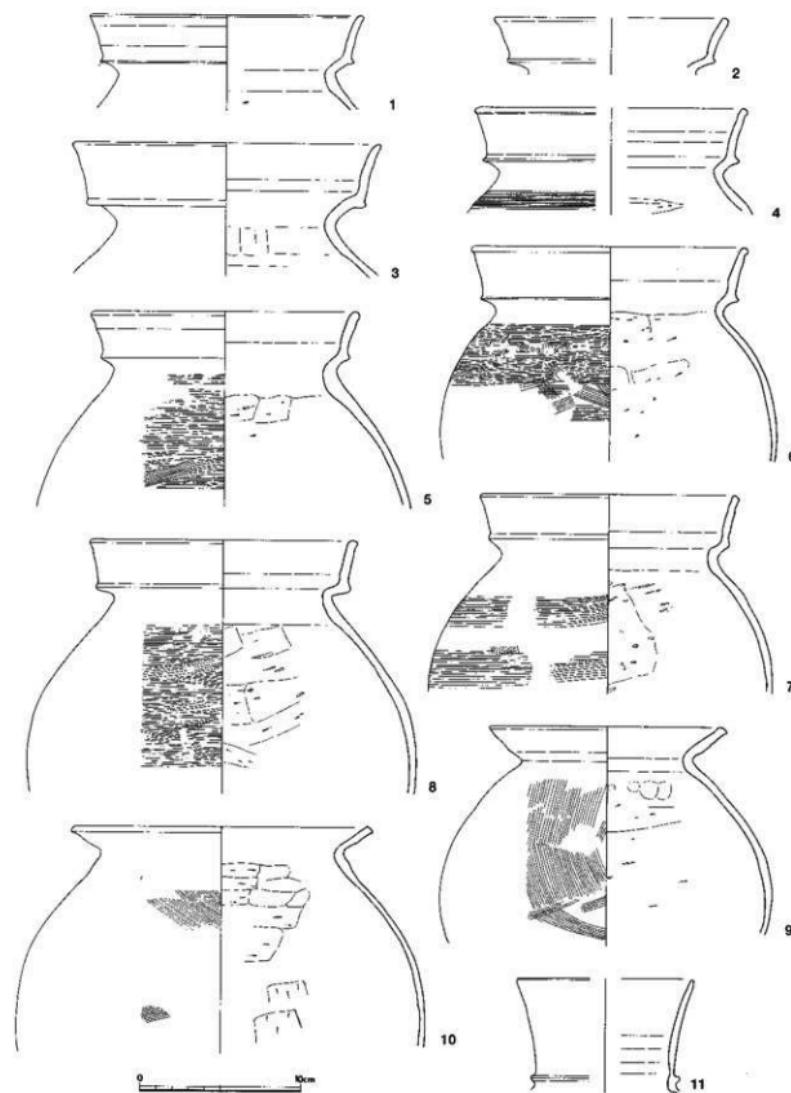


图37 A区自然河道出土遗物实测图 (7) ($S=1/3$)

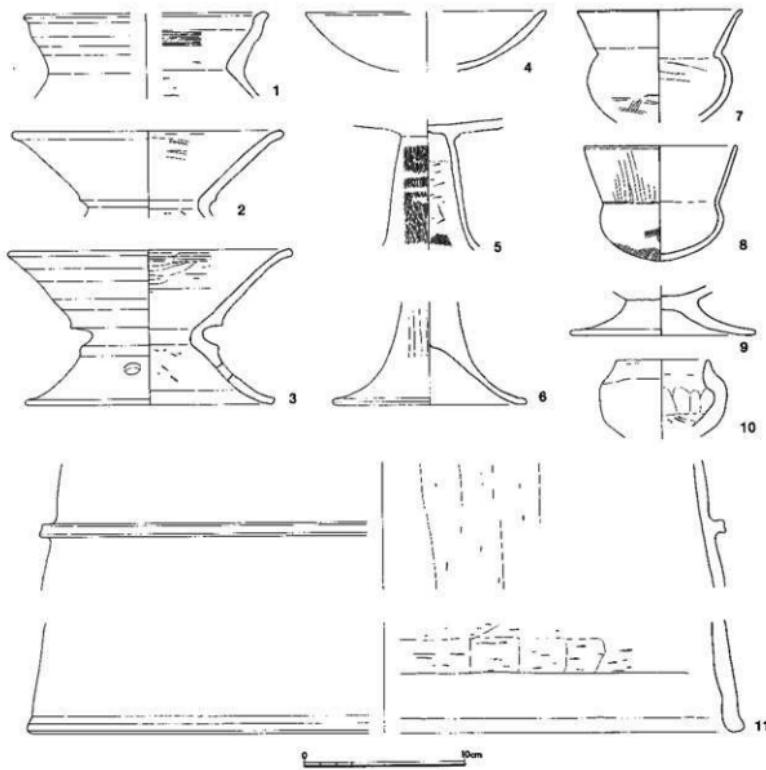


図38 A区自然河道出土遺物実測図 (8) (S=1/3)

木製品（図39～42）

図39の1は木鎌の身かと思われる。刃部は両側から削りだしている。現在三つに分かれている。現状で長さ27.8cm、幅10.0cm、厚さは1.4～1.5cm。2は剣物桶の把手。2条の溝が刻まれている。幅は1.6～2.3cm、厚さ1.9cm。3も同じく容器の把手。断面の幅1.8cm、厚さ1.7cm。4は用途不明品。板材をスペード形に加工したもの。図面の右端は欠失する。現状で長さ17.5cm、幅6.0cm、厚さ0.6cm。

図40はいずれも用途不明の木製品である。1は断面方形の材の一方側の長辺を段状に加工したものである。下端は欠いており現状の長さは34.9cm、幅4.6cm、厚さ3.3cm。上位には上面から右側面に向けて2.5×1.2cmの孔を穿っている。この孔の下位1.0cmの所には焦げた部分が見られる。2は長さ73.5cm、幅13.4cm、厚さ1.6cmの板材の両端をL字状にくりこんでいる。下位には2か所に方形の孔が穿たれている。3は大形の板材。長辺の一方を弧状、段状に加工している。両短辺側を欠いており現状で長さ105.5cm、幅は最大で15.9cm、厚さ2.7cm。左長辺に近接して2か所に方形の孔が穿たれている。大きさは2.5×1.9cm。4は板材の先端を山形、長辺の一方を稜妻状にくりこんだものである。先端は炭化している。図面の上端側を欠く。現状で長さ42.7cm、幅15.3cm、厚さ2.5cm。5も板材の先端を山形に加工したものである。横断面はわずかに湾曲するように仕上げている。残りが悪く大半を欠いている状態だが、現状で長さ52.1cm、幅25.6cm、厚さ4.0～6.3cmである。

図41も用途不明品である。図41の1は大形の腰掛け状の木製品である。図の下端以外は総て破損しているため全形は

不明である。上面には幅12.0cmの縁を持ち、そこから底面に向けてスロープを描く。底面の厚さは1.0cm程度で縁に較べ非常に薄い作りである。2か所に孔が穿たれている。孔はいびつな隅円方形を呈し、大きさは2.5～3.5cm角である。また裏面には別材に架けるためのくり込みが見られる。現状で長さ40.5cm、幅15.1cm、厚さ8.5cmである。2は不定形の板材で、上面は大

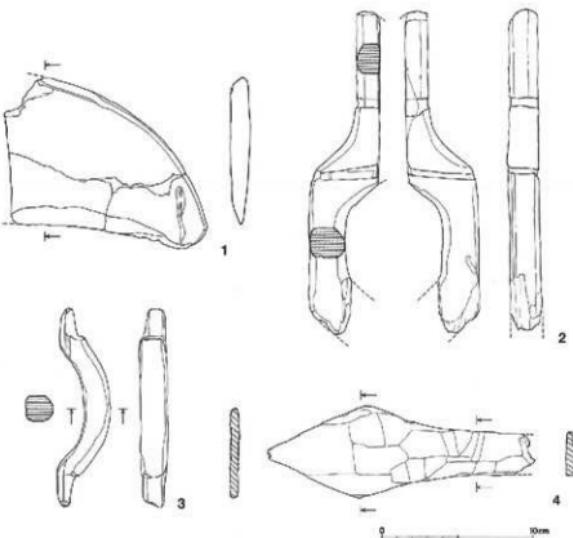


図39 A区自然河道出土木製品実測図（1）(S=1/3)

きく抉られている。側面から裏面にかけて炭化している。現状で長さ37.4cm、幅15.7cm、厚さ5.5cm。3は現状で隅円方形をなす芯持ち材である。現状で長さ26.8cm、幅16.2cm、厚さ5.4cm。

図42の1は用途不明の長方形の板材。両長辺側から先端にかけて焦げている。現状で長さ27.8cm、幅9.6cm、厚さ2.6cm。2は天秤棒で下端は欠失する。紐かけ用の切り込みは上、下の二か所に見られる。復元すると全長50.4cm、径3.4cmである。3は旧状をとどめている部分がほとんどな

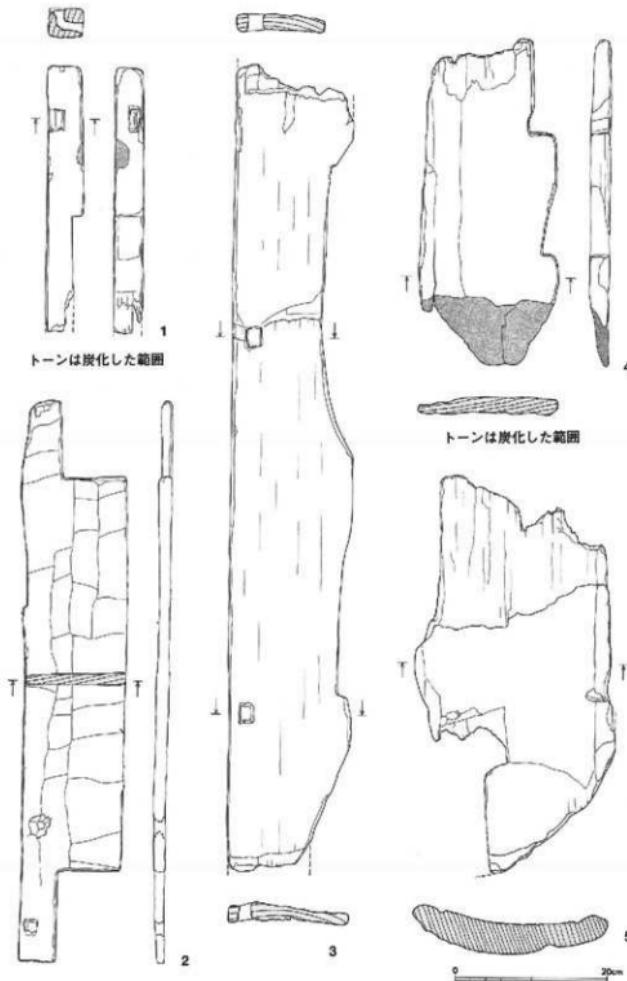


図40 A区自然河道出土木製品実測図 (2) (S=1/6)

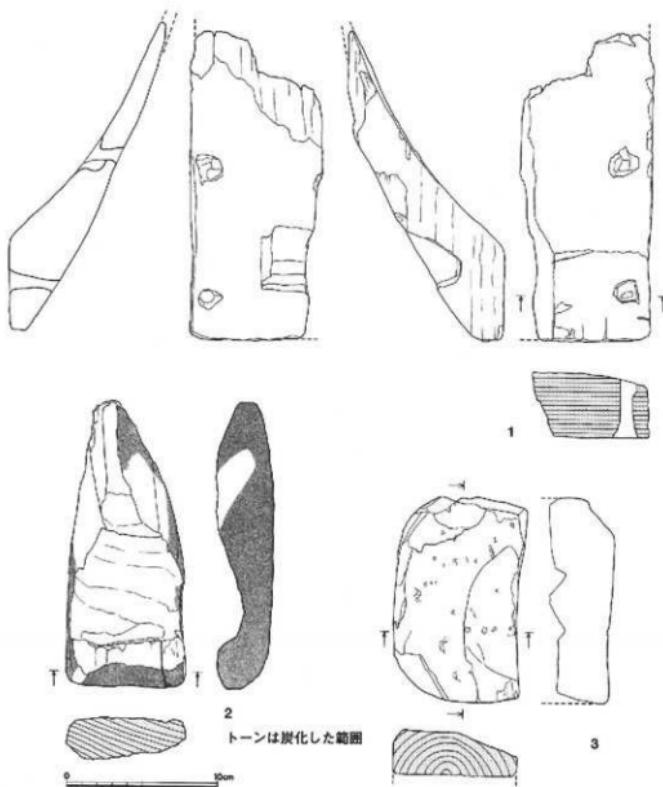


図41 A区自然河道出土木製品実測図（3）(S=1/3)

い。現状で長さ62.3cm、幅7.6cm、厚さ4.3cm。

なお、掲載していないが木製品はこの他にも大形の部材などが見られる。

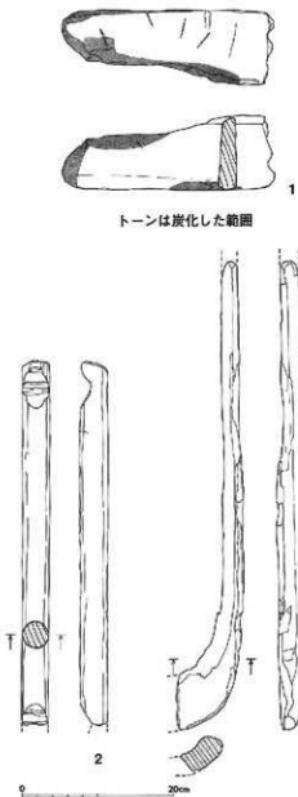


図42 A区自然河道出土木製品実測図 (4) (S=1/6)

第3節 自然河道埋没後の遺構（図94）

調査区北西部で有頭棒を転用した遺構を検出した。有頭棒の先端の標高は2.68mに達する。有頭棒は頭部を欠いているものの野球のバットの形に似ている。下端のグリップ状部分から72cm上までは平滑だがその上方はやせている。これが地表面に露出していた部分と考えられる。これを土層図に合わせると2層上面に対応することから、2層上面から打ち込まれたものと推定される。この層はE Fラインの40層にあたるものであり、河道の埋没する最終段階と考えられる。時期は、弥生時代末から古墳時代初頭と思われる。有頭棒は現状で長さ99.6cm、径3.9cm。グリップ部分は径4.8~4.9cmである。

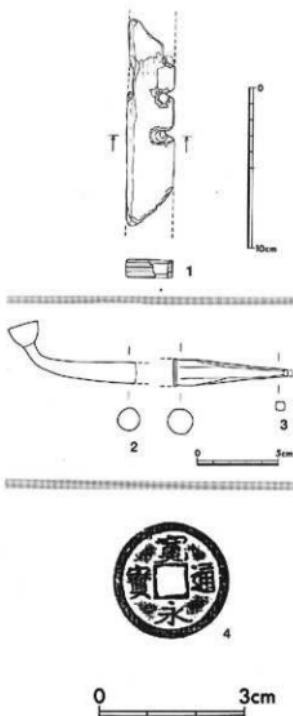


図43 A区包含層出土遺物実測図
(1はS=1/3、2・3はS=1/2、4は実大)

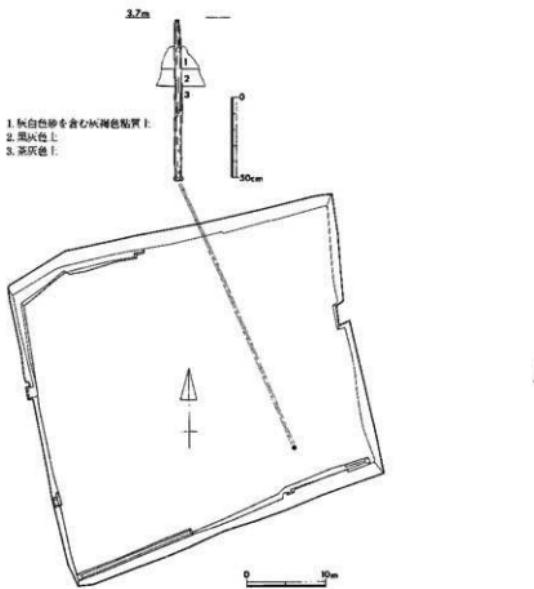


図44 有頭棒出土状況実測図
(出土状況図はS=1/30、全体図はS=1/600)

中世に大溝が掘削される時期の土地利用（生産域、居住域）の状況は明確にできなかった。土層断面の観察で溝状造構の存在も確認されているが、これが水田耕作などに伴うものかは不明である。また館跡の遺構面のつづきからは中世から近世の土器、木製品が出土している（図43）。図43の1は火鑄白。上、下端を欠いている。長さ12.9cm、幅2.9cm、厚さ1.2cm。火鑄穴は3か所確認できる。2は煙管の雁首、3は吸口。3の内部には羅字と思われる木質が残されていた。2は湾曲する首部に楕円形の火皿が付くタイプ。火皿の径1.3cm、羅字結合部の径が0.9cmである。首部の長さは4.7cmで肩はつかず、羅字は羅字結合部から見て左側にある。所産年代は江戸時代前半か。吸口は肩が付かないタイプ。口に含む側の端部が3cm角、羅字を差し込む側の端部が径1.0cm。3は古寛永通寶、1636年初鋳。

第4節 小結

本調査区では①中世の館跡に伴う遺構・遺物、②弥生時代末から古墳時代初頭の自然河道とそれ

に伴う遺構と遺物、③河道埋没後の遺構と遺物、を検出した。これらはA区で完結している遺構というわけではない。①についてはB1・B2区、②③についてはD・E1・F1・F2区で関連する遺構、遺物を検出している。本遺跡全体のありかたとして弥生時代後期、中世の遺構が営まれる微高地部分と弥生時代後期初頭から形成され弥生時代末から古墳時代初頭に埋没、沼沢地化した低位部分とが、交互に見られる。このため各調査区の小結は①から③とそこから派生する問題点について繰り返し記述することとなる。本項では後章につなげる意味でも要点を整理しておくにとどめたい。

①中世の館跡に伴う遺構・遺物

- a. 館跡をめぐる東側の大溝を検出した。⇒「まとめ」で西大溝と比較したい。
- b. 土器窯は土師器を主体とするが、貿易陶磁、国産陶器も他の調査区に較べて多く見られた。
⇒まとめで他の調査区の出土遺物組成と比較し館内の空間利用について検討したい。

②弥生時代終わりから古墳時代初頭の自然河道

- a. 弥生時代後期初頭から形成され弥生時代末から古墳時代初頭に埋没した自然河道を検出した。
⇒D、E1、F2区の自然河道も同様である。調査者はこれらを一体の河道ではないかと考えている。この点については、後章でも、その都度触れていく、まとめにつなげていきたい。
- b. 河道に伴う井堀、杭列遺構などの河道への積極的な働きかけの痕跡を検出した。
⇒次に居住域がどこか、という問題が生じてくる。B1区では当該期の井戸や土坑も検出している。居住域の縁辺にあたるものであろう。他の調査区では当該期の遺構の存在は明確でない。隣接する姫原西遺跡や小山遺跡の調査成果も合わせると平野部に網状に流れる小規模な自然河道の周辺の微高地に集落が展開していた状況が想定される。
- c. 河川堆積層中ではあるが良好な遺存状態の土器が多く出土している。

③河道埋没後の遺構・遺物

館跡の東大溝が掘削される時期の低位部の土地利用のありかたであるが、遺構としては時期を明確にし得ない溝や、近世以降と思われる杭列が検出されたのみである。同じく館跡のすぐ西側にあたるC区では中世の水田耕作土の存在が確認されており、生産空間として利用されていたことがわかっている。本調査区では水田耕作に関連すると思われる遺構などは確認できていない。なお花粉分析では中世土器包含層（図22の第3層）の土壤でイネ科花粉の出現率が高いことから近くに水田が抜がっていた可能性を指摘している。

- 註（1）中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995
(2) 間壁忠彦『考古学ライブリー60 備前焼』ニューサイエンス社 1991
(3) (1) 同じ
(4) 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究NO.2』 1982
(5) 鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』1992
(6) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年」木耳社 1992
(7) 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討ー」

『島根考古学会誌 第8集』 1991

第2章 B1区の調査

概要

中世の館跡と館跡が築かれる以前の遺構を検出した。館跡に伴う遺構は建物7棟、土坑23基、井戸2基、溝10条を確認した。調査区の中央から南のあたりが遺構密度が高く、大形の建物が復元された。東西の大溝との位置関係も合わせて考えれば、館跡の中心部分に相当するのではないかと推察される。館跡以前の遺構としては、弥生時代末から古墳時代初頭の井戸1基、土坑1基、溝6条である。前章で述べたようにA区で検出された自然河道付近の微高地上に居住城が拡がっていたことを示すものといえる。以下、館跡の時代、館跡以前の時代に分けて記述して行きたい。

第1節 中世の遺構と遺物

1. 基本層序（図45）

耕作土の下層には部分的に床土が見られ、その下層が旧耕作土となる。この層からは中世土器のほか近世の陶磁器も見られた。その下が遺構面を形成する黄灰色シルトとなる。遺構面と旧耕作土との間には中世土器の包含層が見られる。遺構面は基本的に一面だが、調査区中央南端で部分的に整地層（第4層）が確認された。土層断面では整地層上面からも柱穴が掘り込まれているのが観察できたが、平面的な調査では検出できなかった。遺構面の標高は4.3～4.5m。調査区北東側から西に向けて傾斜している。遺構面を形成する黄灰色シルトは標高4.2mあたりでグライ化し漸次細砂層に移行していくようである。

2. 中世の遺構と遺物の概要（図46）

遺構は調査区北東部分が分布密度が希薄な他は、調査区全体に拡がっている。特に調査区中央やや南寄りの一帯（建物1～4の周辺）では遺構が隨所で切り合っており、長期間に渡って館跡が機能していたことを示している。館内からは建物7棟、土坑23基、井戸2基、溝10条を検出した。柱穴は800あまりが検出されている。建物は復元できなかつたが、更に多くの構造物が存在したものといえよう。また柱穴内に礎板、柱根が非常に良好な状態で残されていた他、根石を備えるものも見られた。なお、井戸は内部施設を確認できた2基のみしか数えておらず、その他可能性のあるものも総て土坑に含めている。溝は総て南北方向に延びるものである。他には錢貨が6枚、鉄滓が342.46g出土している。石製品としては砥石1点と五輪塔の水輪部、地輪部も1点ずつ出土している。水輪部は建物の根石に転用された状態で出土しており興味深い。石材は凝灰質砂岩（来侍石）製である。

3. 包含層（図48）

基本的にグリッドによる取上げを行っている。出土地点をおさえているものは図47に掲げた。1～14は貿易陶磁。貿易陶磁は12世紀から15世紀代までの資料が見られた。13が朝鮮半島製のはかは総て中国製である。15～22は国産陶器である。1～9は青磁碗。1は太宰府分類のI～5類。外面に削り出しの鎬蓮弁文。釉は朽ち葉色を呈する。2はI～6類。外面には削り出しの蓮弁文の上に縱方向の御目を入れる。3はI～4b類。口縁部は輪花をもつ。内面は二本の沈線で区画する。4、5は口縁部が外反するタイプ。上田分類のD類に相当する。14世紀後半～15世紀前半。6は外面に雷文帯と大きな線書きの蓮弁文をもつ。上田C～II類。14世紀後半～15世紀前後。7は外面に

細い線描きの蓮弁文をもつ。上田B-IV類。15世紀後半。8、9は底部。高台部疊付と内部は露胎。太宰府I類。9は高台部に釉かかる。15世紀前半か。9は青白磁の合子。釉は青みがかった乳白色。12世紀中ごろ。11、12は白磁皿IX-1類。口縁端部が口禿げのもの。13は朝鮮王朝青磁。胎土は精良で釉は淡い青灰色を呈する。13世紀後半。产地は朝鮮半島西岸か。14は中国陶器。胎土は精良で釉調は黒褐色である。15は瓦質の壺鉢。内面にクシ描き条線が12条程度見られる。16、17は瀬戸の天目。18、19は常滑系陶器の口縁部。18は壺、19は鉢か。20、21は備前焼の壺鉢の口縁部。内面に放射クシ描き条線を8条施す。Ⅲ期に比定される。21は底部。内面にクシ描き放射条線を6条施す。22は備前焼の壺。口縁を外に折り曲げ玉縁状とする。Ⅲ期、14世紀。

銭貨(図49)

銭貨は図49に掲げたもの6枚(もう1枚は4に接着)のほか土坑18(図79)からも1枚出土している。1が柱穴から出土した他の遺構にともなわない。いずれも中国北宋錢だが模鑄錢の可能性もある。書体は1~3が真書、4は篆書。

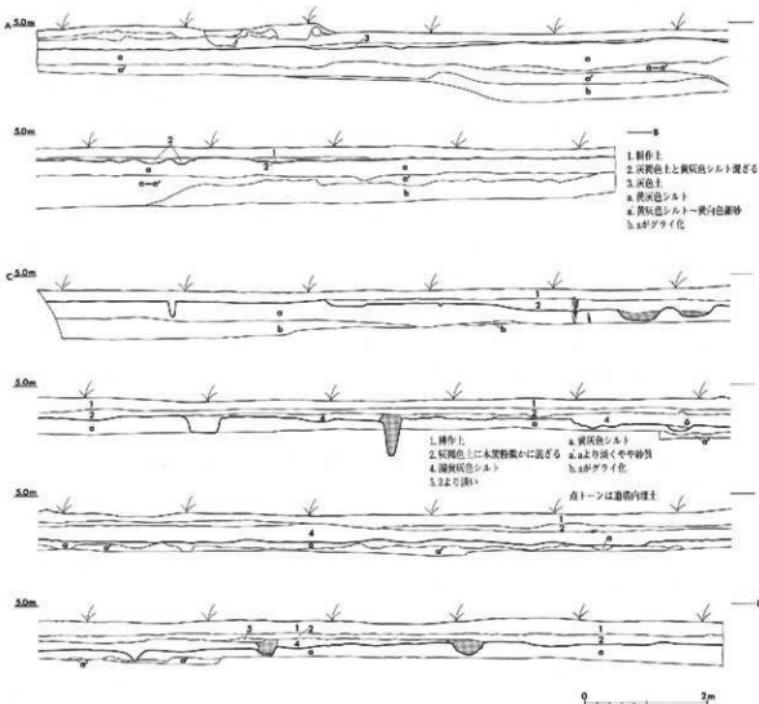


図45 B1区土層堆積図 ~東・南壁~ (S=1/80)

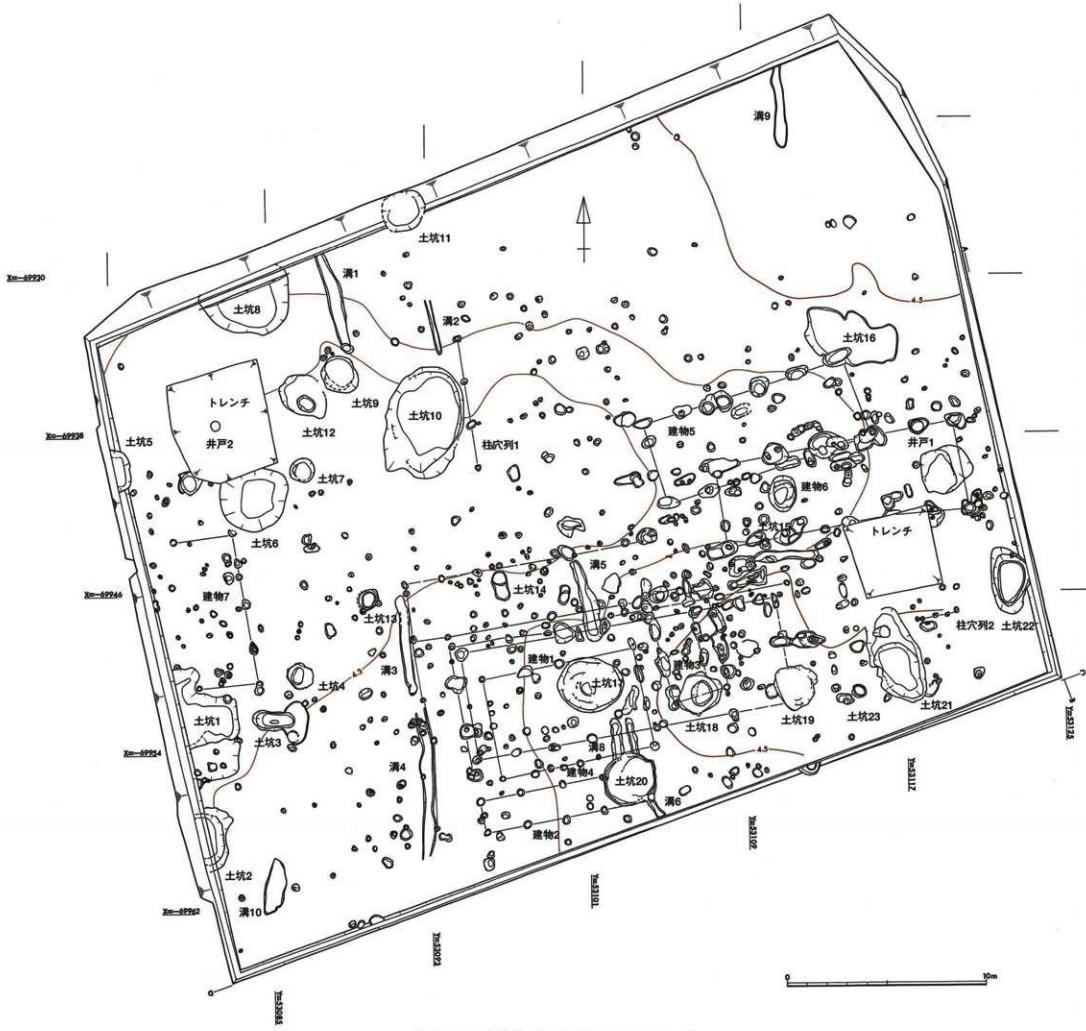


図46 B1区全体図 (S=1/200、10cmセンター)

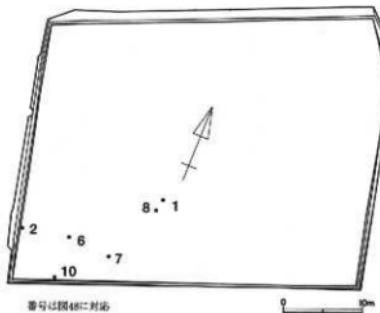


図47 B1区包含層遺物出土位置図 (S=1/600)



図48 B1区包含層出土遺物実測図 (S=1/3、21・22はS=1/4)

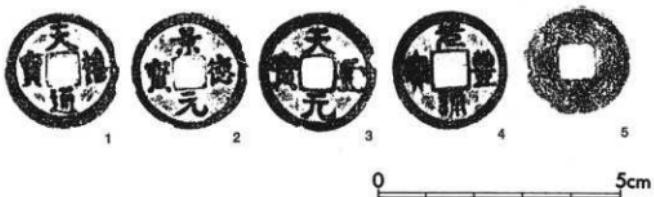


図49 B1区銭貨拓影（実大）

B 1区銭貨計測および観察表

	名 称	初鑄年	錢径(A)/錢徑(B)	内径(C)/内径(D)	錢 厚	量 目
1	天禧通寶	1017	23.70mm / 23.72	20.00mm / 19.75	0.79~0.94mm	2.07g
2	景德元寶	1004	23.95 / 24.10	20.65 / 19.99	0.57~0.70	1.97
3	天聖元寶	1023	24.54 / 24.50	20.30 / 20.00	1.00~1.22	2.88
4	元豐通寶	1078	24.68 / 24.35	21.48 / 21.21	1.09~1.25	(6.68)
5	?	?	21.80 / 22.00	19.65 / 19.68	0.95~1.05	2.17

参考文献 永井久美男「中世の出土銭ー出土銭の調査と分類ー」兵庫埋蔵銭調査会1994

表は同書の「8. 古銭の計測」(9~10ページ)をもとに作成している。

3. 建物

柱穴総数800あまりが検出された。特に調査区の南側で検出密度が高い。幾度となく建て替えが行われたのであろう。この中から7棟の建物を復元した。建物はいずれも側柱建物であった。建物2は他の建物よりも大規模で堀、溝を伴う可能性も考えられる。また建物は高い規則性をもって配置されていたようである。低地に立地するため柱穴内には礎板、根石を備えるものが見られた。また柱根が遺存している柱穴も見られたが、次章で述べるB 2区に較べればその数は少ない。なお、建物の柱間寸法等の計測値については図中に記した。規模と軸方向は表にまとめている。

建物1から4は図50に掲げている。

建物1(図50) 調査区中央より南に位置する。6間×2間の規模を有する調査区内で最も大形の建物である。棟方向はN-10°-Wにとる。北側の桁行き間16.12m、西側の梁行き間5.42m、床面積86.37m²。柱穴の形状は円形から梢円形のものまで見られ、径38~61cm、深さ18~40cm。柱間寸法は北桁行きで1.90~2.72mまでと一定でない。建物の北東隅は掘り形を持たず、44×32×20cmの石が置かれていた。P 232には根石(28×22×10cm)がP 70には礎板が置かれていた。またP 214には、根石とその回りから礎板3枚以上が出土した。礎板は根石の横にわずかに重なりをもった状態のものや、底面より高い状態で検出されたものも見られた。礎板は柱穴内にはP 72、86、90で柱根が残されていた。柱根の太さは11.5~13.0cm角であった。

柱穴掘り形埋土中では土師器の小破片が少量出土しているが、P 266では白磁の小破片が1点見られた。

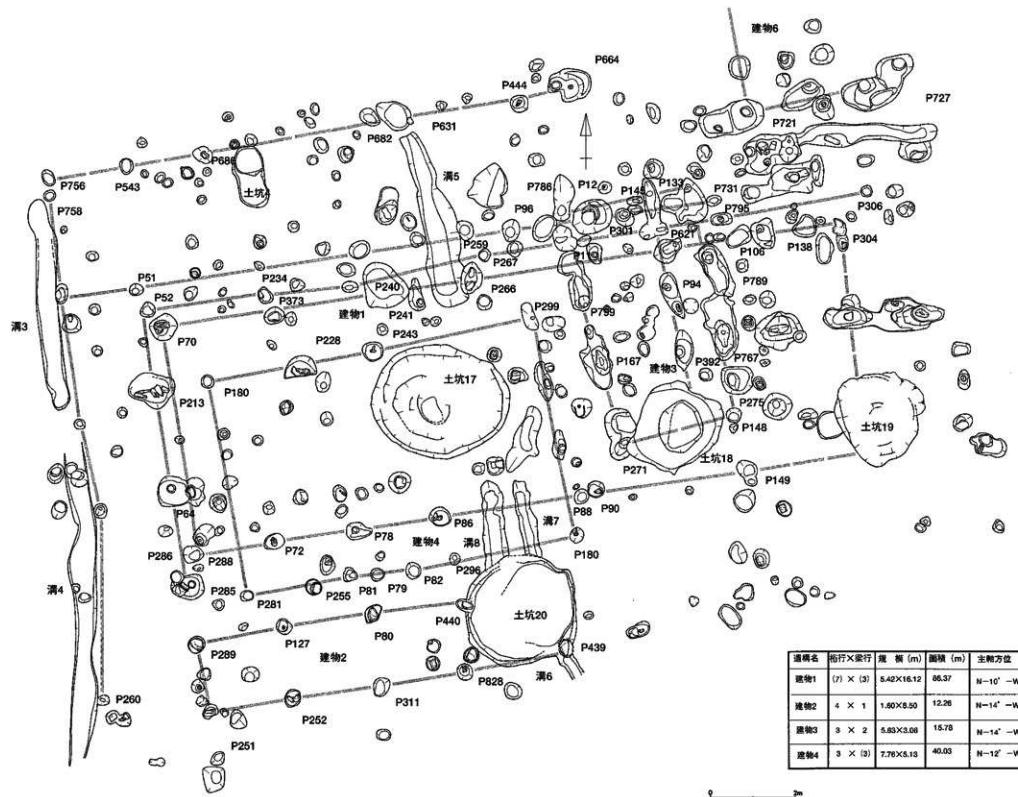


図50 建物1~4実測図 (S=1/80)

遺構名	面積×奥行	面積 (m ²)	面積 (m ²)	主軸方位
建物1	(7) × (3)	5.42×16.12	86.37	N-10° -W
建物2	4 × 1	1.80×8.50	12.28	N=14° -W
建物3	3 × 2	5.83×3.08	15.78	N=14° -W
建物4	3 × (3)	7.76×5.18	40.03	N=12° -W

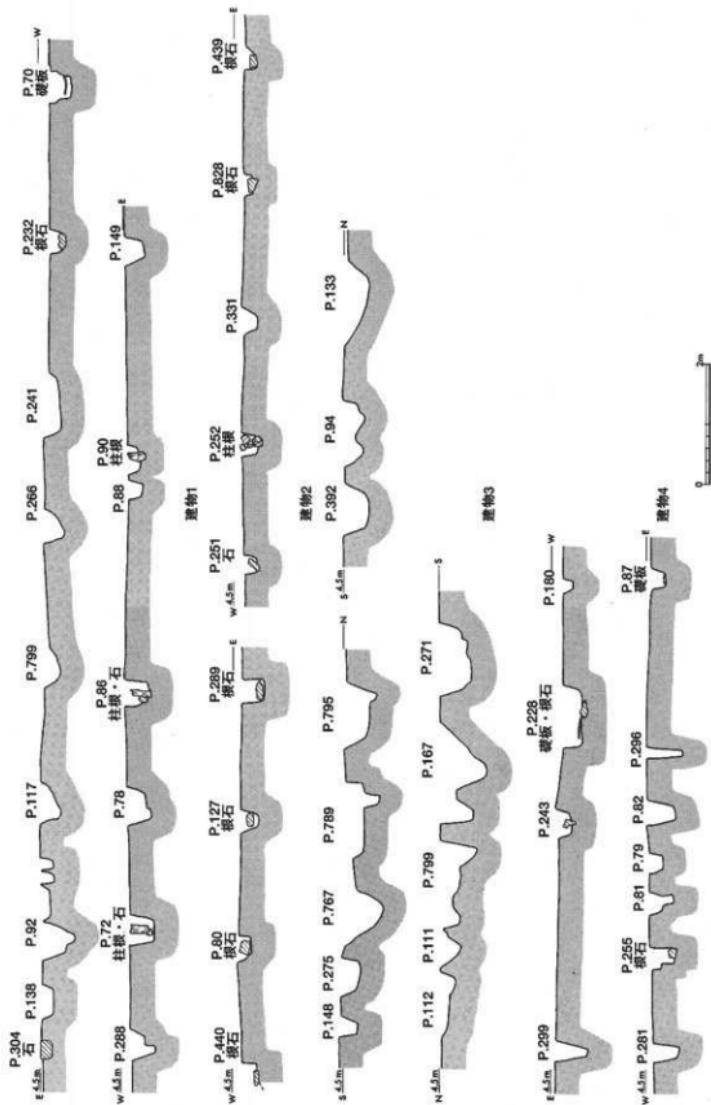


图 51 B1区建物1~4断面図 (1) (S=1/80)

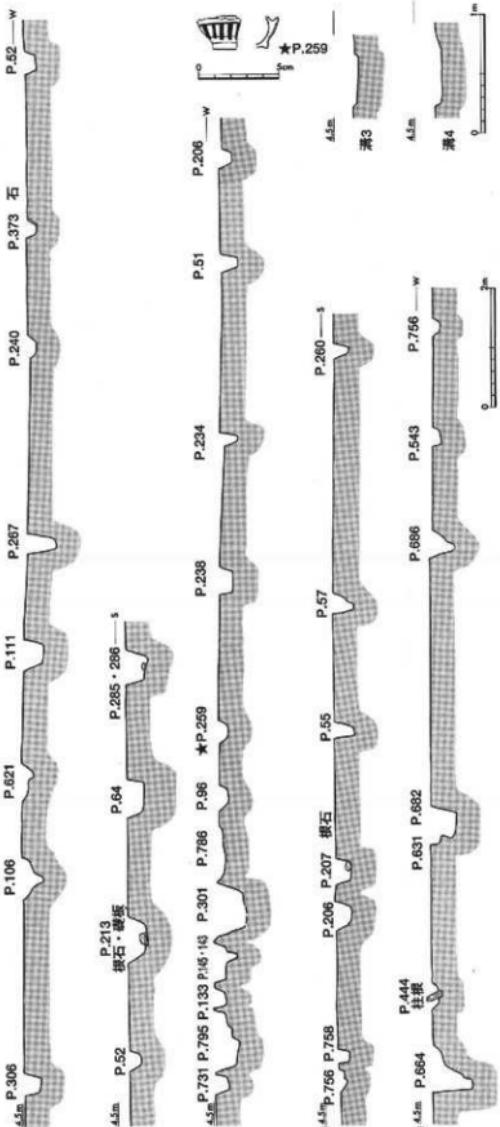


図52 B1区建物1~4断面図(2)
(建物はS=1/80、溝はS=1/40、遺物はS=1/3)

この建物の西側梁行き及び北側桁行きに平行する柱穴列が見られる。これに対応する東・南の柱筋が確認できていないため明確に判断できないが、西側梁行きの柱穴と切り合い関係にあることから、縁ないし庇などの建物1の付属施設ではなく、建物1の建て替えに伴うものではないかと考えられる。柱穴掘り形埋土中からは土師器小破片が微量出土している。

このほかにも、幾つかの柱穴列が確認できた。溝3・4の東に南北に通るものと、この柱筋からL字に東に延びるものである。これらは建物1に伴う溝と堀に相当するものではないかと考えられる。溝3と溝4は同一線上に位置するもので、現状では間が70cmほど途切れている。幅は48~65cm、深さ4~5cmの非常に浅い溝である。

柱穴列A 溝の東に位置し柱通りは整っていない。南北に長さ12.25mの規模を有する。柱穴は径26~50cm、深さ12~35cm。柱穴掘り形埋土中からはP.55、205で土師器小破片が1~2点出土している。

柱穴列B 最も北側に位置し東西方向に延びる。長さ12.42m。柱穴の形状は径23~52cm程度、深さは11~67cm。埋土からは土師器小破片が少量出土している。

柱穴列C 東西の長さ13.82m。柱穴は径20~56cm、深さは18~55cm。埋土からは土師器小

破片が微量出土しているが、P 301では漆器碗の破片も見られた。またP 259からは青白磁の合子が出土している。釉は内面乳白色、外面は青緑色を呈する。下半部は釉がかからず露胎である。12世紀代。

建物2(図50・51) 建物1の南に位置する。4間×1間の規模を有する建物である。棟方向はN-14°-Wにとる。桁行き間8.50m、梁行き間1.60m、床面積12.23m²。柱間寸法は202cm~252cm。柱穴の形状はほぼ円形で径40cm前後、深さは14~37cm。P 331を除く全ての柱穴から石が出土した。このうち251は突き立った状態で出土し、252は5個の石が積み重なって出土しており根石に当たらない。そのほかの柱穴内の根石は24~38cm角、厚さ8~14cmの大きさのものであった。土坑20及び溝6~8とは切り合い関係にあり、溝6(溝7・8)→建物4→土坑20の順番に造られたものと思われる(図81)。

柱穴掘り形の埋土中ではP 440、80、127、251、828から土師器小破片が微量出土している。

建物3(図50・51)

建物4の東に位置しており、建物2とは重複する。柱穴は複雑に切り合っていたことと、調査の不手際もあり、建物の柱穴を明確に抽出できていない。柱通りを手がかりに建物の規模を3間×2間と復元した。西側の桁行き間5.63m、北側の梁行き間3.06m、床面積15.78m²。柱穴の形状、深さ、柱間寸法とも一定でない。柱穴掘り形の埋土中からはP 789、795、392、94、112、799で土師器の小破片が出土している。またP 789から青磁の小破片が出土している。

建物4(図50・51) 建物2の北側に位置し、

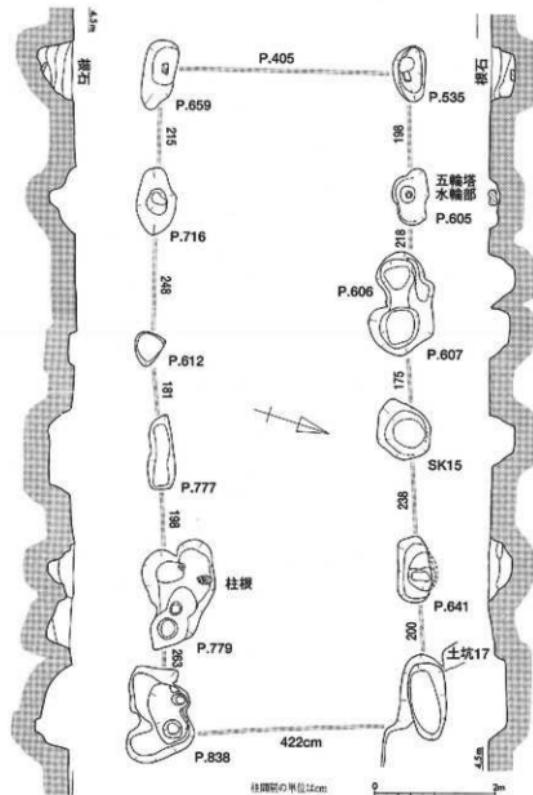


図53 B1区建物5実測図 (S=1/80)

遺構名	桁行×梁行	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位
建物5	5×1	10.50×4.22	44.24	N-15°-W

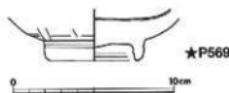
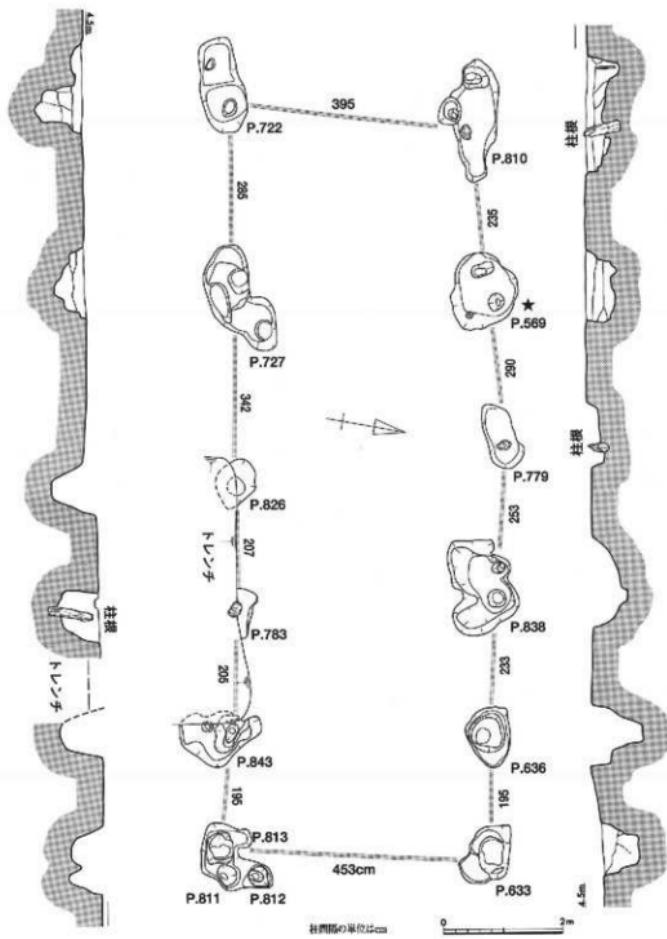


図54 B1区建物6・出土遺物実測図（遺構はS=1/80、遺物はS=1/3）

建物1とは重複する。3間×2間の規模を有する。棟方向はN- 8° -Wにとる。北側の桁行き間7.76m、西側の梁行き間5.13m、床面積40.34m²。柱穴の形状は、円形と楕円形のものが見られる。円形のものは径28~46cm、楕円形のものは短径28~46cm、長径65~75cmであった。深さは16~49cm。P228には礎板2枚と根石が置かれていた。板と石は完全に重なり合っておらず、少しづれた状態で検出された。礎板は29×11~16cmで厚さ1.6cm。P87には礎板1枚が二つに割れた状態で出土した。礎板は15.0×16.5cm角、厚さ1.5cm。P243は板石が突き立った状態で出土しているが、根石ではなく、柱抜き取り後に投棄されたものであろう。柱穴内掘り形埋土中ではP180、255、82で土師器小破片が微量出土している。

建物5(図53) 建物1から4の北、調査区中央の東よりに位置している。5間×1間の規模を有する建物である。棟方向をN-15°-Wにとる。桁行き間10.50m、梁行き間4.22m、床面積44.24m²。柱穴の形状は長楕円形を呈するものが多く見られ、規模も他の建物に較べて大きい点が注目される。柱穴は長径0.95~1.45m、短径43~65cm、深さ20~63cm。北側の桁行きの方が浅いものが見られる。この建物で今一つ注目されるのは、P605の柱穴の根石に五輪塔の水輪部が転用されていることである。水輪は天地正位で置かれていた。石材は凝灰質砂岩で島根県八束郡宍道町来待で産出する来待石と思われる。小型品で整った作りではない。上面径19.5cm、下面径20.0cm、高さ13.2cm。最大径は胴部ほどにあり27.0cm。上面には凹みがある。また、P653では礎板が出土している。柱穴掘り形埋土中からは土師器の小破片が少量出土している。

建物6(図54) 建物5と重複する形で位置している。建物5と同じ5間×1間の規模を有する建物である。棟方向はN-8°-Wにとる。桁行き間12.30m、梁行き間4.53m、床面積51.41m²。柱穴は建物5と同様に長楕

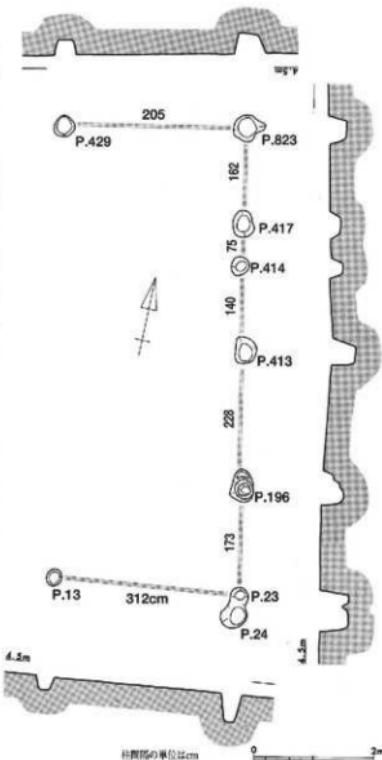


図55 B1区建物7実測図 (S=1/80)

円形のものが見られる。切り合つていない柱穴で規模を計測する

遺構名	桁行×梁行	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位
建物6	5×1	12.30×4.53	51.41	N-8°-W
遺構名	桁行×梁行	規模(m)	面積(m ²)	主軸方位
建物7	4×(1)	7.78×3.12	(24.27)	N-9°-W

と円形のものは径75~98cm、楕円形のものは長径117~118cm、短径48~80cm前後になる。深さは28~80cm。桁行きの柱間寸法は195~342cmで一定ではない。柱根はP 810、779、783で遺存していた。太さは16~19cm角。なかでも最も残りの良い783の柱根は長さが78cm。根元近くには棧穴が残されていた。6.5×7.5cm角の穴から7.5×8.5cmの穴に貫通している。柱穴掘り形埋土中からはP 826、813、569、636で10片未満の土師器細片が出土している他、826では青磁碗の底部が出土している。外面に線描き蓮弁文をもつ。釉は高台内面途中までかかり、外底は露胎である。内面見込みにはスタンプが施される。15世紀前半を中心とする時期と思われる。また633、569の埋土中には弥生土器も混入していた。

建物7(図55) 調査区北西部に位置する。4間×1間以上の規模を有する建物である。棟方向をN-9°-Wにとる。桁行き間7.78m、梁行き間3.12m、床面積24.27m²以上。柱穴は径25~53cm、深さ18~52cmとバラつきがある。柱間寸法も一様ではない。柱穴内には柱根、礎板は見られなかった。柱穴の埋土掘り形からは土師器小破片が微量だが出土している。

柱穴列(図56)

柱穴列1は土坑10のすぐ東側に位置している。南北方向に3間、6.72mの規模を有する。柱間寸法は2.20~2.27m。P 513には柱根が遺存していた。この柱穴列の東には柱穴群が拡がっているが、対応する柱筋を見出せなかった。

柱穴掘り形の埋土からはP 566で土師器の小破片が出土している。

柱穴列2は調査区南西隅、トレンチの南に位置している。東西方向に4間、3.87mの規模を有する。柱間寸法は88~107cm。柱穴の規模から考えて塀などを構成するものかもしれない。遺物は1点も出土していない。

柱穴出土遺物(図57)

建物を復元できなかった以外の柱穴掘り形の埋土中からも遺物は出土している。遺物は土師器小破片が中心だが、中国製磁器、国産陶器もわずかに見られた。図57の1は土師器台付き皿。脚端部はしっかりと面をもつ。2、3は土師器皿。3は堅敏な作りである。法量は3の方が大型。2が口径7.2cm、器高1.6cm、底径4.0cm。3が口径7.9cm、器高2.0cm、底径4.0cm。4、5は国産の焼き締め陶器の底部。4は灰~灰黒色を呈している。5は常滑系か。外面には指で押された跡がしっかりと残る。6は備前焼の擂り鉢。内面には放射クシ書き条線を7条以上施

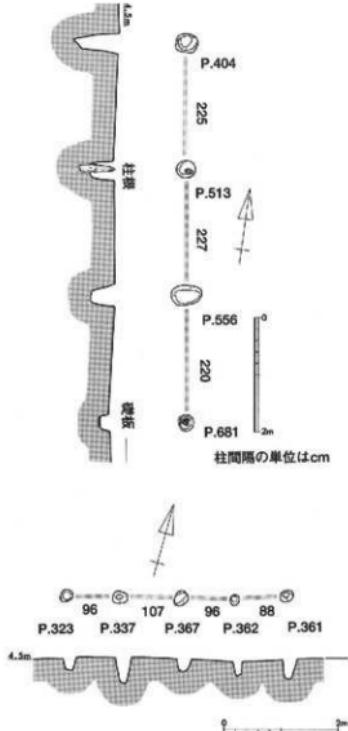


図56 B1区柱穴列1・2実測図 (S=1/40)

す。備前IV期、15世紀に比定される。

7~10は包含層出土の土師器の坏。色調は8が白色である他は肌色を呈する。7は体部上位から口縁端部までを欠いている。8は口縁部は外面が端部から1cm下辺りから玉縁状に肥厚し、内面は薄く引き出している。内外面とも回転ナデで仕上げる丁寧な作りである。9は体部が逆ハ字に外方に開くもので、深さがある。10は逆ハ字に開く体部をもつ。体部中ほどが凹み後線をもつ。

溝(図58)

溝はいずれも南北方向に延びるものである。溝3からは15世紀前半の青磁碗の破片が1点出土している。以下、計測表を掲げる。単位はcmである。

番号	長さ	幅	深さ	番号	長さ	幅	深さ
1	483	57~76	11~12	6	126	33	16
2	280	28~30	9	7	185	40	31
3	495	48	4	8	196	48~54	16
4	764	48~65	5	9	415	42~62	4.5
5	418	50~82	35	10	286	(100)	8

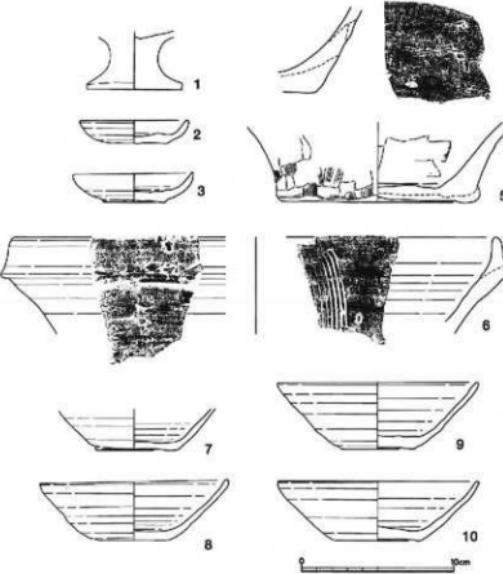


図57 B1区柱穴・包含層出土遺物実測図 (S=1/3)

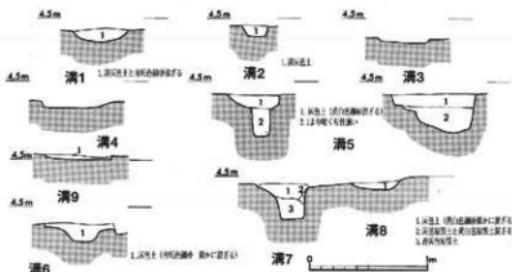


図58 B1区溝跡実測図 (S=1/40)

4. 土坑

土坑1（図59・60）

調査区南西隅に位置する浅い土坑である。調査区西壁の断面にも確認されることから、更に西側の調査区外へも拡がっているものと思われる。この土坑は、その他の土坑とは基本的に異なる性格をもつものと思われる。その理由は①完形品に近い土器が一括して投棄されていること②平面形に対し深さがない、点である。遺構は土器が投棄される前後の段階に分けられるが、それは土層堆積

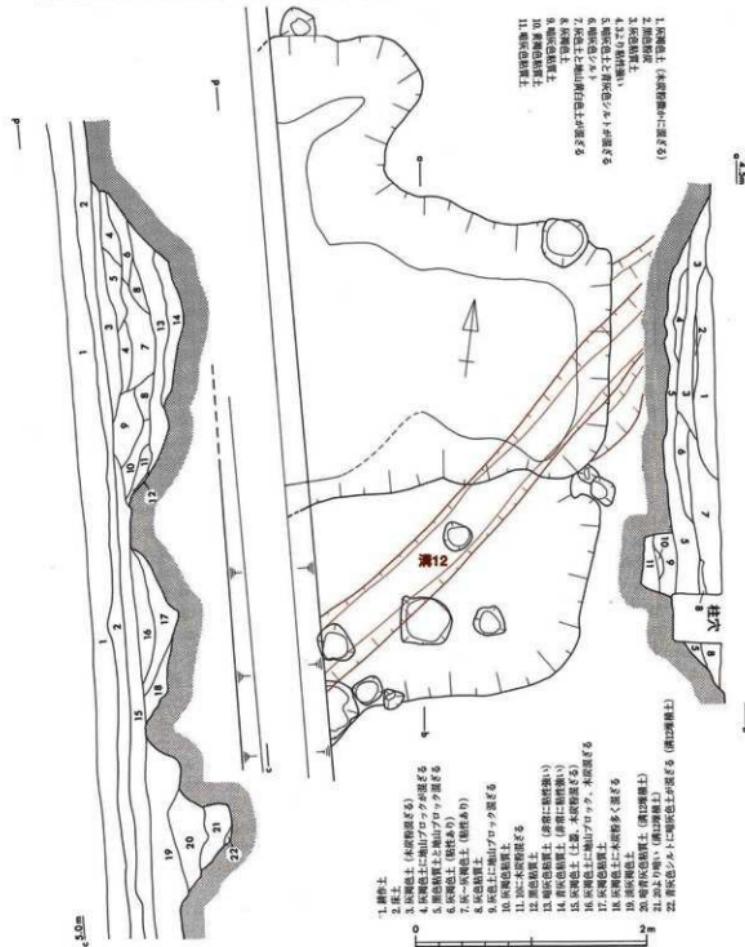


図59 B1区土坑1実測図 (S=1/40)

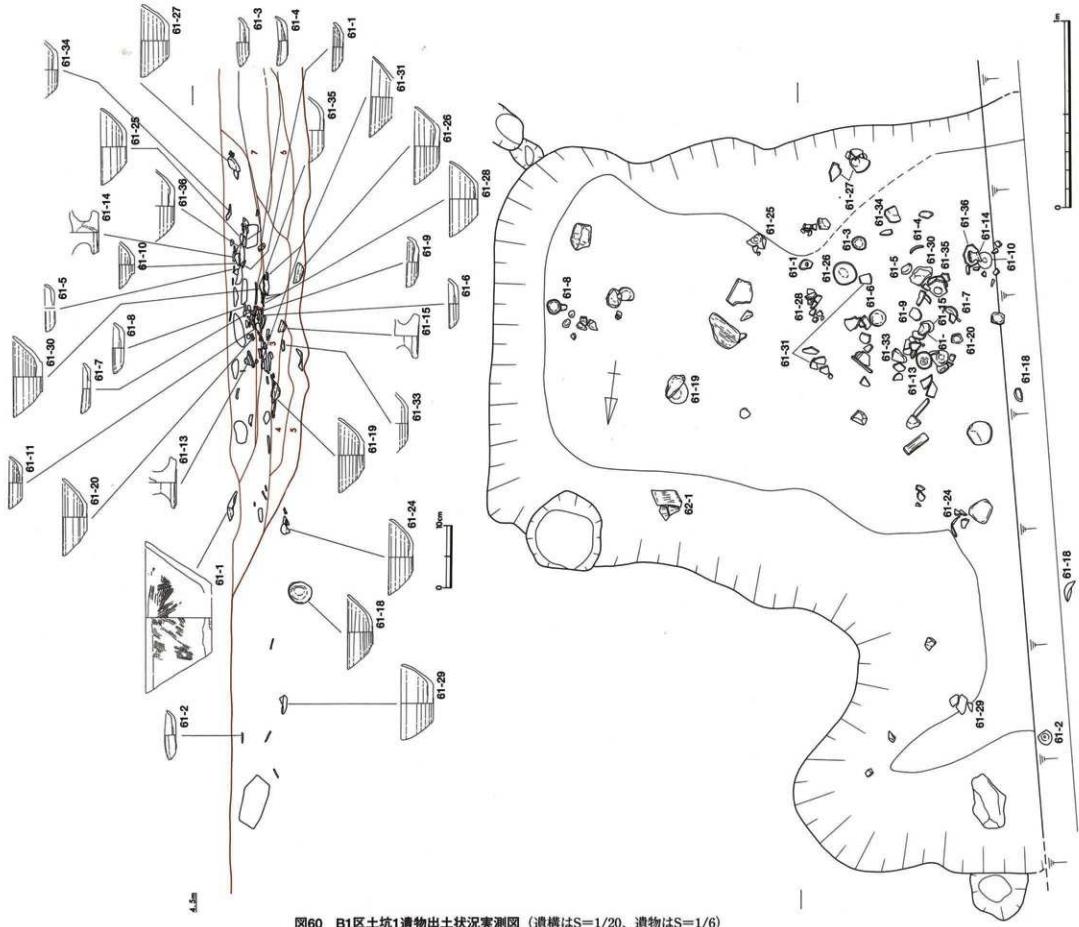


図60 B1区土坑1遺物出土状況実測図（遺構はS=1/20、遺物はS=1/6）

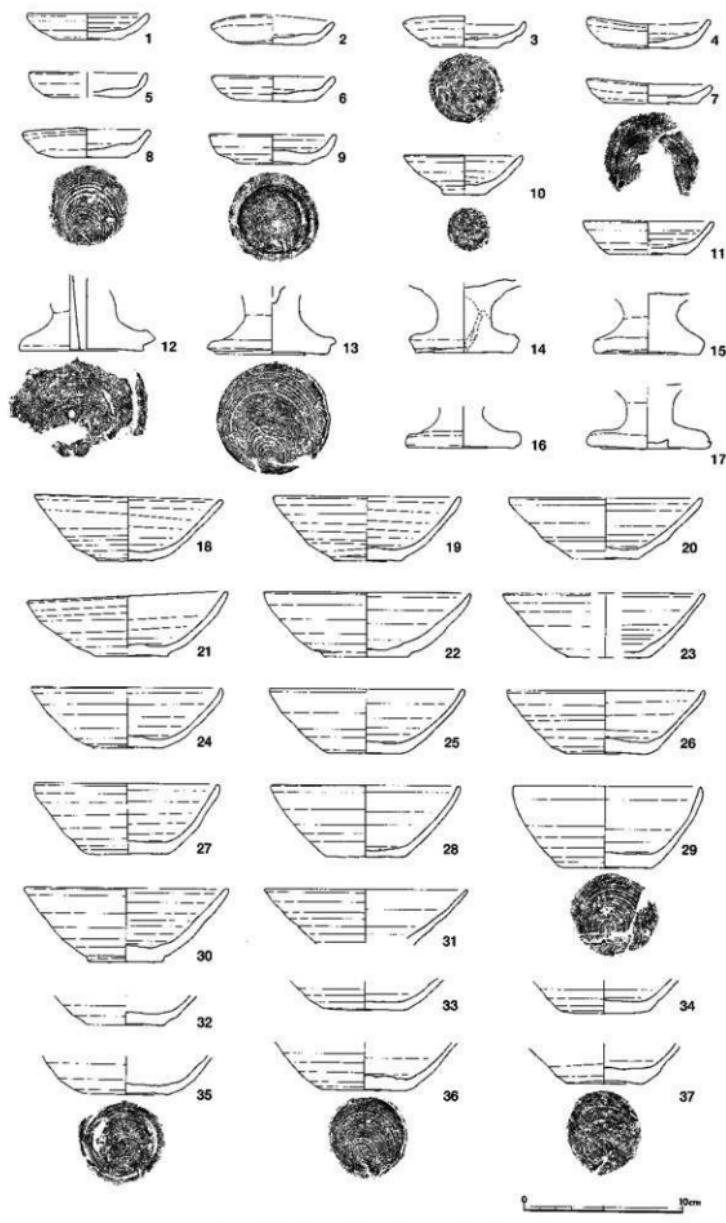


図61 B1区土坑1出土遺物実測図(1) (S=1/3)

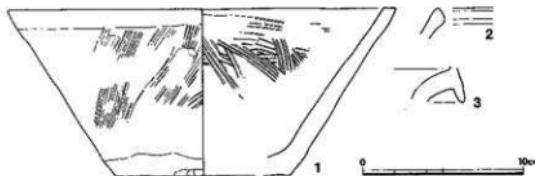


図62 B1区土坑1出土遺物実測図 (2) 1、2は土師器、3は常滑系陶器—
(S=1/3)

状況でも確認できる。土器が投棄される前段階の規模は東西5.8m、南北4.32m、深さ42~70cm。底面は浅い皿状を呈する。その後、厚さ10~20cmの極めて均質なシルト層が堆積する。安定した環境で水が湛えられていたのではなかろうか。土器が投棄される段階では、土坑の南側は地山ブロック混じりの土(図60の7層土)で埋められており、それを掘り返していることが図60の断面図で分かる。

この整地土にも土師器細片が混ざっていた。この段階の規模は東西5.8m、南北2.47m。検出面からの深さは35cmで、底面の標高は3.94mである。断面は浅いU字形を呈する。シルト層の上に粘質土を挟み、粉炭混じりの土が見られる。この段階で土器が投棄されているようである。

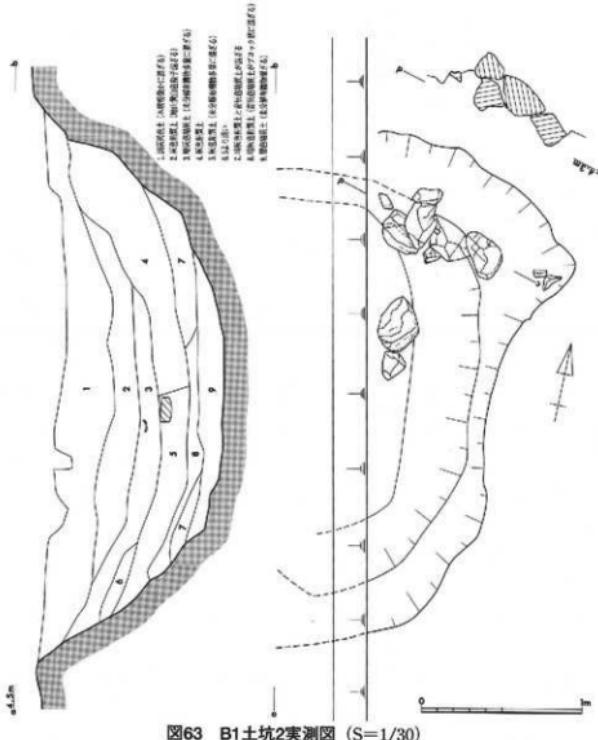
また、図59では、この土坑1の南側にも皿状の土坑が存在したことが確認される。この土坑は平面的には確認できなかったことから、調査区側溝内より東側には括がっていなかったのかもしれない。断面は浅いU字形をなし、南北の幅1.54m、深さ36cm、底面の標高は3.97m。

図61は総て土師器である。1から11は皿である。1から4は体部は逆八字に外方に立ち上がるもので、体部と底部の境が強いナデにより段をなすものである。8、9も同様の形態だが、やや焼きが悪い。5~7は逆八字に開くが段をもたないものである。10、11は類例が無いプロポーションをしている。径2.5cmの小さな底部から逆八字に大きく体部が開く「猪口」のような形である。11は最も大形のもので、高さが2.1cmと高い。12から17は台付き皿。脚部は径6.1~7.7cm。12のみ穿孔がある。12は柱状部が突帯状に肥厚している。14、15は皿の一部まで残っている。15は脚端部を円く仕上げている。16、17も細くしまった柱状部から脚端部に向けて大きく開く。18から37は坏。いずれも回転ナデで仕上げた丁寧な作りのものである。17から19は底径が3.8~4.4cmと小さく、体部は円みをもって立ち上がる。色調は17が肌色、18はくすんだ肌色、19は白色である。21から26は口径12.0~13.0cm、器高4.0cm前後の大きさのもの。26は体部の両側から力を加えて、平面が椭円形になるように歪めている。口縁端部は21、24は内面を薄く引き出しシャープに仕上げる。22は端部を上に摘みあげるように、23は円く仕上げている。25はやや肥厚し外面に面をもっている。27から30は器高4.5~5.1cmのもの。なかで29は底面が椭円形を呈する粗い作りである。口縁端部の処理は27は、内面を薄く引き出しシャープに仕上げる。28、29は内外面を薄く引き出し断面三角形気味にする。30は体部と底部の境にしっかりと段が付き、底部の器肉が厚い。体部は逆八字に大きく開き、口縁端部は面をもつ。31は体部の破片。32から37は底部の破片。37は底面が椭円形を呈するもので、29と酷似している。

図62の1、2は土師器と同じ胎土の鉢。1は口縁端部が角張っており上面には面をもつ。内外面とも粗いハケ調整。復元口径24.2cm、器高10.6cm、底径10.8cm。2は口縁部が玉縁状に肥厚する。3は常滑系陶器の壺の口縁部。口縁部は上下に拡張し、内傾して立ち上がる。

土坑2（図63）

調査区内に一部がかかるのみである。上場線が北側に拡がっているのは、後世の崩落のためと思われる。南北3.45m、検出面からの深さ1.1mで底面の標高は3.2m。埋土の最下層には未分解有機物が多量に混ざっていた。その上層にも未分解有機物の混ざった粘質土が堆積する。また、2層直上では、土坑北側から中央部に向けて人頭大の石が数個投棄されていた。遺物は図64に掲げたように土師器が中心で上～中層に見られた。1は皿。体部は中ほどでくびれ稜をもつ。口径7.4cm、器高2.1cm。底面は歪み径5.5cm×5.0cmの楕円形である。形態、色調とも土坑1の29、37と似ている。2、3は台付き皿。柱状の高台部をもち、3は穿孔されている。2は底径5.3cm、3は底径9.6cm。4、5は底部から体部にかけての破片。4は皿、5は壺か。5の内面にはススが付着しており灯明皿として使用された可能性が考えられる。6、7は壺。いずれも器肉が厚い。7は底部から逆八字に立上った後、内傾して端部に至る。端部はすうっと引きのばしている。8は国産陶器の頸部。



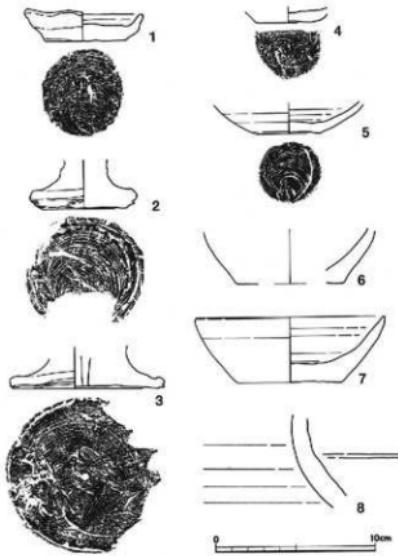


図64 B1区土坑2出土遺物実測図 (S=1/3)

土坑3(図65)

長楕円形の浅い皿状の土坑が二つ連結したような形態である。この二つの落ち込みは、それぞれ切り合ひ関係は認識できなかったので一つの土坑とした。埋土は2層で上層に木炭粉が多く混ざっている点が注目される。遺物もこの第1層から出土している。1は国産焼き締め陶器の口縁から体部にかけての破片。2は土師器の壺。色調は淡い肌色を呈する。円みのある体部をもつ丁寧な作りである。口径13.2cm、器高4.1cm、底径6.0cm。

土坑4(図66)

平面はいびつな円形。壁は垂直に掘り込まれている。南北1.27m、東西1.32m、深さ63cmを測る。底面は中央からやや西側で86×55cm、深さ10cm程度、凹地状を呈する。底面の標高は3.62m。土坑の中心からやや南東側で土師器壺がほぼ完形で出土している。壺は逆ハ字を開いた後、傾きを変えて端部に至る。端部はすうっと引き延ばしている。口径12.9cm、器高3.0cm、底径6.5cm。

土坑5(図67)

調査区内に一部がかかるのみである。南北2.31m、検出面からの深さは92cm。底面の標高は3.55m。

土坑6(図68) 北側の一部をトレーニングで壊している。平面はほぼ円形。東西3.3m、南北3.1m、深さ1.0m。底面の標高は3.25m。図示した遺物は、1の土師器の台付き皿と2の備前焼拂り鉢。2は内面には放射クシ描き条線を7条施す。外面には指オサエの痕跡がはっきりと残る。なお図を載せていないが、他に漆塗りの高台付きの椀が出土している。高台外面から底部を除く外面と内面全体に赤色漆を塗布している。

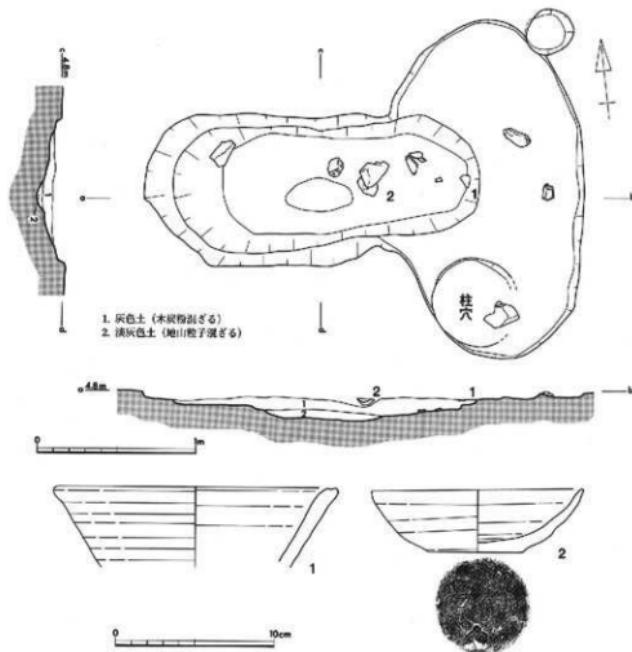


図65 B1区土坑3・遺物実測図（遺構はS=1/30、遺物はS=1/3）

土坑7（図69）

平面はほぼ円形。径1.17m、深さ1.2m。底面の標高は3.02m。

土坑8（図70）

一部が調査区外となるため全体の規模は不明である。東西4.37m、南北3.11m、深さ95cm。底面の標高は3.44m。埋土は2層以下は基本的に自然堆積層と考えられる。未分解有機物混じりの粘質土が主体である。遺物は第1層を中心出土している。1から3は皿。色調は1が淡灰色、2・3は肌色である。1は体部が円みをもつもので、2・3は底部から体部の立ち上りを強いナデによって稜を付けたものである。復元口径は7.5~8.1cm。器高1.5~1.9cm。底径3.8~4.6cm。4から6は壊の底部から体部にかけてのもの。5は堅緻な焼成である。7は台付き皿の皿部。口径9.0cm。8は土師器の鉢の口縁部。9は国産焼き締め陶器の口縁部。

土坑9（図71）

平面はほぼ円形。南北1.85m、東西1.76m、深さ1.08m。底面の標高は3.2m。西側の壁はオーヴァーハンプするが、崩落により旧の形状を留めていないのであろう。他の土坑に較べて未分解有機物があまり見られなかった。図示したのは皿1点。全体に歪つな作りで、底面は梢円形をしている。体部上位に稜をもつ。口径7.5cm、器高2.1cm。底面は梢円形を呈し、底径3.4×4.4cm。

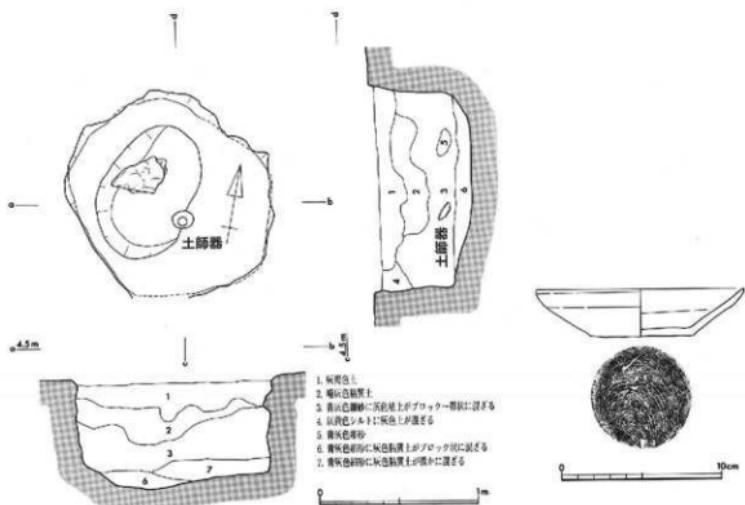


図66 B1区土坑4・遺物実測図（追構はS=1/30、追物はS=1/3）

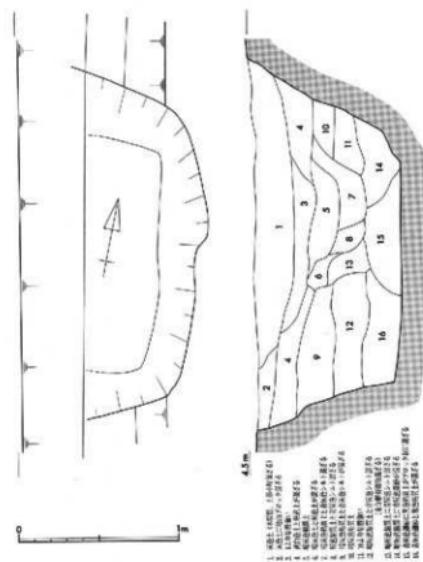
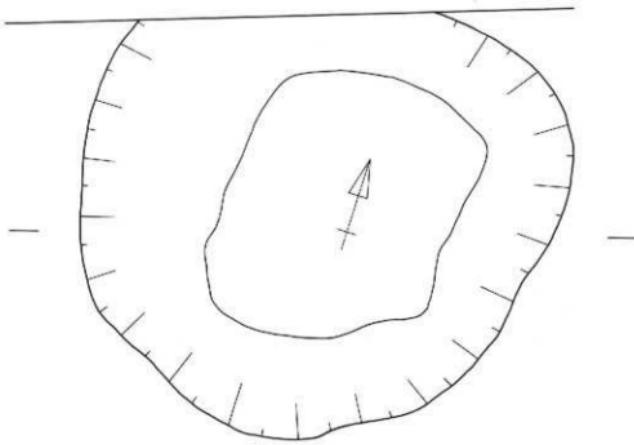
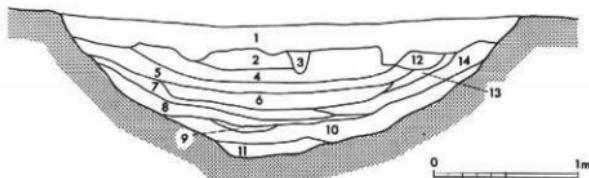


図67 B1区土坑5実測図（S=1/30）



4.5m



- | | | |
|-----------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 黄色土（本成層混ざる） | 6. 緑褐色粘質土に未分解有機物混ざる | 11. 緑褐色粘質土に青灰色シルト混ざる |
| 2. 黄色土（より堅性質） | 7. 緑褐色粘質土に青灰色シルト混ざる | 12. 青灰色粘質土に本成層混ざる |
| 3. 上にマンダム軟泥混ざる | 8. 緑褐色粘質土に未分解有機物混ざる | 13. 墓灰褐色粘質土に本成層混ざる |
| 4. 墓灰褐色土 | 9. 緑褐色粘質土に青灰色シルト混ざる | 14. 从色粘質土に青灰色シルト混ざる |
| 5. 墓灰褐色粘質土（未分解有機物混ざる） | 10. 緑褐色粘質土に青灰色シルト混ざる | |

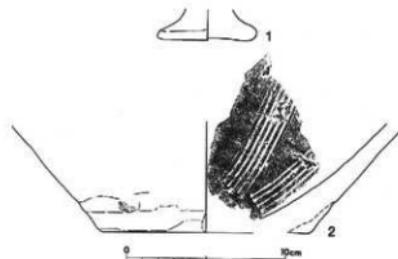
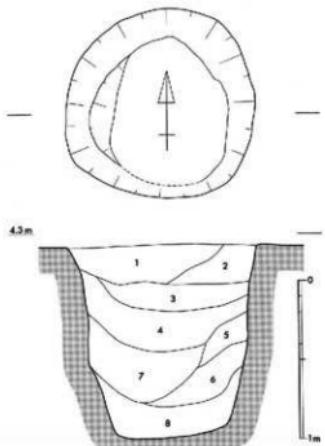


図68 B1区土坑6・遺物実測図（遺構はS=1/40、遺物はS=1/3）



- 1. 黄褐色土に青灰土が混ざる
- 2. 黄褐色土
- 3. 2より若干薄い
- 4. 明灰色粘質土
- 5. 6に散在し細砂が混ざる
- 6. 灰灰色粘質土に青灰色礫状がレンズ状に混ざる
- 7. 灰灰色粘質土
- 8. 青灰色礫状に暗灰色粘質土が混ざる

図69 B1区土坑7実測図 ($S=1/30$)



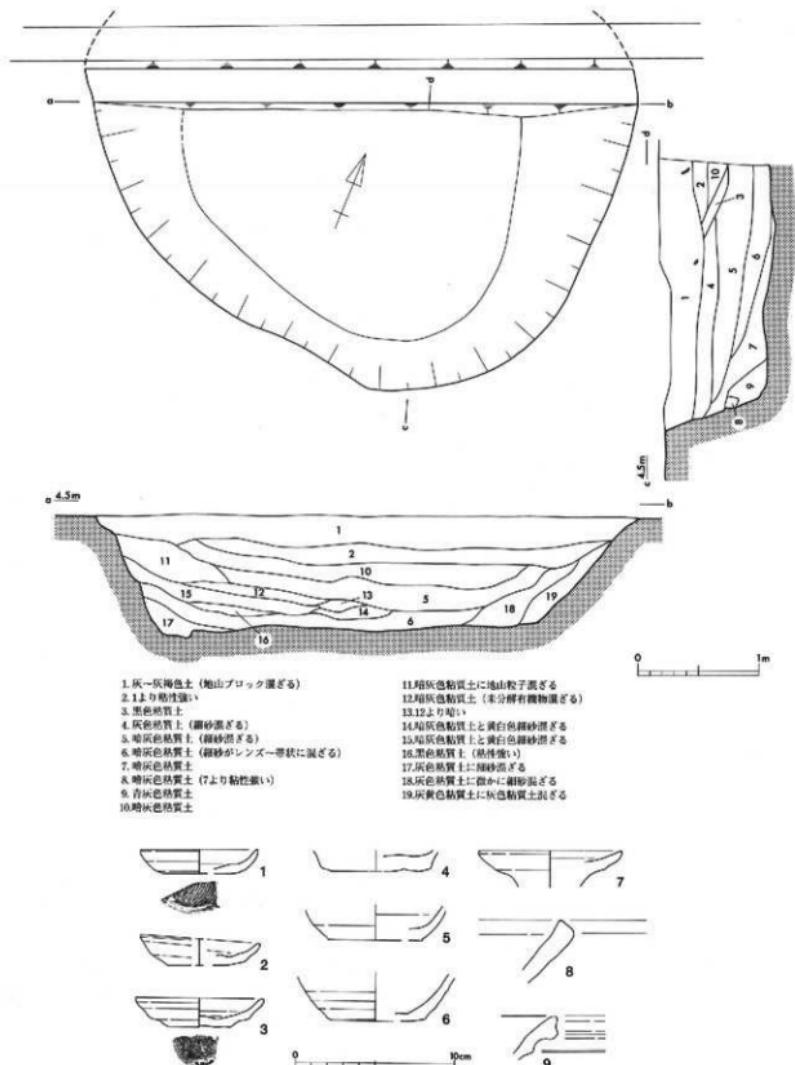


図70 B区土坑8・遺物実測図
(遺構はS=1/40、遺物はS=1/3)

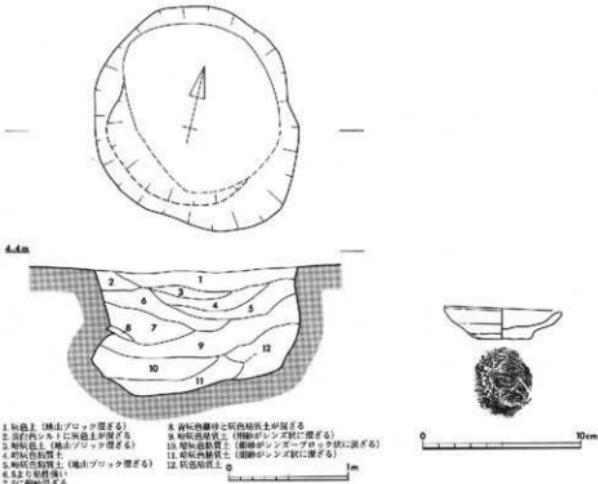


図71 B1区土坑9・遺物実測図
(遺構はS=1/40、遺物はS=1/3)

土坑10（図72・図73）

調査区中最も大形の土坑である。西側は後世の搅乱で一部破壊されている。東西3.89m、南北5.45m、深さ1.23m。底面の標高は3.11m。底面は涌水等により充分な観察ができなかったが、中央部が周囲より一段低く凹地になるようである。また17層の堆積状況から掘り返しが行われたことが考えられる。検出面からマイナス50cmのレヴェルで多量の未分解有機物が出土している。遺物は土師器が中心だが木製品（板材、廃材）も若干出土している。

1から2は皿。1は底面外縁から体部を強くナデで段を付けている。体部は円みをもつ。2も底部外縁から体部にかけて強くナデ、段を付けている。体部の立ち上りは1に較べて直線的である。3は口径7.0cm、器高1.5cm、底径4.2cm。2は口径8.1cm、器高1.6cm、底径5.0cm。3から5は台付き皿。3は皿部で内面にはススが付着する。4、5は脚部。いずれも底面から皿部の方向に穿孔されている。底面側はナデで孔を塞ごうしており、径が小さくなっている。底径は4が7.6cm、5が6.8cm。6から10は壺。6、7、9は淡い灰白色を呈する。7は体部は円みをもって立ち上がる。口径10.3cm、器高4.5cm、底径4.6cm。8は濃橙色。体部は逆八字に開く。11は土師質の鉢。内面にクシ描きの条線施す。調整は内外面ともハケ。12は青磁無文の碗。13は弥生土器の鼓型器台。

土坑11（図74）

北側は一部調査区外となる（図の点線部）。平面は円形。東西2.05m、南北2.11m、深さ1.24m。底面の標高は3.26m。埋土は細分しているが、基本的に上層が地山ブロック混じり、中層が未分解有機物混じりの灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。遺物は上層から細片が微量出土している。

土坑12（図74）

井側の痕跡を残すことから井戸と考えられる。井側部分は長径92cm、短径75cmの楕円形。深さ

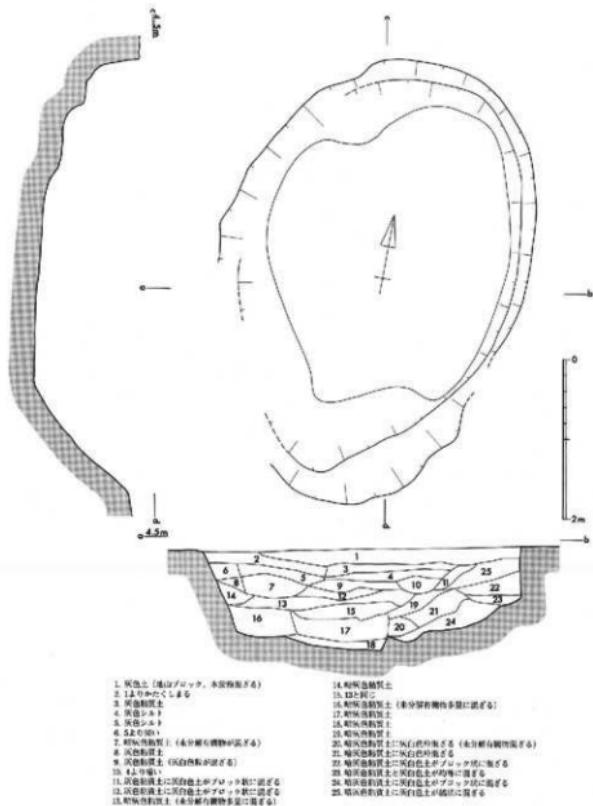


図72 B1区土坑10実測図 (S=1/60)

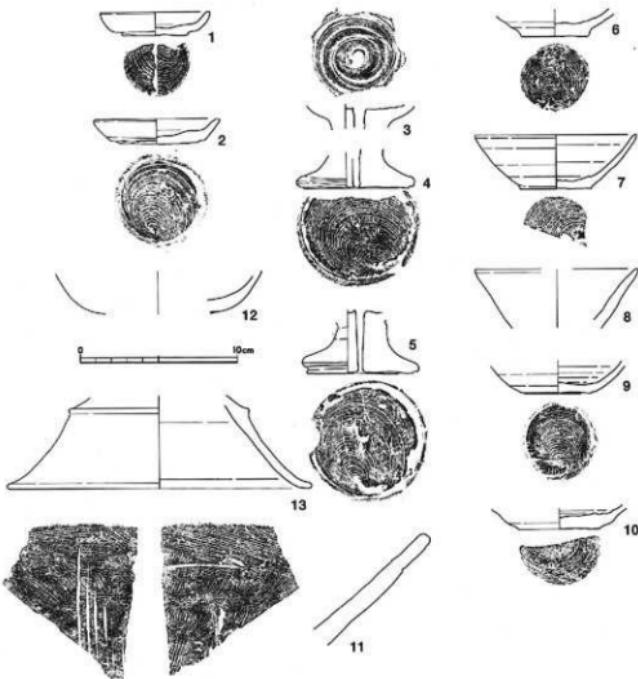


図73 B1区土坑10出土遺物実測図 (S=1/3)

1.33m。底面の標高は2.97m。井側内の埋土は5層以下が未分解有機物混じりの粘質土である。5層上面には一抱えほどの板石が置かれている。遺物は土師器壊1点が5層の下位で出土している。内面にロクロ成形の痕跡を残さない丁寧な作りである。体部は円みをもって立ち上がる。口径12.2cm、底径6.2cm、器高4.2cm。

土坑13(図74)

平面はほぼ円形。壁の西側(図の右側)がオーヴァーハンプするが旧の形状をとどめていないのであろう。南北1.01m、東西0.99m、深さ86cm。底面の標高は3.53m。

土坑14(図75)

二つの土坑が切り合ったものと思われるが、最終的には同時に埋められているため、それぞれの規模は明確にできない。北側は円形、南側は梢円形の土坑。断面はどちらも上開きのコ字形。規模は北側が径72~73cm、深さ48cm。南側は南北1.17m前後、東西67cm、深さ26cm。

土坑15(図76)

平面は梢円形。南北1.76m、東西1.45m、深さ86cm。底面の標高は3.51m。埋土は6層で最下層は基盤層の崩落などによる自然堆積層と考えられる。この4層の上面に合わせて壁は段線をもつ。

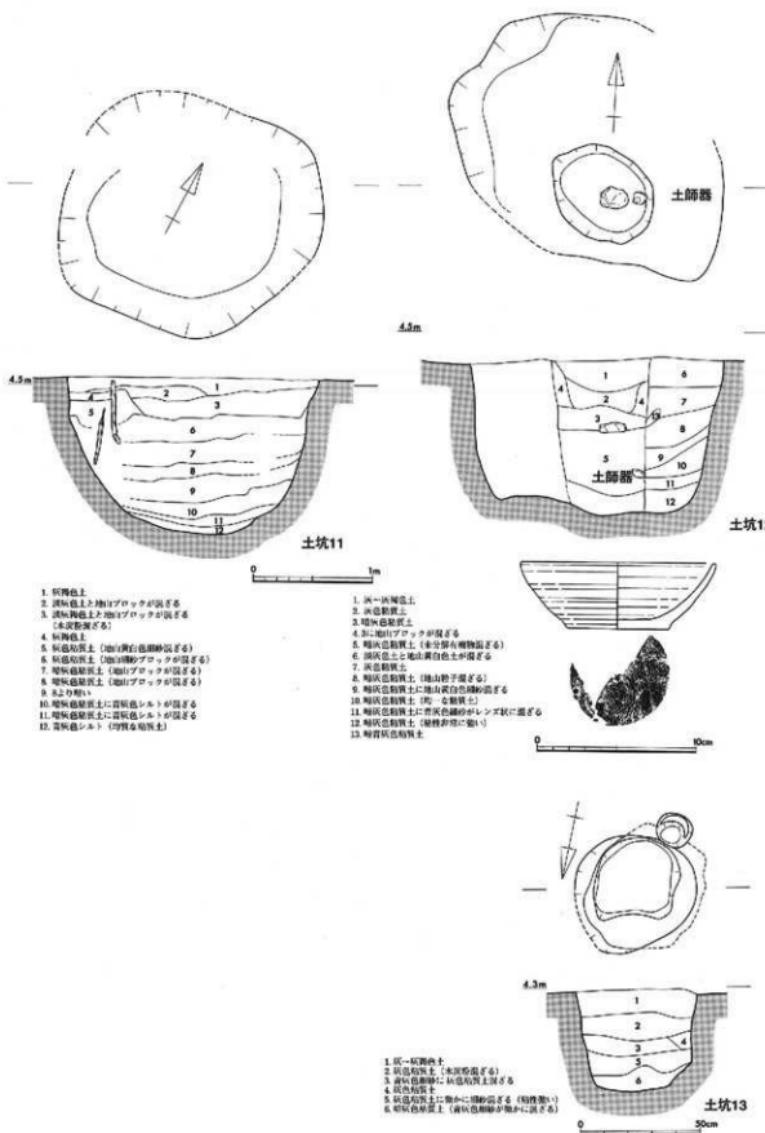
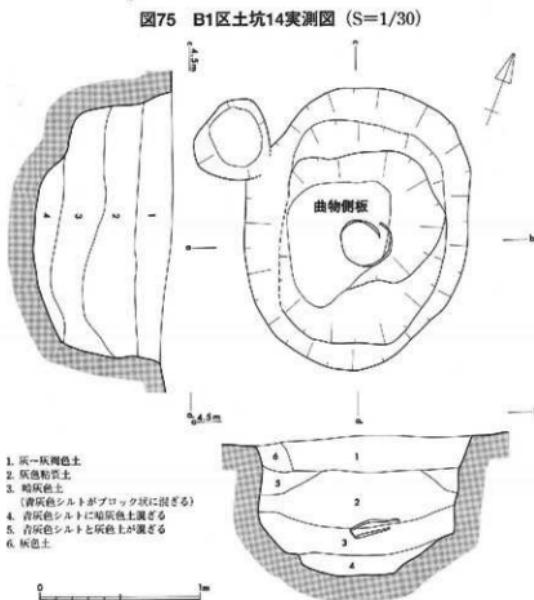
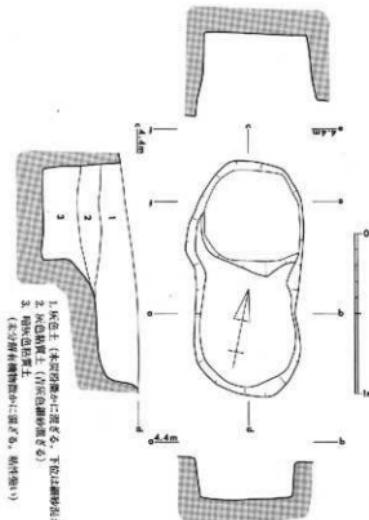


図74 B1区土坑11～13・遺物実測図
(造構はS=1/40、遺物はS=1/3)



土坑16（図77）

土坑としているが掘り形ははっきりせず深さも無い。凹地化した部分を整地した跡かもしれない。規模は東西4.65m、南北3.62m、深さ13cm前後。建物5の柱穴は本土坑より旧いものと思われる。図示したのは常滑系陶器の口縁部。N字状口縁をもつ。14世紀。

土坑17（図78）

平面長楕円形を呈する。東西3.25m、南北2.70m、検出面からの深さ1.16m。底面の標高は3.3m。埋土は第1層には地山ブロックが混ざっており、人为的に埋められたものと考えられる。その他は総て細砂混じりの粘質土層であり、自然堆積層と考えられる。土坑内からは意図的に投棄されたと思われる人頭大の石や杭のほか五輪塔の地輪部（来待石製）も出土している。図示した遺物は、1の土師器の小皿と2の備前焼の壺り鉢がある。1は口径6.8cm、底径3.8cm、器高1.8cm。2は備前焼の壺り鉢。口径29.0cm。内面に5条の放射クシ描き条線を施す。備前IV期、15世紀。

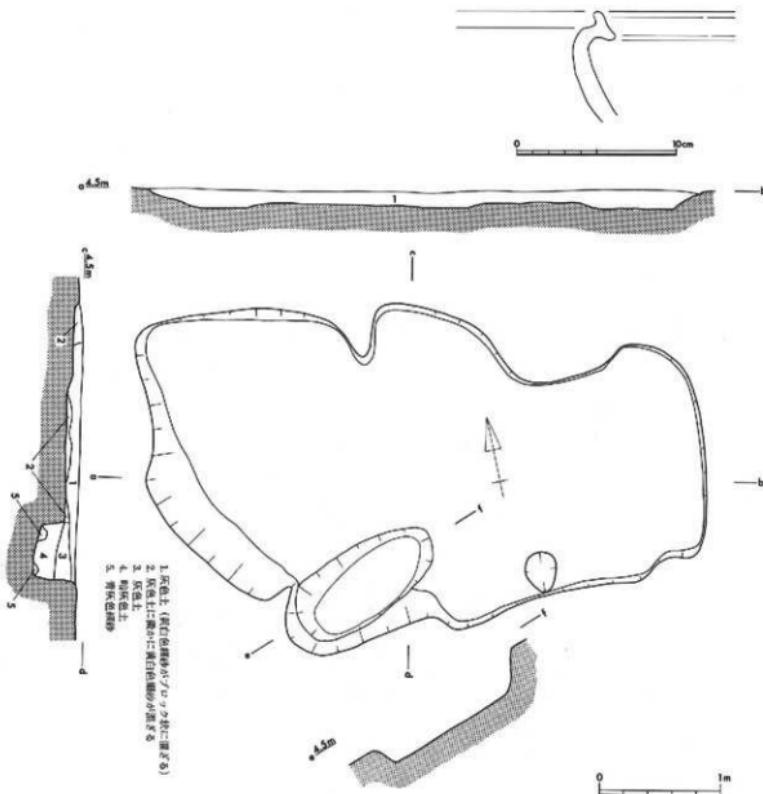


図77 B1区土坑16・遺物実測図（遺構はS=1/40、遺物はS=1/3）

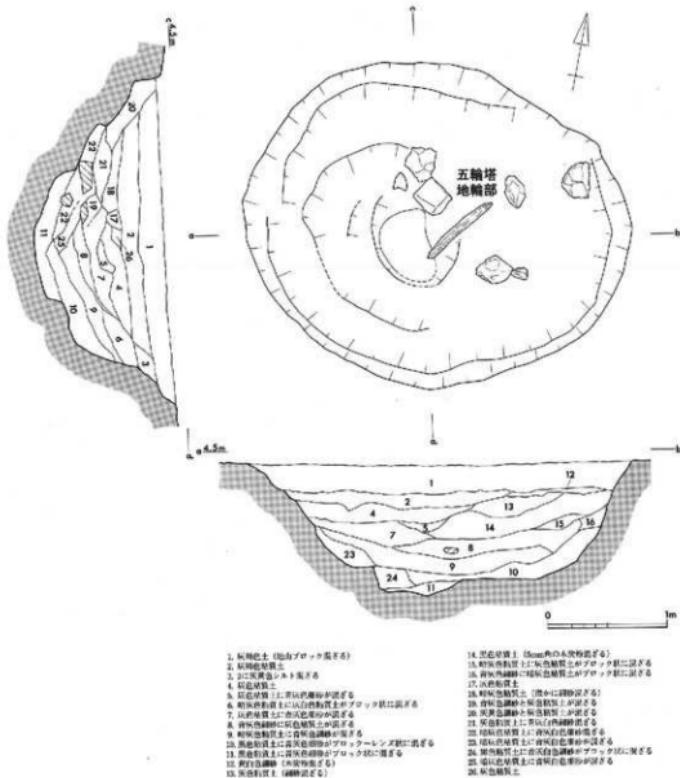


図78 B1区土坑17遺物実測図（遺構はS=1/40、遺物はS=1/3）

土坑18（図79）

平面はいびつになっているが、後世の崩落により旧の形状を留めていないものと思われる。南北1.95m、東西2.15m、深さ88cm。西側の壁はオーヴァーハンプする。底面は土坑のほぼ中央が一段深く凹んでいる。埋土は細分しているが基本的に3層で、最下層は基盤層の崩落や側方からの流れ込みによる細砂層が堆積する。この3層の上面に対応して壁も稜線をもつ。遺物は上層を中心に出土している。1は北宋銭で天聖通寶の篆書体。2から5は土師器皿。2は皿、その他は壺。2は端部に、4は内面にススが付着していることから、灯明皿として使用されたのであろう。

名 称	初鋲年	錢径(A)/錢徑(B)	内径(C)/内徑(D)	錢 厚	量 目
天聖通寶	1023	24.43mm 24.49	21.10mm 21.10	0.95~1.30mm	2.66g

土坑19（図80）

平面はほぼ円形。東側の点線部分は調査中に崩れたところである。また北側の壁がオーヴァーハンプするが旧の形状を留めてないのであろう。南北2.09m、東西2.05m、深さ1.15m。底面の標高は3.41m。底面の中央やや南側が一段深く凹地になる。遺物は上層から出土している。1、2は土師器皿。3は壺。厚手の作りである。4は常滑系陶器の鉢。このほか圓化していないが、砥石が1点出土している。両端部が欠けており現状で長さ15.2cm、幅7.2~8.2cm、高さ6.3~7.1cm。長辺の総てが磨かれ多角柱状を呈する。

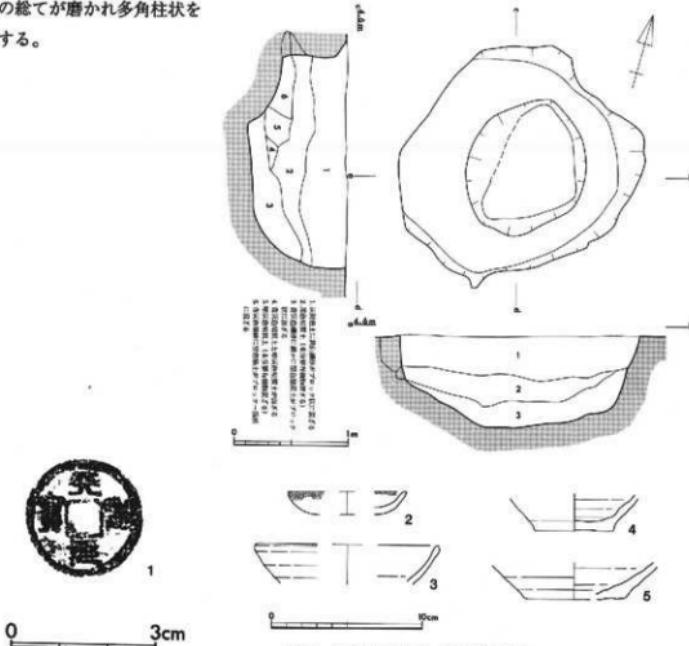
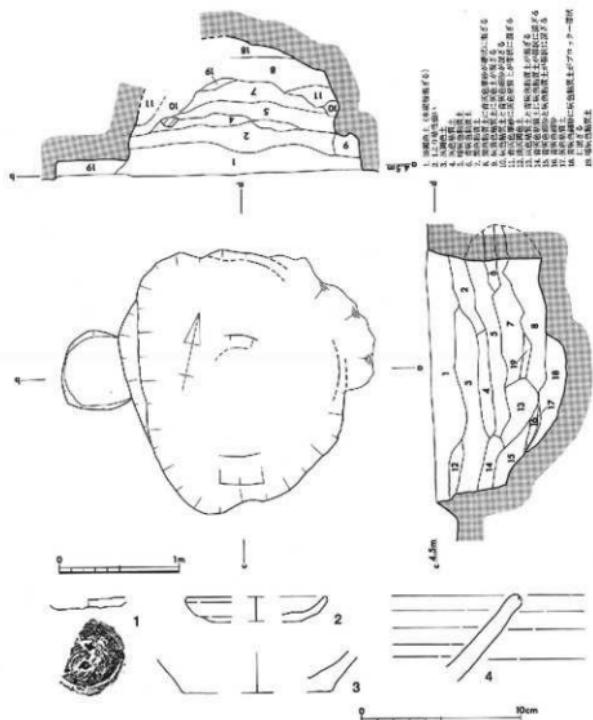


図79 B1区土坑18・遺物実測図
(造構はS=1/40、遺物はS=1/3、銭貨は実大)



土坑20（図81）

溝6～8を壊して造られている。平面はほぼ円形。南北2.53m、東西2.68m、深さ1.02m。底面の標高は3.4mとなる。掘り形の壁は土層の堆積過程に対応して稜線をもっている。土層は10層まで細分しているが、大別すれば、下層が細砂混じりの粘質土、中層が未分解有機物混じりの粘質土、そして上層が地山ブロック混じり土となる。

土坑は建物2とも切り合い関係にあるが、建物2の北東隅の柱穴を壊していることからも、土坑の方が新しいものと考えられる。土坑内からは固化できる遺物は出土していない。溝6からは青磁碗が1点出土している。底部外面は中央部を島状に残し釉をかきとっている。15世紀前半。

土坑21（図82）

平面は南北に長いいびつな楕円形。掘り形は北側が二段掘りとなる。南北4.74m、東西2.14m、検出面からの深さ99cmである。底面の標高は3.46m。遺物は上層を中心に出土している。実測図のうち北側の一段高い面から出土したものが11～15、その他は、その南から出土したものである。1から5は壊。1は逆ハ字に開く体部をもつ。復元口径12.2cm。4、5は体部中ほどを強いナデ

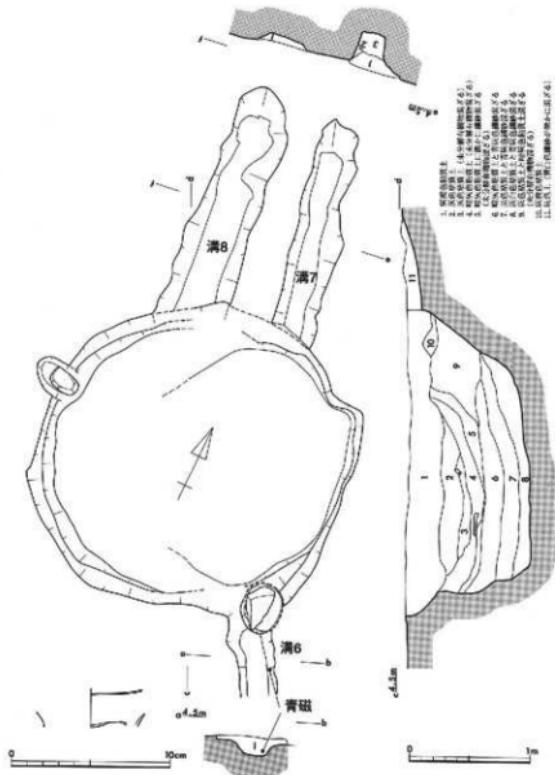


図81 B1区土坑20・遺物実測図(遺構はS=1/40、遺物はS=1/3)

により凹みをもたせている。口縁端部は薄くひきだす。色調は肌色。4は口径12.7cm、器高4.2cm、底径5.9cm。5は口径12.9cm、器高5.4cm、底径3.8cm。6は皿。色調は肌色。体部は強いナデにより稜をもつ。7、8は台付き皿。7は柱状部がずんどうな形をしているもので、皿部も浅い形状をなすようである。皿部と底部の中心を貫くように穿孔されている。8は脚端部に面をもつ。皿部の中心から脚部に向けて空隙があるが貫通はしていない。9は国産陶器の口縁部。端部は肥厚し浅い沈線をもつ。10は古瀬戸の卸し皿。角張った口縁部をもち、口縁端部は凹みをめぐらせる。古瀬戸前期様式のIV期、13世紀。11、12は皿。底部の外縁から体部の立ち上りに強いナデで段を付けたものである。13、14は壺。14は底部の器肉が厚く、体部との境には段が付く。15は常滑系陶器の壺。口縁端部は上下に拡張し、若干内側に傾く。13世紀。16は弥生土器の甕。上下に拡張した口縁端部の外面に二条の凹線文を施す。松本V-1様式。

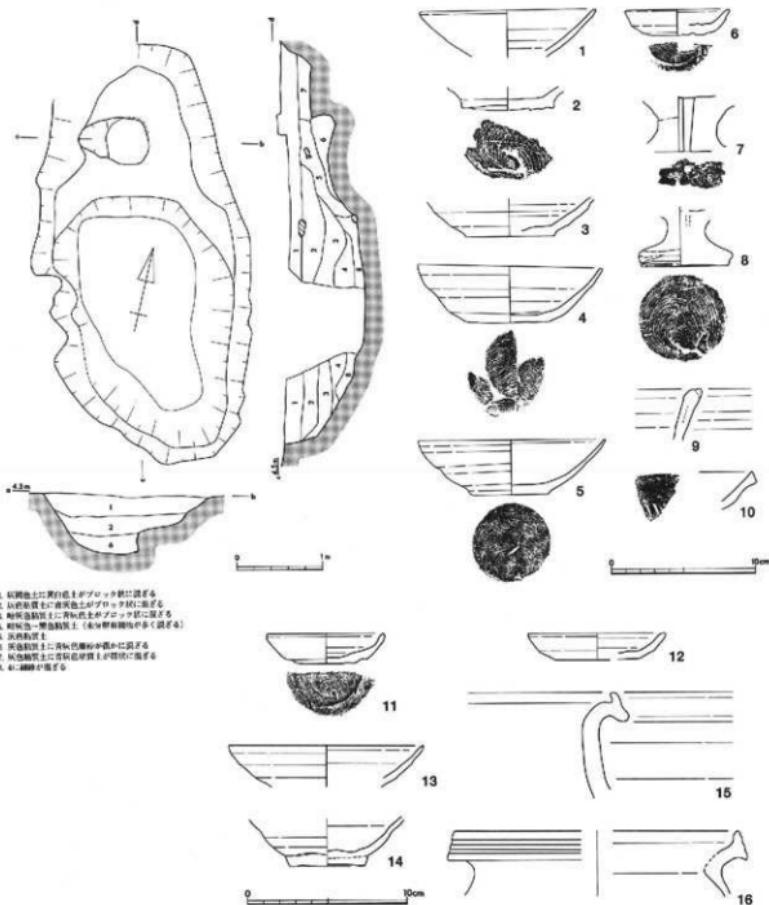


図82 B1区土坑21・遺物実測図（遺構はS=1/3）

土坑22（図83）

調査区の東端で検出したもので一部を調査区側溝により壊している。平面は南側がすゝまる長椭円形。南北3.32m、東西1.85m、深さは45cm。底面の標高は3.51m。埋土は2層で、壁もそれと対応する高さに稜線をもつ。上層の木炭粉混じりの層からは土師器や青磁が出土している。また底面近くでは土師質のすり鉢が出土している。1から4は土師器。1、2は皿。1は底部外縁から体部の境と体部中ほどに強いナデで稜を作りだしている。2は体部下半を強くナデで稜を作っている。1は復元口径7.0cm、器高1.6cm、底径3.7cm。2は口径7.9cm、器高1.5~2.1cm、底径4.3cm。3、

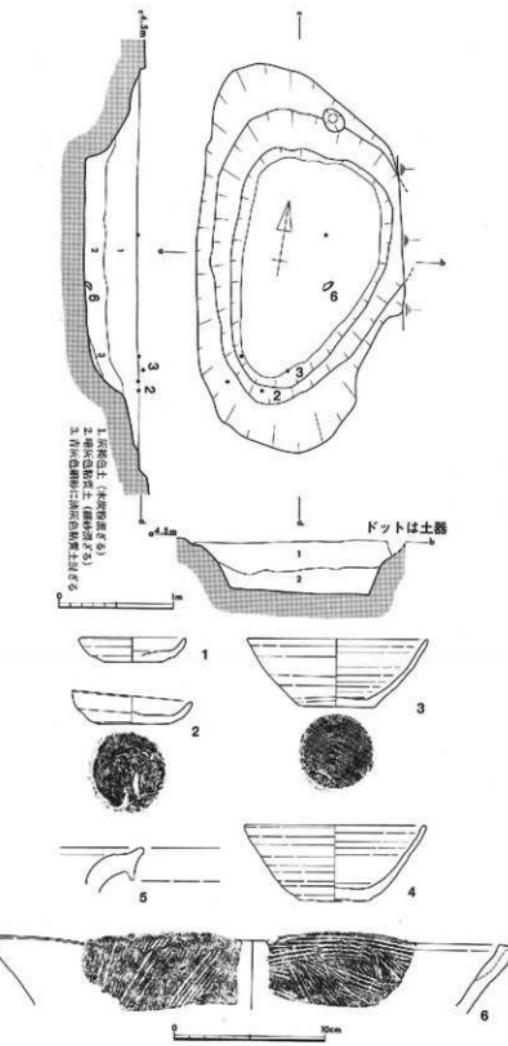
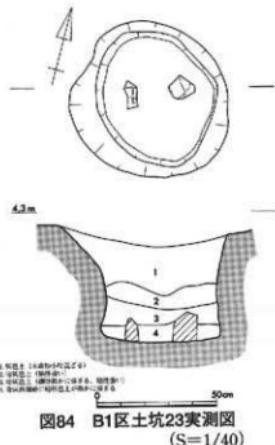


図83 B1区土坑22・遺物実測図 (遺構はS=1/40、遺物はS=1/3)



4は壺。ロクロ成形痕を残さない丁寧な作りをしている。体部はわずかに円みをもって立ち上り、器高が高い。3、4は、ほとんど同じ大きさで口径12cm、器高4.5cm、底径5.0~5.1cm。色調は肌色をしている。4は国産陶器の壺。端部は上下に拡張し、外面はナデで凹みをもたせている。5は土師質の鉢。内外面ともハケ調整の後ナデ。復元口径34.2cm。

土坑23（図84）

平面は径64~65cmの円形。検出面からの深さ46cm。底面の標高は3.76m。西側の壁は凸状になる。底面からは自然石が2点出土している。

5. 井戸

ここでは土坑内に構造物の残っているものを井戸として抽出した。

井戸1（図85）

掘り形の平面はいびつな円形。南北1.85m、東西2.50m、深さ1.25m。壁は垂直に掘り込まれて底面に至る。構造は縦板隅柱横棟型の相当する。井側は掘り形の中心から西寄りに置かれている。井戸の廃棄後、部材を引き抜くなどしているため、原位置を保っていたのは、隅柱（b）1点、横棟（c）1点、縦板（a）1点である。隅柱は幅7~8cmの角材で長さは39cm。打ち込んでいる先端側は切り落としただけで、とがらせていない。上端の側面二方向にはぞを穿ち、横棟をはめこむ構造である。はぞは幅2.5cm、奥行き3.0~3.5cm、高さは6.0~10.5cm以上である。横棟は長さ87cm、幅は8cmで両端は5cm、厚さ3cm。縦板は遺存状態が悪いが現状で幅8cm、厚さ0.5~1.0cm、高さ83cm。井戸廃棄時の祭祀行為は確認できない。引き抜かれた縦板などの部材の一部が投棄されていた。井戸廃棄後はごみ穴として利用されたようであり、多量の未分解有機物が出土している。遺物の多くは第1層から出土している。土師器のほか青磁が他の土坑よりも多い点が注目される。

1から4は土師器。色調はいずれも肌色から濃い肌色。磨滅しており残りは良くない。1、2とも体部は円みをもって立ち上がる。1は口径10.2cm。2は復元口径11.1cm。3は底部。器肉は厚い。4は壺の底部から体部。5、6は瓦質土器。5は土鍋。口縁部は「く」字に屈曲し端部は下方に延びる。6は鉢。内面にはハケ調整が見られる。7から11は中国製磁器。7・8が白磁皿。7は口禿げの口縁部をもつ皿で匁類に相当する。8は底部。9~11は龍泉窯系青磁碗の太宰府I~5類。外面に削り出しの鏽薙弁文を有する。図示していないが、このほかにも青磁のI~5類の破片が1点出土している。13世紀。12は弥生土器の低脚壺。草田6期。又、鐵滓1点（221.30g）も出土している。

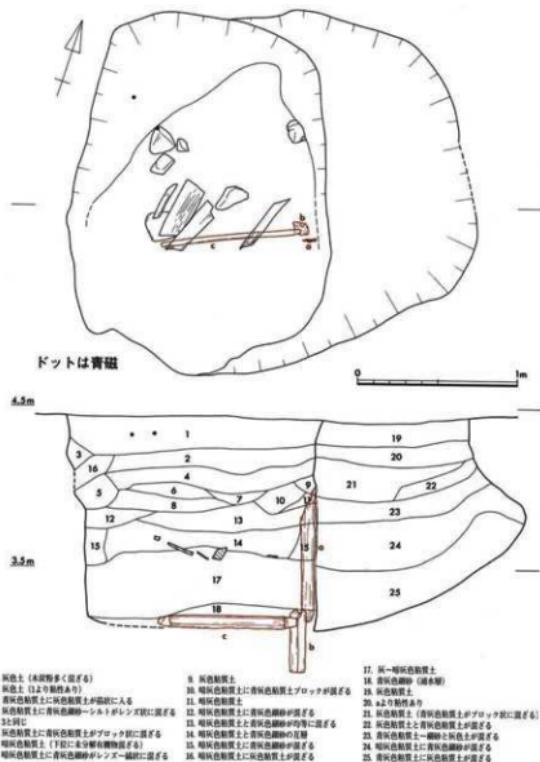


図85 B1区戸1実測図 (S=1/30)

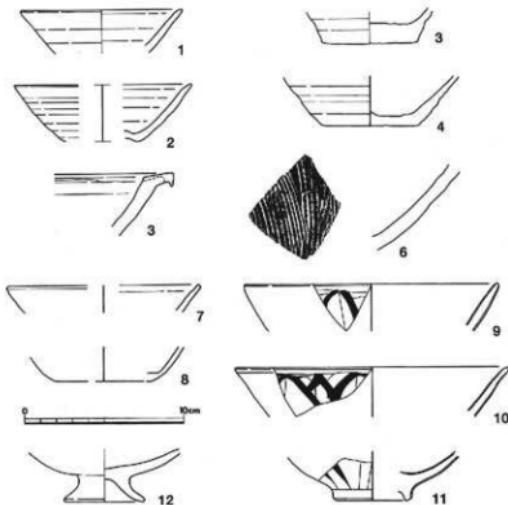


図86 B1区井戸1遺物実測図 (S=1/3)

井戸2(図87)

トレンチ調査により掘り形は壊しているため、掘り形の規模及び埋土の状況についての情報は全く無い。

円形曲物を4段積み上げた構造のものだが、最上段もトレントレンチ調査の際に破損しており、図上で復元している。曲物内の埋土は未分解有機物混じりの暗灰色粘質土が堆積し、その下層が涌水層である細砂層になる。上から3段目、4段目は涌水層である細砂層に据えられていたようである。

曲物は径47.6~48.3cm、高さ18.2~19.3cm、厚さ3mm前後のものである。いずれも内面にケビキが入れられており、繊維じも確認できる。

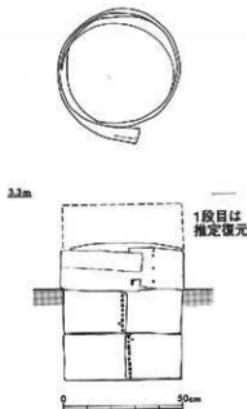


図87 B1区井戸2実測図 (S=1/20)

第2節 館跡以前の遺構・遺物

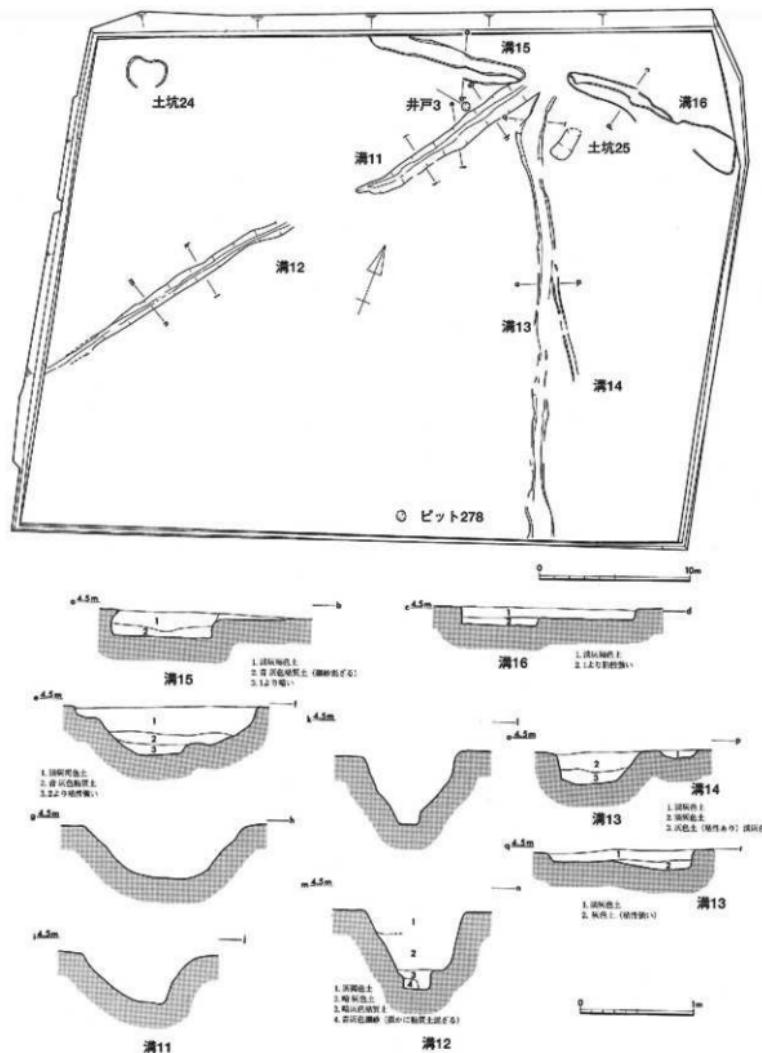


図88 B1区館跡以前の遺構配置図（全体図はS=1/300、溝跡の断面はS=1/40）

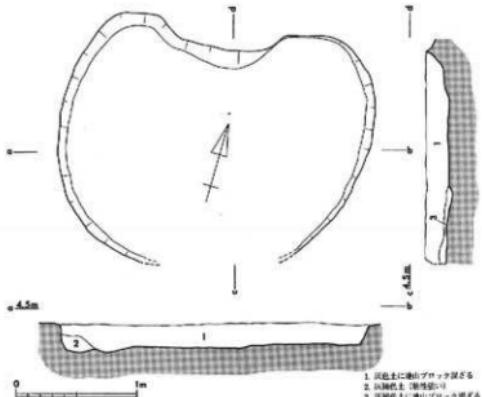


図89 B1区土坑24実測図 ($S=1/40$)

土坑24（図89）

調査区北西部に位置する浅い皿状の土坑である。グライ化の進行した埋土の状況から当該期の遺構と判断した。平面はやや歪な円形で、南側はトレンチで壊している。東西2.25m、南北2.05m以上。底面の標高は4.2m。平面の大きさに較べて深さが無いが、削平されていることを考慮しなければならないであろう。遺物は全く出土していない。

柱穴内遺物出土状況（図90）

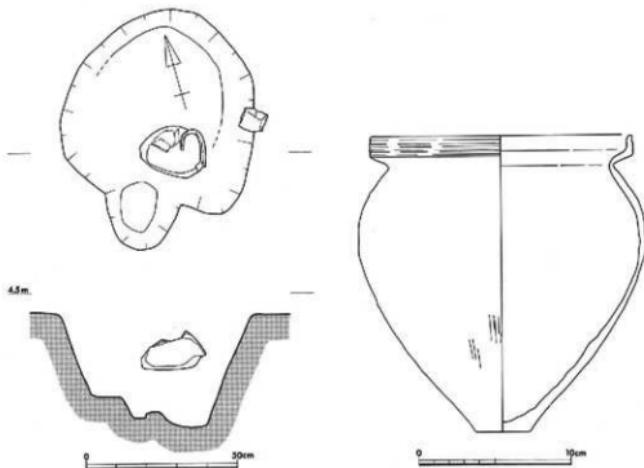


図90 B1区柱穴内弥生土器出土状況実測図（遺構は $S=1/15$ 、遺物は $S=1/3$ ）

館跡以前の遺構として認識できたのは、その可能性のあるものまで含めて土坑2、井戸1、溝6条である。時期は弥生時代の終わりから古墳時代初頭と考えられる。当該期の遺構密度は他の調査区に較べて高い。本調査区が当該期の居住域の一部であり、その中心は調査区外の北側に拡がっていることを示すものといえよう。

図89、図90は時期は明確にし得ないが、当該期の遺構の可能性のあるものである。

柱穴の底面から浮いた状態で弥生後期前葉の壺が出土している。他に遺物は見られないが中世の遺構の可能性もある。

壺は横倒しの状態で出土した。胸部から口縁部の上面側は失われており、全体に風化、磨滅が顕著である。口縁端部は上下に拡張し、外面は風化のためはっきりしないが、4条の凹線文を施しているようである。復元口径17.2cm、器高19.5cm。

溝(図88・91)

溝は全部で6条検出されるが、その伸長方向により次の三つのグループに分けられる。

①溝15・16 調査区北東隅を東西方向に延びる。両者の間は途切れているが位置関係から見て同時期に有機的な関係を持って機能していたものと考えられる。二つの溝ともその南側に浅い段をもつ。埋土はグライ化の進行した粘質土であった。断面は上開きのコ字形。幅1.50m前後、深さ17~18cm。

②溝11・12 溝15・16のちょうど間の辺りから始まり南北方向に延びる溝11と、その同一線上に築かれた溝12とからなる。溝11は断面が浅いU字形をなす。幅1.1~1.6m、深さ45cm前後。溝12は北東端を土坑10に、南西端を土坑1によって切られている。調査区西壁には断面が確認できることから、更に調査区外にも延びていくようである。埋土は基本的に4層で、その堆積レヴェルに対応して掘り方は稜線ないし段をもつ。溝12は幅87~99cm、深さ65~69cm。

③溝13・14 調査区を縱断するように北西北から南南東に延びる溝13と、その東に位置し、溝13に切られる溝14とからなる。溝13は多数の中世の柱穴によって切られており、掘り方の上場線は途切れ途切れにしか追うことはできない。断面は上開きのコ字形を呈する。埋土は上下2層からなる。幅0.75~1.29m、深さ18~30cm。溝14は幅33cm、深さ8cm前後の小規模な溝である。南端はトレンチで壊しており全形はわからない。断面は浅い皿状を呈する。

図91の1、2は溝15・16の周辺から、3は溝11、4~8は溝13より出土した。1から3は、松本V-1様式の壺。口縁部は「く」字に屈曲し、端部は上下に拡張する。外面には4~6条の凹線文を施している。3は壺の頸部から肩部。外面にはクシ状工具による直線区画文と、ハケ原体による

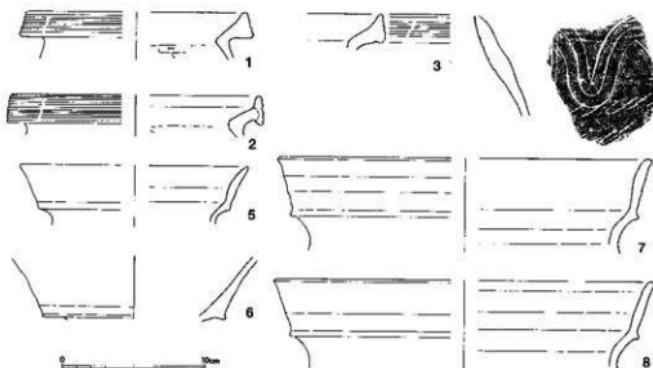


図91 B1区弥生時代の溝跡出土遺物実測図 (S=1/3)
(1、2は溝15・16周辺、3は溝11、4~8は溝13)

刺突文を2段施した後に、クシ状工具による波状文をめぐらす。類例を知らないが胎土から見てV-1様式壺のものと思われる。5は複合口縁の壺。口縁端部は薄く引き出され、稜は外方へ突出する。草田5期。6は鼓型器台の上台部。7、8は複合口縁を呈する大形の壺。口縁端部は肥厚し面をもつ。複合口縁部の稜は外方へ鋭く突出する。草田6期。

土坑25(図92~95)

調査区北東部に位置する。北東側はブロック塀の基礎で壊されているため、旧の形状を窺うことはできない。平面は隅円長方形。長さ2.2m、幅は南側で1.2m、北側で0.93mと南側が広い。断面

は浅い皿状を呈し
検出面からの深さ
は30cm。底面の
標高は4.26~4.30
mで、ほぼ水平で
ある。土坑掘り形
の埋土は2層で遺
物は、どちらから
も出土している。

土器は草田5期
に相当するもので
器種は壺、大形壺、
壺、鼓型器台が一
括して出土した。
いずれも破片になっ
て土坑内一面に散
らばっており、完
全な形に復元し得
るものはなかった。

1から11は複合
口縁の壺。口径は
15.9~19.2cm。1
から4、6は口縁
部は外反して立上
り端部に向けて薄
く引き出している。
複合部の稜はやや
下方気味に鋭く突
出する。5は端部
を強くナデ、短く
わずかに外方へ折

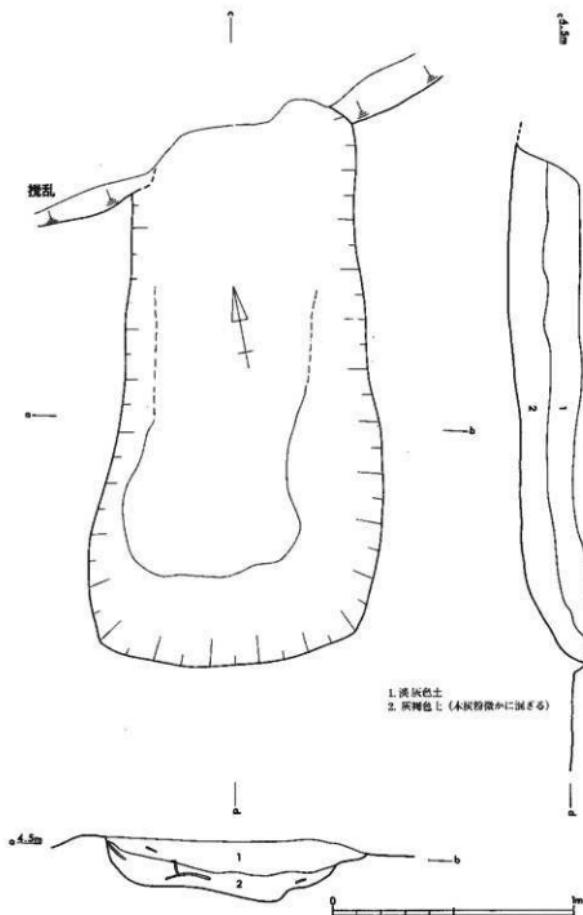


図92 B1区土坑25実測図 (S=1/20)

れる。7は端部が短く屈曲する。9はやや厚手。11は端部が短く外に屈曲する。肩部の外面には波状文(9)、刺突文(10)、二段の平行線文と刺突文(11)をめぐらすものも見られる。12、13は底部。12はかすかに平底を残す。

図95の1は複合口縁の大形の壺。口縁部は直線的に立上る。口縁端部は外側に肥厚し面をもつ。肩部には二段に平行線文とその間に羽状文をめぐらしている。

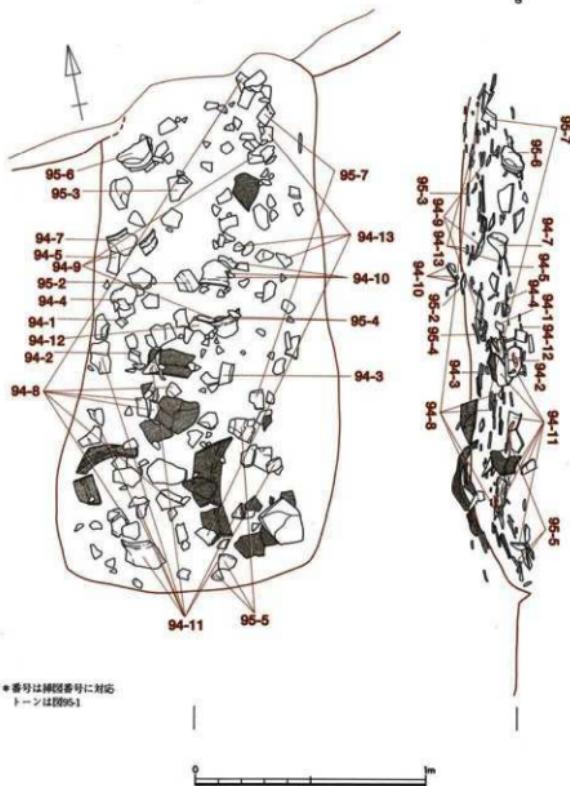


図93 B1区土坑25実測図(2) (S=1/20)

2は壺の口縁部。口縁端部は肥厚し面をもつ。稜は鋭く水平に突出する。口縁部外面には二個一对の竹管文を施す。頸部には貝殻腹縁による羽状文とその下位に竹管文をめぐらす。3は壺の頸部から胴部上位の破片。外面には10条程度のクシ描き平行沈線と5条の平行沈線の間に二段の波状文をめぐらしている。4から7は鼓型器台。4、5は上台部。径21.5~21.9cm。6は筒部。7は下台部で径19.3cm。

これら土器の時期はその特徴から草田5期に比定できる。

井戸3(図96)

調査区中央北寄り、溝11のすぐ北に隣接して位置している。平面形は74×61cmの椭円形である。検出面からの深さは1.02mで、底面の標高は3.3mである。掘り形に密着する形で井側がわずかに

残存していた。規模は48×43cmで残存高は27cm。井側は涌水層である細砂層（5層）に据えられており、東側にわずかに傾いていた。この細砂層の上面には、意図的に破碎した土器片を厚さ約20cm敷き詰めていた。砂の吹き上げを防ぐ装置か、あるいは浄水装置のようなものではないかと考えられる。こうした構造は姫原西遺跡でも見つかっている。この上層は細砂混じりの粘質土（4層）が堆積し、薄い粗砂（3層）を挟んで、土器群が投棄されていた。土器群は掘り形全体ではなく、

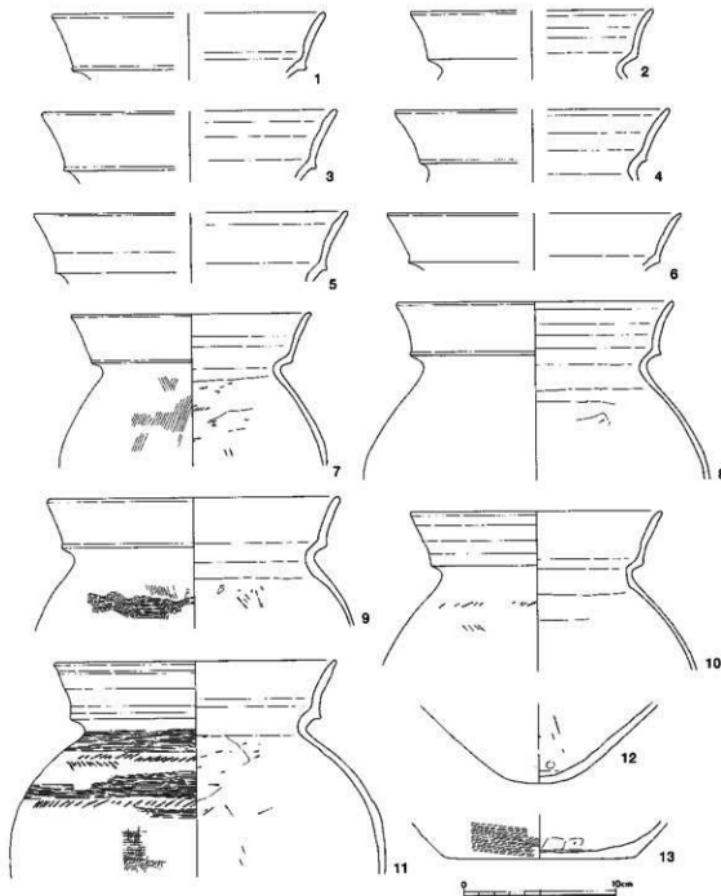


図94 B1区土坑25出土遺物実測図（1）（S=1/3）

北西の壁際から固まって出土している。この土器群は完形品は1点も無いが、17は底部を欠き、口縁から胸部が真っ二つの状態で出土している。また14、16が最下層に敷き詰めた破片とも接合関係にあるのは注意される。

図97は出土した遺物を載せている。1から12は壺の口縁部。口径は13.5～17.3cm。口縁端部は肥

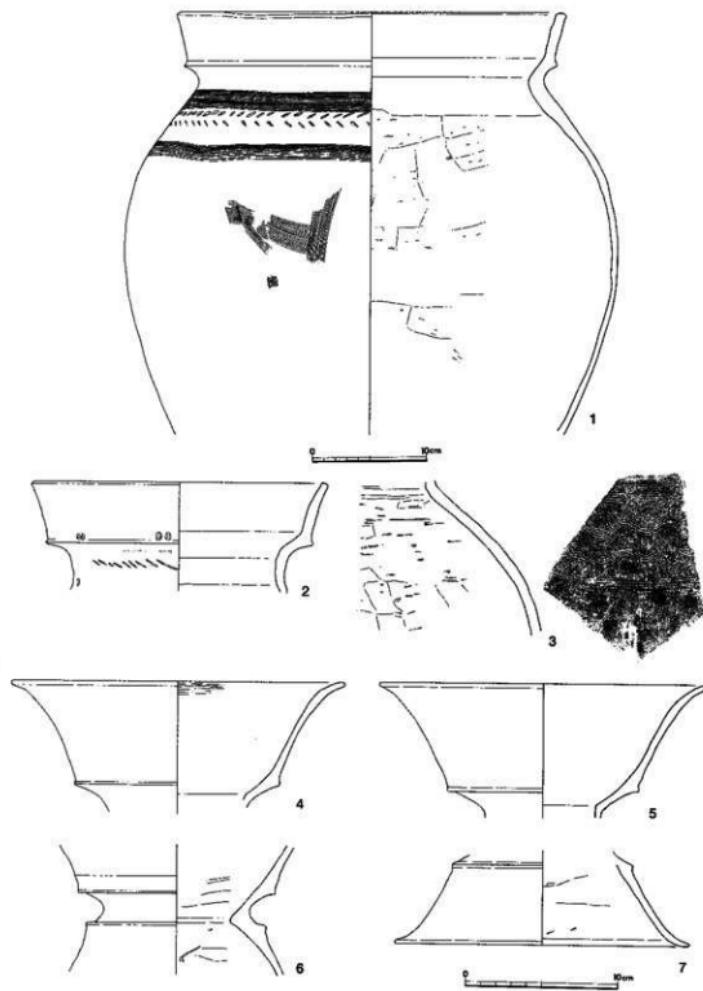


図95 B1区土坑25出土遺物実測図（2）（1はS=1/4、2～7はS=1/3）

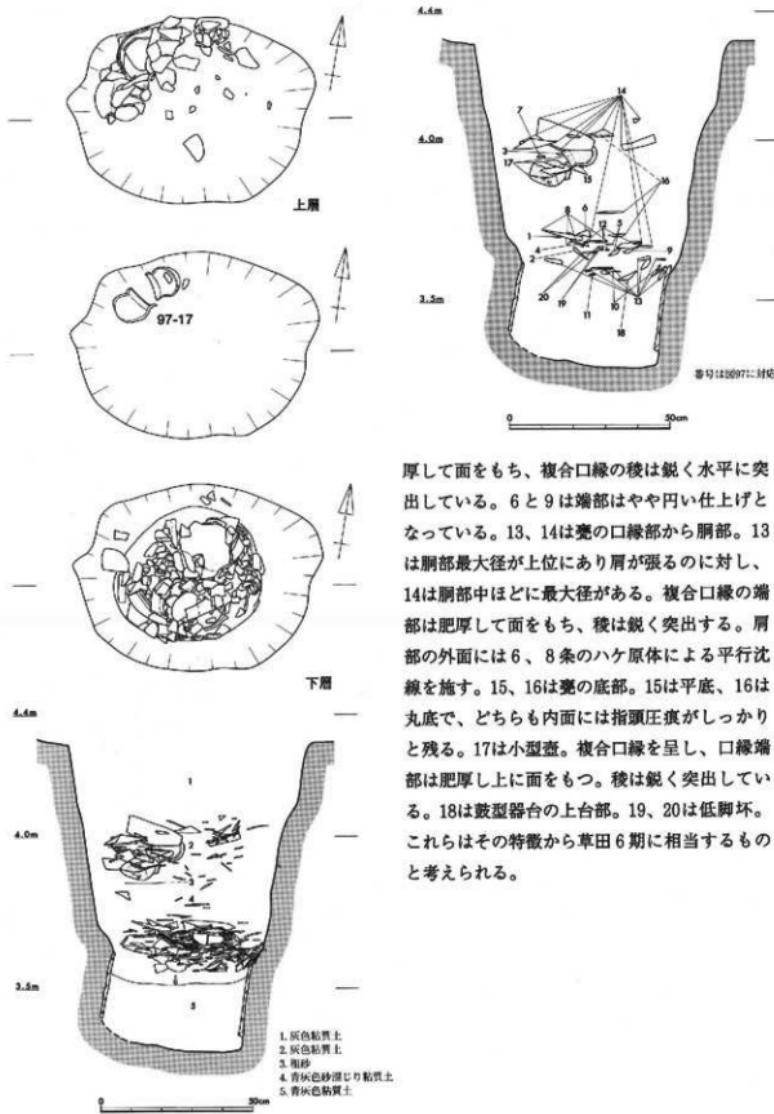


図96 B1区井戸3実測図 (S=1/15)

厚して面をもち、複合口縁の後は鋭く水平に突出している。6と9は端部はやや円い仕上げとなっている。13、14は壺の口縁部から胴部。13は胴部最大径が上位にあり肩が張るのに対し、14は胴部中ほどに最大径がある。複合口縁の端部は肥厚して面をもち、稜は鋭く突出する。肩部の外面には6、8条のハケ原体による平行沈線を施す。15、16は壺の底部。15は平底、16は丸底で、どちらも内面には指圧痕がしっかりと残る。17は小型壺。複合口縁を呈し、口縁端部は肥厚し上に面をもつ。稜は鋭く突出している。18は鼓型器台の上台部。19、20は低脚坏。これらはその特徴から草田6期に相当するものと考えられる。

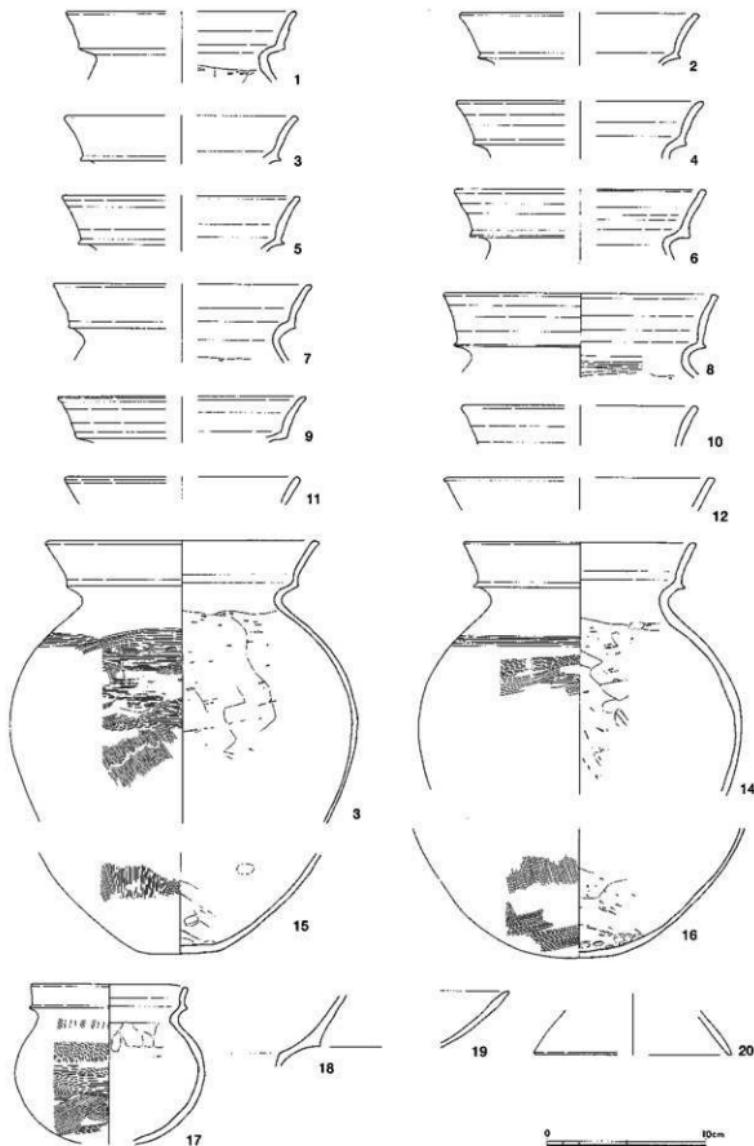


図97 B1区井戸3出土遺物実測図 (S=1/43)

第3節 小結 ～中世以前の遺構について～

B 1 区では①13～15世紀の中世の居館跡に伴う遺構・遺物②弥生時代後期前半から古墳時代初頭の遺構・遺物を検出した。①については最終章にゆずり、ここでは②の様相を B 区全体から概観してみたい。

1. 弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構配置について

このころは A 区を流れていた河道も、沼地へとその姿を変えている段階であろう。当該期の遺構は、B 1 区で井戸、土坑がある。このほか当該期と思われる遺構は B 1 、 B 2 区で溝が、C 区で溝と土坑が検出されている。微高地部分が居住域として利用されたことが窺える。この他にも中世の館跡造成などの開発により削平を受け消滅した遺構も多いものと思われるため、遺構の粗密といった点は言及できない。

その後、中世に館が築かれるまでの微高地上の様子は、いま一つ明確にし得ない。B 2 区で古墳時代中期の井戸が見つかっている他、A ・ B 区で古墳時代～奈良時代の須恵器が出土していることから集落が営まれていたものと理解されるが、遺物量は激減している。

2. 弥生時代末から古墳時代初頭の井戸について

出雲平野で当該期の井戸は、姫原西遺跡 3 基と神戸川左岸の古志遺跡群中の下古志遺跡で 2 基調査されている。⁶ このうち本遺跡と姫原西遺跡の 3 基について表にまとめた。両遺跡の井戸の共通点としては、井戸の底に意図的に破碎した土器を敷き詰めている点である。基盤層が砂層であることから砂の噴出を防ぐとともに、地下水の浄化をはかったものと理解されよう。相違点としては井戸祭祀の在り方が挙げられる。姫原西遺跡では完形品が投棄された後、祭祀に使用されたと考えられる石器を置いている。これに対し、蔵小路西遺跡では破片のみが出土しており、日常生活で使用されていた土器が井戸廃絶後に投げ込まれたものようである。即ち井戸祭祀は行われていないものと認識される。下古志遺跡の 2 例は草田 5 ～ 6 期に相当する時期のものである。いずれも素掘りのもので底面に土器を敷くなどの装置は構造はない。井戸祭祀は 2 例とも行われているようである。今後の資料の増加に期待したい。

註 出雲市教育委員会の米田美江子氏にご教示頂いた。

付記 文章中で使用した土器編年については B 2 区の註を参照されたい。

遺跡名	構 造	埋り形	井 戸	敷き詰められた土器の組成	井戸祭祀に使用された遺物の内訳
姫原西遺跡	SK11 丸太分割くりぬき井戸	二段掘り 上：径 1.5m , 深さ 0.6m 下：径 1.1m , 深さ 1.3m	径 32 ～ 33cm × 55cm 高さ 70cm	甕、広口甕、高杯、器台	甕 1, 瓢 6, 直混甕 1, 叩き石を最終段階に投棄
	SK17 丸太分割くりぬき井戸	二段掘り 上：1.45 × 1.25m 深さ 0.7m 下：径 0.5 ～ 0.6m 深さ 45cm	径 45cm 高さ 45cm	甕、壺	甕 2 湾曲結合式縦縫
	SK19 丸太分割くりぬき井戸	二段掘り 上：径 2.5m , 深さ 0.5m 下：逆円錐台形 径 1.75m , 深さ 1.1m	径 36 × 38cm 高さ 95cm	甕 (九州系)、甕 低脚壺、手づくね土器 注口土器 用途不明木製品	甕 1 ないし 2, 甕 1 石墨標石器を最終段階に投棄
井戸 3	丸太くりぬき井戸 ※遺存状態悪く詳細は 不明	格円形 長径 0.74 × 0.61m	径 48 × 45cm 高さ 27cm	甕、低脚壺、鼓型器台	甕 5 ? (破片)、甕 1 (完形品でない) 小石 1

第3章 B2区の調査

概要

A、B1区につづく中世の館跡と館跡が築かれる以前の遺構を確認した。調査区の中心からやや西を南北方向に継続する館跡の西大溝があり、その東側が館跡となる。遺構としては建物8棟、土坑24基、墓5基、溝10条以上を確認した。館以前の遺構としては弥生時代後期から終末の溝1条、古墳時代中期の井戸1基を検出している(159頁以降)。本章でもA、B1区と同様に館跡の時代、館跡以前の時代の順に記述して行きたい。

第1節 中世の遺構と遺物

1. 基本層序(図98) 東壁と南壁では土層番号が異なっているが、およそ次のような層序となる。水田耕作土の下層には部分的に床土が見られ、その下層が旧耕作土となる。この層からは中世土器のほか近世の陶磁器も見られた。その下が遺構面を形成する灰黄色シルト層となる。遺構面と旧耕作土の間には中世土器の包含層が見られる。この包含層には地点ごとに粗密があり、図100のように土器滴りを形成するのは調査区中央から南及び東側であった。この層は標高3.05mの辺りでグライ化し漸次細砂層へと移行していくようである。遺構面の標高は4.2m。遺構面は基本的には一面だが調査区の北東隅辺りではこの上層の6層(A-Bライン)上面からも遺構が築かれている。館内の整地層と考えられるが、木炭粉混じりの黒褐色土のため埋土の識別が困難であり、平面的には遺構の存在を確認できなかった。

2. 中世の遺構と遺物の概要(図99) 調査区中央から西側を南北に継続する大溝の存在により方形居館であることが認識される。遺構は調査区の東半分に集中している。また、遺構は重複し切り合いを見ることから長期間機能した館跡であることが考えられる。館内からは建物8棟、土坑24基、井戸1基、墓5基、溝10条以上を検出した。柱穴は650あまりが検出されており、建物を復元できなかつたが、更に多くの構造物が存在したものといえよう。また柱穴内には礎板、柱根が非常に良好な状態で残されていた。なお、井戸は内部施設の確認できた1基のみしか数えておらず、その他可能性のあるものも統て土坑に含めている。墓については館跡廃絶後の遺構として認識している。溝は北西から南東に延びるものと東西方向に延びるものを見られる。東西方向に延びる溝8・9は大溝によって切られており大溝構築以前の遺構と考えられる。

遺物は土師器を中心に、常滑、越前、丹波、備前系、古瀬戸の国産陶器のほか中国製磁器も微量ながら出土している。中世土器の組成は館内の空間利用を考える手がかりとなるものであり、他の調査区と比較して「まとめ」の章で述べたい。また平野に立地しているため木製品などの有機質遺物も良好な状態で遺存していた。主な木製品としては漆器、円形曲物等の容器類や櫛、下駄の服飾具のほか特異なものとして竹笛が見られた。

3. 遺構に伴わない遺物(図100・101) 1から9は土師器。1から3は皿。1は逆ハ字に開く体部をもつ。2、3は口縁部が内湾気味に立ち上がる。3は底部外縁から体部の立ち上りを強くナデて段を作る。法量は口径7.0cm、器高1.2~1.4cm、底径4.2~4.3cm。4から6は壺。4、5は逆ハ字に直線的に開くタイプ。6は底部と体部の境が円く仕上げられている丁寧な作りである。法量は

4、5が全く同じで口径11.4cm、底径5.4cm、器高3.0cm。6は口径11.8cm、器高4.7cm。7は椀。体部はロクロ成形痕を残し、端部は肥厚し玉縁状を呈する。口径13.8cm、器高4.2cm、底径7.4cmの大形品である。9は台付き皿。脚部は成形時に歪んでいるが何かにぶつけたのであろう。10は備前焼の擂り鉢。Ⅲ期に比定される。14世紀。⁽¹⁾ 11から21は中国製磁器。12世紀から15世紀までの資料が見られる。21は白磁、それ以外は青磁である。11は皿。口縁部は輪花をもつ。12世紀後半から

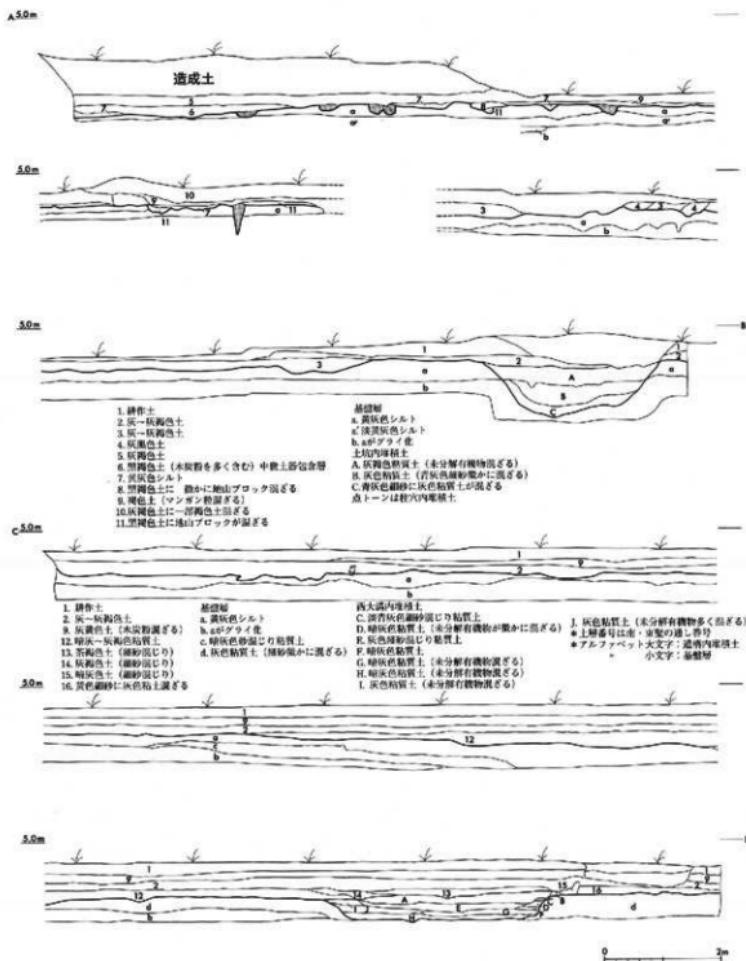


図98 B2区土層堆積図 (S=1/80)

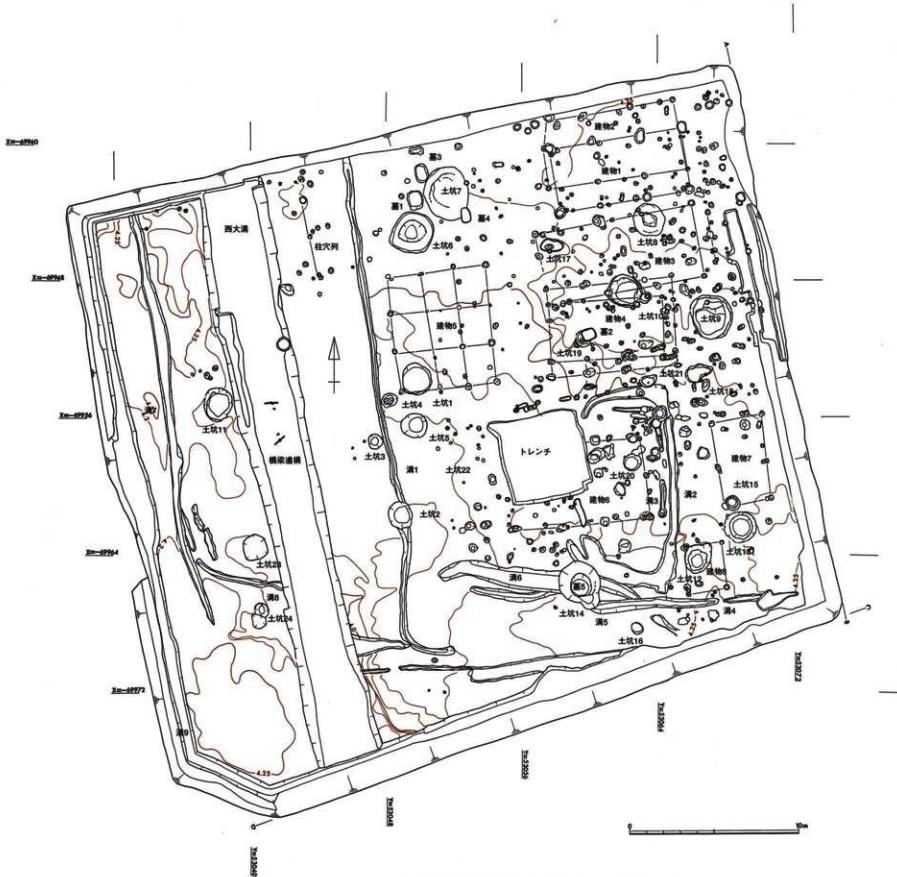


図99 B2区全体図 (S=1/200、5cmセンター)

13世紀。13は太宰府分類の龍泉窯系I～5類の碗。⁽²⁾ 外面に削りだしの鏡運弁文を有する。15は同III類。13世紀。16から19は口縁部が外反するもので上田D類に相当する。⁽³⁾ 14世紀後半から15世紀前後。20は底部。高台部疊付およびその内部は露胎である。21は白磁碗IV類の底部。外面は施釉されない。12世紀。

4. 西大溝

形状と規模（図99・102） N-12°～Wの方向に延びる。検出した南北の長さは34m。幅は3.2～4.6m。検出面からの深さ0.5～0.6m。断面形は上開きのコ字形から細いU字形を呈する。g hラインで計測すると側壁は約65度前後の強い傾斜角で立ち上がる。c d～e f間の西岸は二段掘りになっており、検出面から20cm下がった辺りで段をもつ。底面の標高はa b ラインから順に3.62m、3.51m、3.54m、3.48m、3.64mとなり南北の端

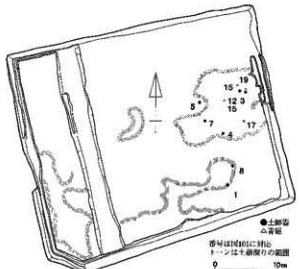


図100 B2区遺構に伴わない遺物出土位置図
(S=1/600)

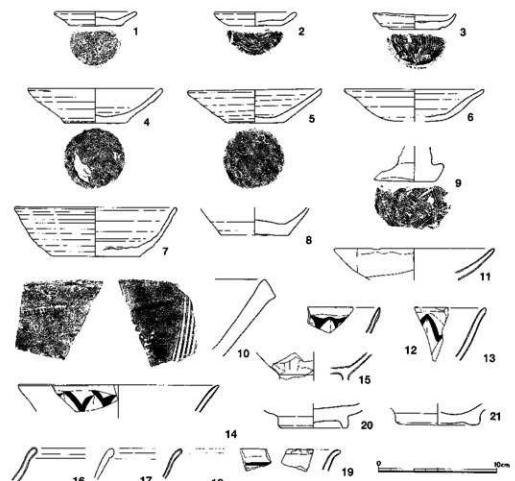


図101 B2区遺構に伴わない遺物実測図 (S=1/3)

—1～9!中世七器器・10備前・11～20青磁・21・白磁—

が低くなるようである。

堆積状況（図102） 各セクションラインごとに細分の在り方は異なるが次のように大別できる。上層から①人為的埋土②未分解有機物混じりの粘質土③細砂主体の層となる。①は各面の第1層に相当するものである。未分解有機物が多量に混ざった粘質土である。地山ブロックを含んでいることから大溝が機能しなくなった段階の埋め土と考えられる。②は水平ないしは中央部に向けて傾斜する堆積状況から自然堆積と考えられる。この中からは未分解有機物、木製品のほか土器も出土しており、館内で不用になったゴミが投棄されていったようである。③は細砂を主体としている。これは雨などの影響による大溝の掘り方の基盤層からの流れ込みに伴うものだろう。また大溝底面は凸凹しているが、雨水などが溜り凹地化したためであろう。以上のことから大溝は底にわずかに水が溜ったような状態で機能していたようである。後述するように大溝内の出土遺物は時間軸があることから大溝も永い間機能していたことが分かるが、搬り返し等の痕跡は確認できなかった。

遺物出土状況（図103・104） 出土遺物は土器、木製品のほか金属製品等多数出土した。これらは①磨滅が認められないこと②その場で押しつぶされたような状態で出土しているものも見られるところから、館内で使用していたものが投棄されたことを裏付けている。また竹、葉っぱ、動植物遺体（貝化石）等の未分解有機物も多く見られた。捨てられた木片の中には余材、廃材の類も多く見られたことから館内で木製品が生産されていたことが推察される。さらに鉄滓（鍛冶滓）も2点、計70.57g出土している。他の遺構からも羽口、鐵滓などの製鉄関連遺物が出土していることから、館内には鍛冶場が存在したようである。

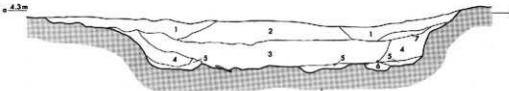
次に図103で全体の密度を見ると橋梁遺構の周辺が特に多いようである。橋からゴミが投棄されることが多かったものであろうか。大溝の内、外、どちら側から投棄されたかを数べると、やはり内側から投棄されたケースが多かったものと推察される。

大溝の掘削と埋没の時期 大溝の掘削年代の決定は難しい。埋土中から出土した陶磁器を見ると13世紀を中心とし、15世紀代を下限とするようである。館内の遺構から出土する陶磁器も概ね13世紀代を中心とし15世紀代まで見られる。大溝は13世紀代に掘削され15世紀代に埋没したものとしておきたい。大溝は溝状遺構を切って掘削されている。またc dのラインのやや北の大溝底面にも土坑の基底部の痕跡かと思われる円形の落ち込みが確認されたほか、c dラインの断面には柱穴状の落ち込みも確認できる。大溝掘削以前にこの地が居住空間として既に利用されていたことを示しているといえよう。ただし、当該期の建物跡や遺構について抽出できていない。今後、溝の軸方向や埋土中の遺物を更に吟味する必要があろう。

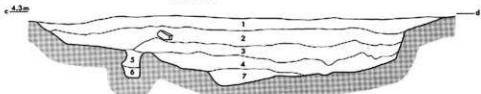
大溝と土塁 既に削平されて違ってはいないが西大溝の東には土塁が造っていたものと考えられる。これは大溝の東側には遺構の見られない空白部分が認められることからも首肯されよう。大溝掘削によって発生した土を盛り上げて築かれたものと思われる。A区の東大溝と合わせて、土塁をめぐらした方一町の居館が復元される。

橋梁遺構（図105） 橋梁遺構と呼称はしているものの上の上部構造は残されていない。橋脚も途中からへし折られており全体の形状、規模は不明な点が多い。

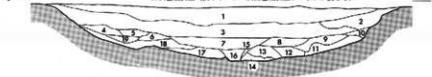
大溝の東西の岸からほぼ等距離の地点に構築されている。遺構は南北に1.5mの距離を空けて打ち込まれた二本の橋脚（A・B）と、橋脚の脇の杭（C、D）と部材（a、b）から構成される。杭CとDに組み合せた部材a bは、上から見ると橋脚に対してハ字状になる。橋脚は幅7cm×



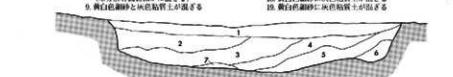
1. 灰一灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)
2. 黄褐色土一白色粘質土ブロックが混ざる
3. 灰褐色土
4. 灰一灰褐色粘土 (灰色一薄白色粘質土ブロック混ざる)
5. 灰褐色土と細砂混ざる
6. 灰褐色土と細砂が混ざりて形成する
7. 灰色粘質土



1. 灰一灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)
2. 灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)
3. 灰褐色土一黑色粘土 (本分部有機物多量に混ざる)
4. 灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)
5. 灰褐色土
6. 灰褐色土と細砂混ざる
7. 灰色粘土



1. 灰褐色粘土 (本分部有機物多量に混ざる)
2. 褐褐色土一白色粘土と灰色粘質土と黒色質土と混ざる
3. 灰褐色土
4. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
5. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
6. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
7. 灰褐色土
8. 灰褐色土 (細砂が混ざりて形成する)
9. 灰褐色土 (細砂が混ざりて形成する)
10. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
11. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
12. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
13. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
14. 灰褐色土と白色粘土が混ざる
15. 灰褐色土
16. 灰褐色土
17. 灰褐色土
18. 灰褐色土
19. 灰褐色土
20. 灰褐色土



1. 灰褐色土 (本分部有機物混ざる)
2. 灰褐色土
3. 灰褐色土と白色粘土質土と混ざる
4. 灰褐色土一灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)
5. 灰褐色土
6. 青灰色粘土 (白色粘土質土と混ざる)
7. 灰褐色土と青灰色粘土質土と混ざる



1. 灰褐色土 (細砂混ざる)
2. 灰褐色土
3. 灰褐色土と白色粘土質土と混ざる
4. 灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)
5. 灰褐色土
6. 灰褐色土
7. 灰褐色土
8. 灰褐色土 (本分部有機物混ざる)
9. 灰褐色土 (本分部有機物混ざる)
10. 灰褐色土 (本分部有機物多量に混ざる)

a-j)は図104に対応

0 1m

図102 B2区西大溝層堆積図 (S=1/40)

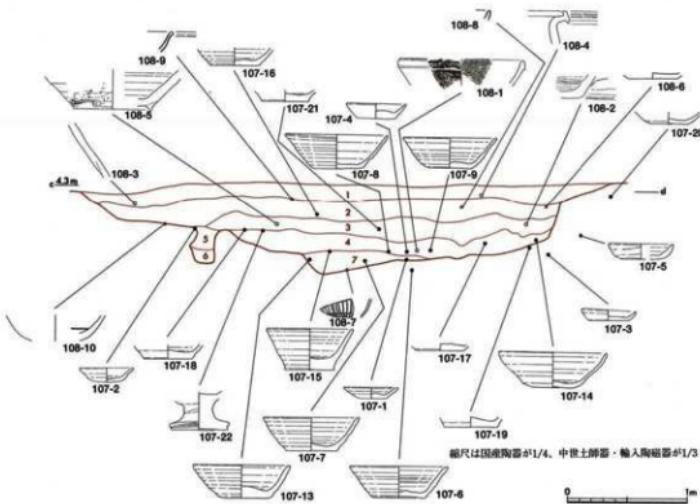


図103 B2区西大溝出土土器垂直分布図 (S=1/40)

14cm、長さ約90cmの板材の先端をとがらせたものある。二本の橋脚は同一の材を割取って用いており接合関係にある。橋脚の頂部は標高3.7mのところで失われている。先端標高は2.79mにまで達している。橋脚の脇に打ち込まれた杭は50cmに満たない短いものである。面取りもなされていない割取っただけの材の先端を鉛筆状にとがらせている。上位にくりこみを施し板材を嵌め込んでいる。板材はライフル形とでも形容できる形状をしている。板材aには角釘（ 0.5×0.6 cm角）が打ち込まれている。この杭と部材は橋脚とその上部の部材（橋桁・梁・橋板）との固定を補助したものか、橋脚自体の保護などを目的としたものか不明である。なお部材の計測値は別表の通りである。

橋梁遺構の東側には遺構が全く存在していない点が注目される。前述したように大溝の東側には土壘が構築されていたものと想定している。この橋梁遺構を渡った所で土壘が途切れ、館の門が築かれていたものと考えられる。

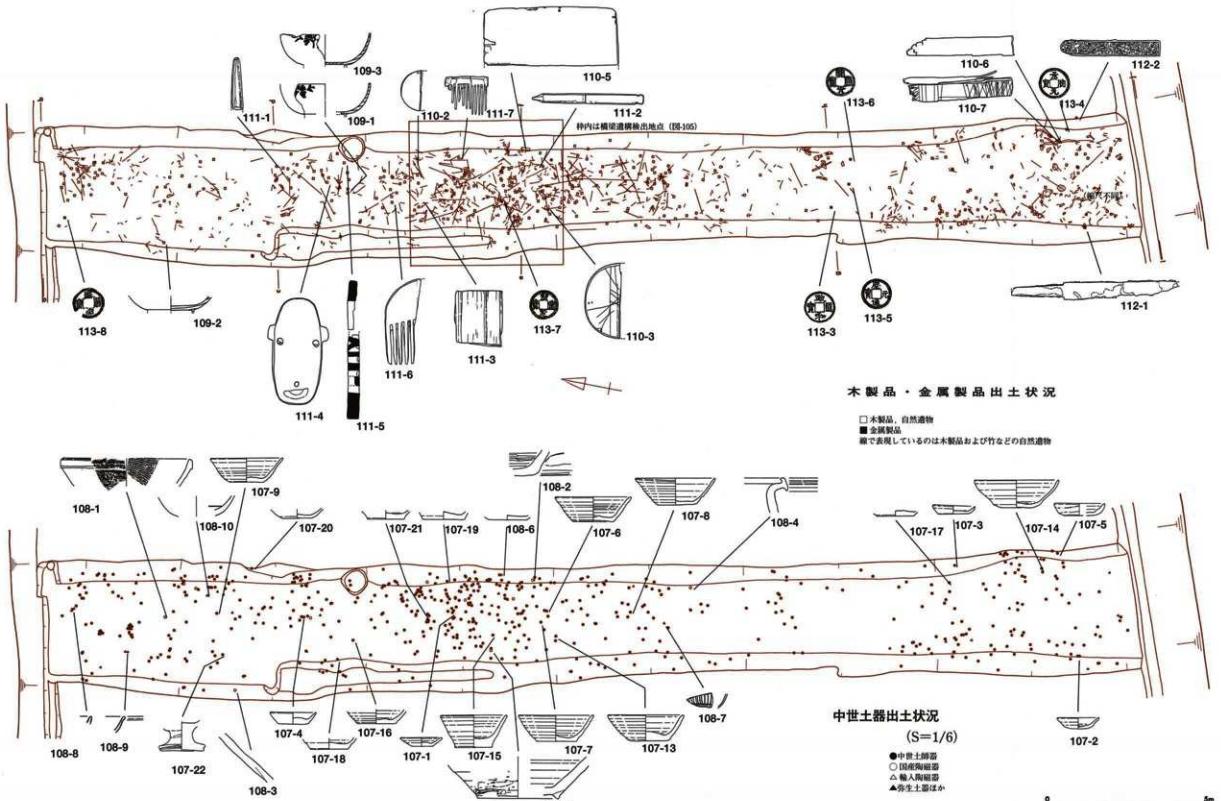


図104 B2区西大溝遺物出土状況実測図 (S=1/120)